史跡妙心寺境内・平安京跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡妙心寺境内・平安京跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財(遺跡)は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう 努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市 考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極 的に進めているところです。

このたび、防災工事に伴う史跡妙心寺境内の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 所 長 井 上 満 郎

例 言

1 遺跡名 史跡妙心寺境内・平安京跡

2 調査所在地 京都市右京区花園妙心寺町1番地

3 委 託 者 宗教法人 妙心寺

4 調査期間 平成25年度:調査その1・2、平成26年度:調査その3・4

調査その1:2013年7月10日~2013年12月20日

調査その2:2013年12月10日~2014年2月21日

調査その3:2014年8月1日~2015年1月21日

調査その4:2014年9月24日~2015年1月8日

5 調査面積 調査その1:857㎡

調査その2:187㎡

調査その3:66㎡

調査その4:235㎡

6 調査担当者 調査その1:丸川義広・柏田有香・南出俊行・辻 裕司・布川豊治

調査その2:辻 裕司・丸川義広

調査その3:モンペティ恭代

調査その4:モンペティ恭代

7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「衣笠山」・「花園」を参考

にし、作成した。

8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)

9 使用標高 T.P.: 東京湾平均海面高度

10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。

11 遺構番号 各調査の各調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。

12 遺物番号 各調査ごとの種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類

は番号のみとし、瓦類は「瓦」、土管は「土管」、銭貨は「銭」、金属製品

は「金」、石製品は「石」、木製品は「木」、壁土・窯壁は「土」を前に付

けた。

13 土器編年 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」

『研究紀要 第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年 に準拠

した。

750	頃	84	0頃	9	30頃		101	0頃	1	080~	-90頃		1180	頃	12	70頃		136	0頃		144	0頃		150	0頃	15	580~	90頃		1660	頃	17	740年	F代は	ā 18	820 2	F代頃		
]	Į.		II		\coprod			IV			V		7	I		VII			VIII			ΙX			Χ			XI			XII			XIII		7	XIV	
	古日	新	古	中第	斤さ	r中	新	古	中	新	古	中	新	古口) 斜	古	中	新	叶	\pm	新	古	中	新	古	中	新	古	中	知	古	中	新	古	中	新	古	中第	新

14 本書作成 丸川義広・辻 裕司・モンペティ恭代

15 執筆分担 丸川義広:第1章、第2章、第6章

辻 裕司:第3章

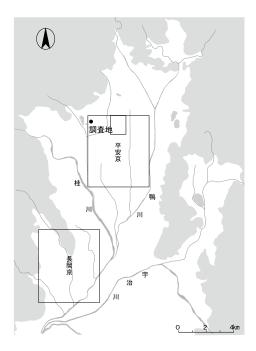
モンペティ恭代:第4章、第5章、第6章

16 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業

務職員があたった。

17 協力者 調査に際しては妙心寺の島崎義範氏、柴山昌実氏、東海元昭氏にご協力

をたまわった。



(調査地点図)

目 次

第1章 調査経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 位置と環境	1
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	3
3. 既往の調査	4
第2章 調査その1 (平成25年度)	7
1.経 過	7
2. 遺 構	9
(1) 本所調査区	9
(2)微妙殿調査区	17
(3) 韶陽院跡調査区	20
3. 遺 物	26
(1) 土器類	26
(2)瓦類	36
(3)銭貨	41
(4) 金属製品	42
(5) 石製品	45
(6) 木製品	46
(7) 壁土・窯壁	49
4. 小 結	49
第3章 調査その2 (平成25年度)	51
1. 経 過	51
2. 遺 構	51
(1)1区の遺構	54
(2)2区の遺構	55
(3)3区の遺構	55
(4) 4区の遺構	58
(5)6区の遺構	60
(6)7区の遺構	60
(7)8区の遺構	61
(8) 9区の遺構	61

(9) 1	0区の遺構	63
(10) 1	1区の遺構	64
(11) 1	2区の遺構	64
(12) 1	3区の遺構	66
(13) 1	4区の遺構	66
3. 遺	物	68
(1) =	上器類	69
(2) 1	瓦類	71
(3) 🕏	金属製品	71
4. 小	結	71
第4章 調査	その3 (平成26年度)	73
1. 経	過	73
2. 遺	構	73
(1)	1 区の遺構	76
(2) 2	2区の遺構	77
(3) 3	3区の遺構	79
(4) 5	5区の遺構	79
(5) 6	6区の遺構	82
(6) 7	7 区の遺構	82
(7) 8	8区の遺構	83
(8)	9区の遺構	83
3. 遺	物	85
(1) =	上器類	85
(2) 1	瓦類	87
(3) 釒	践貨	87
4. 小	結	87
第5章 調査	その4 (平成26年度)	89
1. 経	過	89
2. 遺	構	91
(1)	1 区の遺構	91
(2) 2	2 区の遺構	93
(3) 3	3 区の遺構	95
3. 遺	物	95
(1) =	上器類	95
(2) }	瓦類	98

(3)	銭貨	j	• • • •	• • • •	• • • •	• • • •	•••	 •••	• • • •	 	 • • • •	• • •	 	 • • • •	• • • •	• • • •	• • • •	 •••		••••	••••	••••	98
(4)	金属	禹製 品	1	• • •			•••	 •••	• • • •	 	 	• • •	 	 • • • •				 •••		••••	••••		99
4.	小		結		• • • •			•••	 •••	• • •	 	 	• • •	 	 				 •••		••••	••••		99
第6章	ま	ح	め						 	•••	 	 		 	 				 	• • •	• • • •			101

図 版 目 次

図版1	調査その1	遺構	1	本所調査区 東半部全景(西から)
			2	本所調査区 井戸2 (南から)
			3	本所調査区 溝1(南西から)
図版 2	調査その1	遺構	1	本所調査区 墓群 (南西から)
			2	本所調査区 墓16北・16中・16南(北から
			3	本所調査区 墓8(東から)
			4	本所調査区 墓9北(北東から)
			5	本所調査区 墓9中(東から)
			6	本所調査区 墓 9 南(西から)
図版3	調査その1	遺構	1	本所調査区 墓10北(東から)
			2	本所調査区 墓13 (南から)
			3	本所調査区 墓13 (南東から)
			4	本所調査区 墓14(南から)
			5	本所調査区 墓15 (北から)
			6	本所調査区 墓19 (東から)
			7	本所調査区 墓20 (西から)
			8	本所調査区 墓21 (東から)
図版4	調査その1	遺構	1	本所調査区 西半部全景(東から)
			2	本所調査区 池30 (北東から)
図版5	調査その1	遺構	1	本所調査区 南西部全景(北から)
			2	本所調査区 溝502(北から)
			3	本所調査区 湿地520 (北東から)
図版 6	調査その1	遺構	1	微妙殿調査区 西半部全景(北東から)
			2	微妙殿調査区 東半部全景(北西から)
図版7	調査その1	遺構	1	韶陽院跡調査区 全景1 (東から)
			2	韶陽院跡調査区 西端部の状況(北東から)

図版8	調査その1	遺構	1 韶陽院跡調査区 全景 2 (東から)
			2 韶陽院跡調査区 東半部の土取穴(西から)
			3 韶陽院跡調査区 土管の組み合せ状況(右上は土坑284、左下は
			土坑287、南東から)
図版9	調査その1	遺物	池 30、土坑 62·515·519、溝 1 出土土器
図版10	調査その1	遺物	土坑 284 出土土器
図版11	調査その1	遺物	土坑225・墓出土遺物
図版12	調査その1	遺物	墓甕1
図版13	調査その1	遺物	墓甕2
図版14	調査その1	遺物	瓦類
図版15	調査その1	遺物	土管・銭貨・金属製品
図版16	調査その1	遺物	石塔·石製品
図版17	調査その1	遺物	木製品1
図版18	調査その1	遺物	1 木製品 2
			2 壁土·窯壁
図版19	調査その2	遺構	1 1区 全景 (西から)
			2 2区 全景(北東から)
図版20	調査その2	遺構	1 3区 全景 (北から)
			2 3区 南・中拡張区 近景(東から)
			3 3区 北拡張区 近景(東から)
図版21	調査その2	遺構	1 4区 全景 (南から)
			2 4区 近景 (北から)
			3 4区 柱穴 2 (北から)
図版22	調査その2	遺構	1 6区 全景(南東から)
			2 7区 全景 (南から)
図版23	調査その2	遺構	1 8区 全景(西から)
			2 9区 全景 (南から)
図版24	調査その2	遺構	1 10区 全景 (北から)
			2 10区 遺構埋土検出状況 (北東から)
			3 10区 溝6完掘状況(東から)
図版 25	調査その2	遺構	1 11区 全景 (東から)
			2 11区 溝1完掘状況(北から)
図版26	調査その2	遺構	1 12区 全景 (北から)
			2 13区 全景 (北から)
図版27	調査その2	遺構	1 14区 全景 (北から)

			2	14区 近景(南東から)
図版 28	調査その2	遺物	出土	造物
図版 29	調査その3	遺構	1	1区 西部全景(西から)
			2	1区 東部全景(東から)
			3	2区 全景(東から)
			4	3区 全景(北から)
図版30	調査その3	遺構	1	5区 東部全景(西から)
			2	5区 中部全景 (南東から)
			3	5区 西部全景(西から)
			4	6区全景(北から)
図版31	調査その3	遺構	1	7区 立会調査断面(北西から)
			2	8区 全景(西から)
			3	9区 北部全景(南から)
			4	9区 南部全景(南から)
図版32	調査その4	遺構	1	1区 全景(西から)
			2	1区 西壁 溝10断面(東から)
			3	1区 東壁 溝10断面(西から)
図版33	調査その4	遺構	1	1区 溝10東端 完掘状況及び畔状遺構(南西から)
			2	1 区 井戸12(南から)
			3	1区 保護砂と不織布による遺構保護状況(西から)
図版34	調査その4	遺構	1	2区 全景(東から)
			2	3区 東部全景(東から)
			3	3区 西部全景(東から)
図版35	調査その4	遺物	1 🗵	溝10出土土器類

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:2,500)	2
図2	既往調査位置図(1:2,500)	5
図3	本所調査区 調査前全景(南東から)	7
図 4	本所調査区 調査風景(北から)	7
図5	微妙殿調査区 調査前全景(西から)	7
図6	微妙殿調査区 調査風景(北東から)	7

図7	韶陽院跡調査区 調査前全景(東から)	7
図8	韶陽院跡調査区 調査風景(東から)	7
図 9	調査その1 調査位置図 (1:2,500)	8
図10	本所調査区 慰霊風景(北東から)	9
図11	本所調査区 配置図(1:400)	10
図12	本所調査区 南西部南壁断面図(1:60)	11
図13	本所調査区 遺構平面図(1:200)	12
図14	本所調査区 墓実測図(1:40)	13
図15	本所調査区 井戸 2 実測図(1:40)	15
図16	本所調査区 溝 1 断面図(1:40、調査区北壁)	15
図17	本所調査区 池 30 実測図(1:100)	16
図18	微妙殿調査区 配置図(1:400)	17
図19	微妙殿調査区 西半部南壁断面図(1:40)	18
図20	微妙殿調査区 遺構平面図(1:100)	19
図21	微妙殿調査区 墓74実測図(1:30)	20
図22	微妙殿調査区 溝 40 断面図 (1:40)	20
図23	韶陽院跡調査区 配置図(1:400)	21
図24	韶陽院跡調査区 南壁断面図(1:60)	22
図25	韶陽院跡調査区 遺構平面図(1:150)	23
図26	韶陽院跡調査区 桶 248 実測図(1:30)	24
図27	韶陽院跡調査区 土管組288実測図(1:40)	24
図28	池 30、整地層 41、土坑 42·62·515·519·523、溝 1·502 出土土器実測図(1:4)······	27
図29	土坑 284 出土土器実測図(1:4)	28
図30	土坑 225・514 出土土器実測図(1:4)	30
図31	墓副葬品実測図1 (1:2)	32
図32	墓副葬品実測図2(1:2)	33
図33	墓甕実測図1 (1:6)	34
図34	墓甕実測図2 (1:6)	35
図35	軒丸瓦拓影及び実測図(1:4)	36
図36	軒平瓦・軒桟瓦拓影及び実測図(1:4)	37
図37	小丸瓦・飾瓦拓影及び実測図(1:4)	38
図38	平瓦拓影及び実測図(1:4)	39
図39	土管拓影及び実測図(1:4)	40
図40	土管・丸瓦拓影及び実測図(1:4)	41
図41	銭貨拓影 (1:1)	42

図42	金属製品実測図(1:2)	43
図43	石製品実測図1 (1:4)	44
図44	石製品実測図2 (1:3)	45
図45	木製品実測図1 (1:3)	47
図46	木製品実測図2 (1:3)	48
図47	2 · 3 · 13 · 14区調査前全景 (南から)	51
図48	3区調査風景(南から)	51
図49	調査その2 調査位置図 (1:2,000)	52
図50	調査その2 調査区配置図 (1:1,000)	53
図51	1 · 2 区遺構実測図 (1:80)	54
図52	3 · 13区遺構実測図(1:80) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	56
図53	3 · 13区断面図(1:80) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	57
図54	4 · 6 区遺構実測図 (1:80)	59
図55	7 区遺構実測図(1:80)	60
図56	8 ・ 9 区遺構実測図 (1:80)	62
図57	10区遺構実測図(1:80)	63
図58	11 · 12区遺構実測図(1:80) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	65
図59	14区遺構実測図(1:80)	67
図60	土器実測図(1:4)	70
図61	軒丸瓦拓影及び実測図(1:3)	71
図62	鉄製品実測図(1:4)	71
図63	鉄製品	71
図64	9 区調査前全景(南西から)	73
図65	2区調査風景(西から)	73
図66	調査その3 調査位置図 (1:2,500)	74
図67	調査その3 調査区配置図1 (1:1,000)	75
図68	調査その3 調査区配置図2 (1:1,000)	75
図69	調査その3 調査区配置図3 (1:1,000)	76
図70	1 区遺構実測図(1:50)	77
図71	2 区遺構実測図(1:80)	78
図72	3 区遺構実測図(1:80)	80
図73	5 区遺構実測図(1:80)	81
図74	6 区遺構実測図(1:50)	82
図75	7区立会調査断面模式図(1:40)	82
図76	8 区遺構実測図(1:50)	83

図77	9 区遺構実測図(1:80)	84
図78	銭貨拓影 (1:1)	86
図79	出土銭貨	86
図80	1 区調査前全景(南西から)	89
図81	2区調査前全景(南東から)	89
図82	3 区調査前全景(東から)	89
図83	1 区調査風景(南東から)	89
図84	調査その4 調査位置図 (1:2,500)	90
図85	調査その4 調査区配置図(1:500)	90
図86	1 区西壁断面図(1:100)	91
図87	1 区遺構実測図(1:100)	92
図88	井戸12断面図(1:40)	93
図89	2 ・ 3 区遺構実測図(1:100)	94
図90	溝10出土土器実測図(1:4)	96
図91	井戸12出土土器実測図(1:4)	97
図92	2 区出土磁器	98
図93	出土瓦拓影及び実測図(1:4)	98
図94	金属製品実測図(1:2)	99
図95	1 区東壁及び一条通から隣華院断面図(1:100)	99
	表目次	
表1	調査一覧表	1
表2	調査その1 遺構概要表	9
表3	本所調査区 墓一覧表	14
表4	調査その1 遺物概要表	26
表5	調査その2 遺構概要表	52
表6	調査その2 遺物概要表	69
表7	調査その3 遺構概要表	76
表8	調査その3 遺物概要表	85
表9	銭貨一覧表	86
表10	調査その4 遺構概要表	91
表11	調査その4 遺物概要表	95

史跡妙心寺境内・平安京跡

第1章 調査経過

1. 調査に至る経緯

本調査は、史跡妙心寺境内における、重要文化財(建造物)妙心寺仏殿ほか12棟緊急防災施設耐震改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

本事業では、防災のための貯水槽を4箇所に設置し、それに伴って配水管の埋設工事が計画された。これらの地点は、史跡妙心寺境内と平安京跡にあたっており、事前の調査が必要であった。このため、文化庁・京都府教育庁指導部文化財保護課(以下「府文化財保護課」という)・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「市文化財保護課」という)と妙心寺が協議し、財団法人京都市埋蔵文化財研究所(2013年10月1日から公益財団法人に移行)が埋蔵文化財確認調査の委託を受け、調査を実施する運びとなった。

貯水槽は、平成25年度は宗務本所前駐車場、微妙殿北西部、韶陽院跡北端の3箇所(調査その1)、平成26年度は北門東側通路の1箇所(調査その4)に設置されることが決定された。配水管工事に対する調査区(調査その2・その3)の位置は、平安京の条坊に関連する遺構の検出が見込まれる地点を中心に市文化財保護課が設定した。調査にあたっては府文化財保護課と市文化財保護課の指導を受けた。調査に際しては、大本山妙心寺、大森設計事務所、地域計画建築研究所株式会社、竹中造園、上宗建設株式会社、ニッタン株式会社などの協力を受けた。

調査は以上の4つの工事に伴い実施した。各々の調査経過の詳細は第2~5章で解説している。

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

妙心寺は、京都盆地北西部の山塊縁辺部に形成された北から南に派生する台地(低位段丘)上に 表1 調査一覧表

年 度	工事内容	調査区	期間	面 積	主担当者
調査その 1 平成25年度	貯水槽工事	本所調査区、微妙殿調査 区、韶陽院跡調査区	2013年7月10日 ~12月20日	857 m²	丸川義広
調査その 2 平成25年度	配管工事	1~4区、6~14区	2013年12月10日 ~2014年2月21日	187 m²	辻 裕司
調査その3 平成26年度	配管工事	1~3区、5~9区	2014年8月1日 ~2015年1月21日	66 m²	モンペティ恭代
調査その 4 平成26年度	貯水槽工事	北門1~3区	2014年9月24日 ~2015年1月8日	235 m²	モンペティ恭代

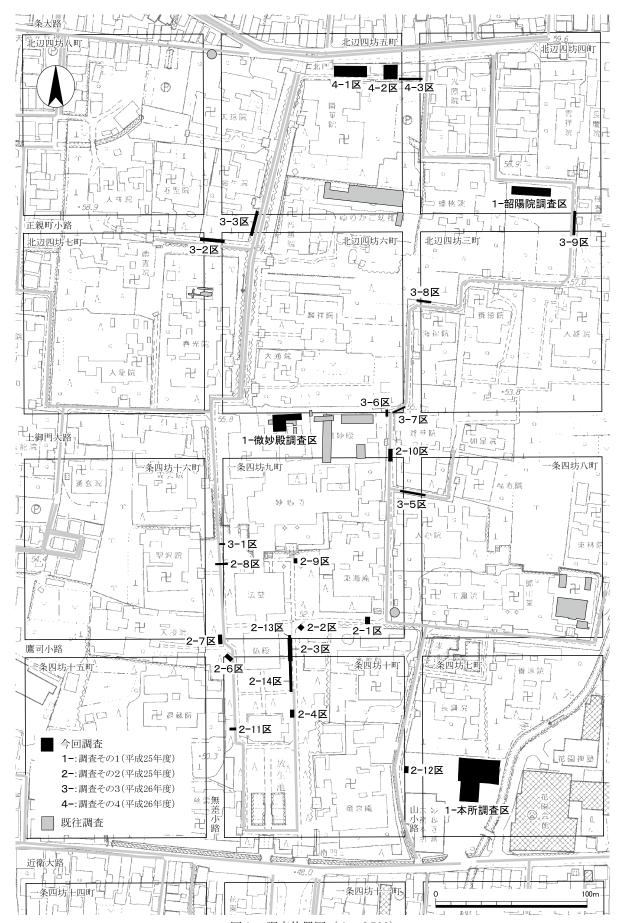


図1 調査位置図(1:2,500)

立地する。標高は、北門付近の一条通が標高60m台、南門付近の下立売通が標高48m台で、境内の高低差は約12mあり、傾斜としてはかなり大きい。

七堂伽藍が南北に並ぶ境内中心部は周囲よりわずかに高く、主要建物はもっとも立地条件の良い尾根筋を選んで建てられたことがわかる。それより西側は緩やかに下り、西ノ川によって形成された谷地形が寺域の西限となる。谷地形を隔てたさらに西側には、仁和寺から双ケ岡に連続する大きな尾根筋がそびえ、花園と太秦を区分する。東側には宇多川が開析した谷地形がある。宇多川は水流が豊富であったため深い谷地形を形成したが、特に西岸は台地縁辺部を侵食し、比高差6mほどの高い崖面が形成された。この崖は、南に行くほど比高差を減じ、下立売通より南側では目立たなくなる。宇多川は丸太町通の南で西に折れ、南西に流れつつ御室川に合流する。この宇多川は、妙心寺の東の防御をなす天然の施設でもあった。

(2) 歴史的環境

妙心寺境内では、平安京以前に遡る遺跡の存在は知られておらず、付近においても、東側に花園 遺跡(古墳時代後期、『京都市遺跡地図』右京区 928)が知られる程度で、遺跡の分布密度は比較 的粗いといってよい。

妙心寺境内と平安京条坊との関係をみておく。妙心寺境内は平安京右京北西部に該当し、右京北辺四坊の8町と右京一条四坊北半部の8町の合計16町という広大な面積を占めている。北端は平安京の北限である一条大路(現在の一条通)、南端は近衛大路(現在の下立売通)に面し、その南北距離は約530m、東は大雄院の東端から西は大法院の西端まで、東西距離は約450mある。

七堂伽藍の南北主軸は、右京一条四坊九・十町の西半部中央のやや西に位置し、北で西に2度10 分ほど振れている。この北で西に振れる方位は、平安京条坊の振れとは一致しないため、尾根筋の方向に規制されて主軸が決められたと考えられる。同様に、境内に配置された各塔頭の区画や規模をみても、ほとんどは平安京条坊と一致しない。このことは、妙心寺が寺域を広げ、境内各所に塔頭が置かれた頃には、すでに平安京条坊による土地区画は遺存していなかったことを示すものであろう。

次いで妙心寺の歴史を概括する。臨済宗妙心寺派大本山である妙心寺は京都市右京区花園に所在し、山号は正法山と称する。寺域は広く、北端は一条通の北側から南端は下立売通の南側にまで及び、内部には46の塔頭寺院がある。

妙心寺は花園上皇の花園離宮を元とする。花園上皇は建武2年(1335)落飾して法皇となり、花園御所を禅寺に改めた。建武4年(1337)、開山に関山慧玄が推挙され、この年を開創年次とする。しかし妙心寺六世の拙堂宗朴は、足利氏に反旗を翻した大内義弘と深い関係があったため、足利義満の怒りを買い、応永6年(1399)には妙心寺の寺領は没収された。拙堂宗朴は青蓮院に幽閉され、寺号は龍雲寺と改名させられた。永享4年(1432)には妙心寺が返還され、七世の日峰宗舜によって復興された。応仁の乱(1467~77)で伽藍は焼失したが、細川勝元・政元の支援で復興し、文明9年(1477)には九世の雪江宗深が後土御門天皇から妙心寺再興の綸旨を得て、寺は再興され

た。永正6年(1509)には利貞尼が仁和寺領の土地を買い求め、妙心寺に寄進した。これにより妙心寺の境内は西へ広がった。その後、桃山時代から江戸時代初期にかけて、周辺の土地の買収を行い、今日見るような広さとなった。寺は豊臣家や細川家などの有力大名の庇護を受けて七堂伽藍が整備され、江戸時代を通じて大いに栄えた。

ちなみに、現在の七堂伽藍のうち勅使門は慶長15年(1610)、三門は慶長4年(1599)、仏殿は 文政10年 (1827)、法堂は明暦2年 (1656)、大方丈は承応3年 (1654)、小方丈は慶長8年 (1603)、 大庫裏は承応2年 (1653) の建立である。

次に、今回の各調査区周辺の変遷を地図資料をもとに概観する。

本所調査区は、万治元年(1658)の境内を描いた絵図では空き地として描かれている。明治32年(1899)の境内絵図では、現在の宗務本所の場所に「花園教会詰所」の書き込みがあり、江戸時代には宗務を扱う施設が置かれたことがわかる。その北には「如是院」、その東には「長興院」とあり、調査地点は空き地のように描かれている。大正から昭和初めの地図では、調査地点を含む北側に墓地が描かれる。この墓地の南半が今回の調査で検出した墓群である。

微妙殿調査区は、万治元年の境内絵図では小方丈らしき建物があり、北側は空き地が描かれる。明治32年の境内絵図では小方丈の北東に建物があるが、調査地点は空き地のようにみえる。北側に門と建物が描かれ「養徳院」の書き込みがある。大正から昭和初めの地図では建物が描かれ「養徳院」の書き込みがある。現在の養徳院はこの場所の北東約120mに移動している。

韶陽院跡調査区は万治元年の境内絵図では南北棟2棟が描かれ、東棟には三文字の書き込みがあるが判然としない。明治32年の境内絵図では幡桃院の北側に樹木が茂る状態として描かれ、この頃すでに空き地であったことがわかる。大正から昭和初めの地図も空き地の状態であり、南西隅に小建物が1棟描かれる。

韶陽院は、織田信長の娘(実名は不明)に由来する。天正10年(1582年)6月、本能寺の変で織田信長が滅ぶと蒲生賢秀の庇護を請け、やがて蒲生氏郷の養女となった。その後、羽柴(豊臣)秀吉に嫁ぐ。秀吉は韶陽院を寵愛し、伏見城三の丸に居まわせたことから「三の丸殿」と呼ばれた。慶長3年(1598)3月に実施された醍醐の花見では他の婦人たちと美を競い合った。秀吉没後、二条昭実に嫁ぎ、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い後に死亡したとされる。

3. 既往の調査(図2)

妙心寺境内では過去、数回の調査が実施されている。早いものから順に解説する。

調査1は1979年7月から8月に保育園建設に伴い実施された調査である。調査面積は300㎡で、 平安時代後期の井戸1基、江戸時代後期の溝などが検出されている。

調査2は1979年8月から9月に微妙殿建設に伴い実施された調査で、調査面積は120㎡ある。平安時代の東西溝・土坑・ピット、鎌倉時代から室町時代の土坑・ピット、江戸時代の土坑や溝などが検出されている。平安時代の東西溝は土御門大路北側溝に該当する。今回も微妙殿調査区で溝40としたものが同一溝とみられる。今回の微妙殿調査区はこの時の1区に一部が重複している。

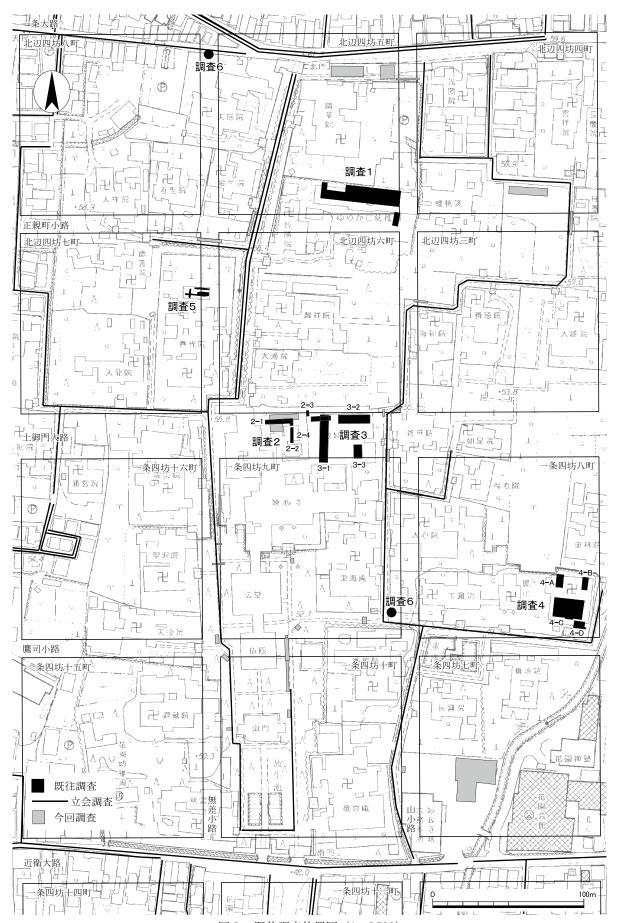


図2 既往調査位置図 (1:2,500)

調査3は1980年3月から4月に、同じく微妙殿建設に伴い実施された調査で、調査面積は318㎡あり、飛鳥時代の土坑、平安時代後期の土坑、室町時代の柱穴と土坑、江戸時代の瓦溜・土坑・溝などが検出されている。調査2で確認された土御門大路北側溝は江戸時代の遺構のため検出できなかったが、飛鳥時代の遺物は周辺遺跡との関係で注目できる。

調査4は2002年11月から翌年1月に涅槃堂再建に伴い実施された調査で、調査面積は330㎡あり、江戸時代前期の溝・柱穴、江戸時代中期から後期の柱穴・土坑などが検出されている。中央部で検出した溝はL形を呈し合流して南に流出するが、今回の本所調査区溝1はその南延長に当たる可能性が高い。

調査5は2012年2月に春光院境内で宿坊建設に伴い実施された試掘調査で、調査面積は39㎡であり、調査区の東端、無差小路の西側溝該当位置で、幅5m、深さ0.15mある南北溝が検出されている。 違いる。溝内から11世紀代の土器が出土している。

この他、1983年9月から1984年3月に実施された公共下水道工事に伴う立会調査では、平安時代から室町時代、江戸時代に属する土坑・溝・井戸・池・柱穴などの遺構が確認されている。これらの遺構は、境内北西部に当たる韶陽院跡周辺と七堂伽藍が並ぶ境内中心部で多く検出されており、特に池は長興院の北側にある蓮池の周囲と法堂西側に想定されている。蓮池の周囲で検出された池は、本所調査区の池30の広がりを考える上で重要といえる。

また、2012年7月から10月にかけて天球院北面築地と2013年5月に玉鳳院南面築地(南西隅)の修復事業に伴う築地の断割調査を実施した(調査6)。

註

- 1) 竹貫元勝「妙心寺」『妙心寺』開山無相大師六五〇年遠諱記念 読売新聞社 2009年
- 2) 平井俊行『近世妙心寺建築の研究』 思文閣出版 2013年
- 3) 『妙心寺伽藍並びに塔頭総絵図』 万治元年(1658) 狩野理左衛門作
- 4) 『京都府花園臨済宗妙心寺派大本山 正法山妙心寺之景』 明治32年(1899)
- 5) 「平安京右京北辺四坊五町・史跡妙心寺境内1」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法 人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 P79
- 6) 「平安京右京北辺四坊六町・史跡妙心寺境内2」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法 人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 P81
- 7) 「平安京右京北辺四坊六町・史跡妙心寺境内3」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法 人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 P83
- 8) 『史跡妙心寺境内·平安京右京一条四坊八町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002 16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 9) 「平安京右京北辺四坊六・七町 史跡妙心寺境内 No.12」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』 京都市文化市民局 2013年 P14
- 10) 「右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年 P 170。また周辺調査の成果が以下で集約されている。『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年 P21「花園地区」
- 11) 平成24年度に当研究所が調査。未報告。

第2章 調査その1 (平成25年度)

1. 経 過

調査その1は、本所貯水槽・微妙殿貯水槽・韶陽院跡貯水槽工事予定地についての発掘調査である。それぞれ「本所調査区」、「微妙殿調査区」、「韶陽院跡調査区」と呼称する。発掘調査は2013年7月中旬に本所調査区から開始した。この調査区は土置き場の関係で最初に東半分を調査し、江戸時代末期から明治時代の墓群、江戸時代前期の溝などを検出した。9月前半に東半分を埋め戻



図3 本所調査区調査前全景(南東から)



図4 本所調査区 調査風景(北から)



図5 微妙殿調査区調査前全景(西から)



図6 微妙殿調査区調査風景(北東から)



図7 韶陽院跡調査区調査前全景(東から)



図8 韶陽院跡調査区 調査風景 (東から)

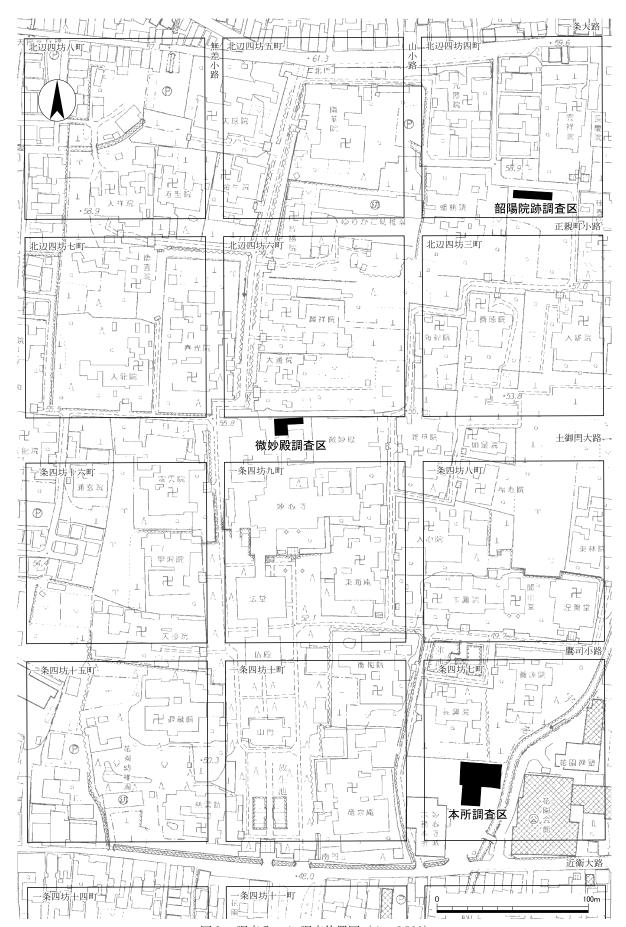


図9 調査その1 調査位置図(1:2,500)

し、次いで西半分を調査した。西半分では、平安時代前期から中期の池とみられる遺構を検出し、10月初旬に埋め戻して終了した。10月前半から微妙殿調査区を調査した。ここも土置き場の関係から、最初に西半分を調査し、室町時代の遺構を検出した。11月初旬に埋め戻し、東半分の調査に移った。東半分は各種配管が存在したため、限られた範囲の調査となった。12月初旬に埋め戻して終了した。10月末には韶陽院跡調査区を



図10 本所調査区 慰霊風景(北東から)

調査した。土置き場が確保できたため、全体を1回で調査した。江戸時代の土取穴を多数検出したが、深い穴も多く、2時期に分けて調査した。12月初旬に埋め戻して終了した。

本所調査区では貯水槽に設計変更があり、南西部で追加の調査が必要となった。12月中旬から調査を開始し、江戸時代前期の溝、平安時代前期に整地された湿地状堆積などを検出し、12月後半に埋め戻して終了した。

なお、本所調査区で墓群を検出し、微妙殿で骨壷が出土したため、慰霊のための法要が妙心寺に よって営まれた。調査に関係する者もここに列席した(図10)。

2. 遺 構

(1) 本所調查区(図11)

平安京右京一条四坊七町の中央部の南西寄りに位置する。調査面積は603 m°で、東半部、西半部、 南西部の順に調査した。

層序 (図12)

東半部、西半部では現代盛土と攪乱が上から約1mまであり、その下は砂礫質の地山となる。遺

時代	遺構				
h4 1/	本所調査区	微妙殿調査区	韶陽院跡調査区		
平安時代前期 ~中期	池30、湿地520				
鎌倉時代 ~室町時代		溝40、柱穴39・46・66、土坑 42・48・50・56、整地層41			
江戸時代前期	溝 1 · 502 · 516、土坑515 · 519 · 523	土坑62・63			
江戸時代中期 ~後期			溝270、土坑207・225・265・ 284・285・287、土管組288		
江戸時代末期 ~明治時代	井戸2、墓群	墓74・88	高まり1~4、小礫敷、小柱 穴列、桶248、溝252・258、 土坑208・237・238・249		

表2 調査その1 遺構概要表

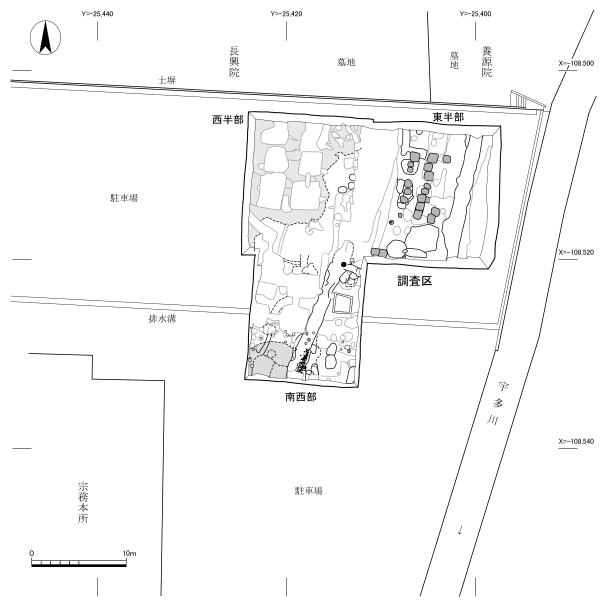


図11 本所調査区 配置図(1:400)

構は全て地山上面で検出した。

南壁の層序について解説する。東半分では地表下1.1 mで明黄褐色のシルト混じり砂礫 (地山、図12の25)がある。遺構はすべてこの上面で検出した。中央部にある土坑506は内部に、にぶい黄褐色砂礫 (16)が大量に堆積するため、きわめて短期間に埋められた遺構と判断できたが、遺物が出土しなかったため時期の決め手を欠く。溝502は土坑506を掘り込んで形成される。東肩では礫と瓦が落ち込んで堆積した状況がみられた (10)。溝の底部 (13)から17世紀代の遺物が出土した。西端に掘られた土坑514(3)は長方形を呈する遺構で19世紀代に属する遺物が出土した(図30)。この土坑は下にも別の土坑 (6)が掘られていた。湿地状堆積(湿地520、23)は自然堆積による湿地状の遺構であるが、出土遺物がないため時期判定はできなかった。ただし湿地520の上部を整地した暗褐色シルト層 (22)は平安時代前期の遺物を含んでおり、西半部で検出した池30と同様の堆積層序であることが確認できた。

遺構(図13、図版1~5)

平安時代前期・中期、江戸時代前期、江戸時代末期から明治時代に属する遺構がある。 新しい時期の遺構から解説する。

江戸時代末期から明治時代に属する遺構として、東半部で井戸1基(井戸2)と墓22基を検出した。

井戸2(図15、図版1-2) 円形の石組井戸である。掘形は東西方向がやや長い。石組は中心よりやや東に片寄って構築され、内径規模は0.7mで、通有の石組井戸よりやや小型である。検出面から深さ1.1mまで掘り下げた。掘形埋土のうち黄褐色シルト(1)にはビニール紐、ガラスが包含され、昭和時代に積み直したとみられる。石組内には、ブロックやコンクリートの塊などが含まれるため、廃棄された時期は現代とみられる。ただし石組井戸であることから、構築年代は江戸時代にさかのぼると推定した。

墓群(図14、図版2・3、表3) 22基検 出した。北側には養源院墓地が現存すること から、その南延長部と想定される。主体部は 以下に分類できる。

- ① 箱形木棺の中心に甕を据え遺体を葬ったもの(墓9北・9中・9南・15・16北・26)。
- ② 箱形木棺の中に遺体を直接葬ったもの (墓10北・13・14・16中・16南・21)。
- ③ 甕を直接地中に埋め遺体を葬ったもの (墓19)。
- ④ 埋葬施設が明確でないもの(墓6・7・8・10南・17・20・23・24・25)。

人骨は、墓 9 中・9 南・14・15・16中・ 19・26の内部に残存していた。

副葬品は非常に乏しい。銭貨では寛永通寳

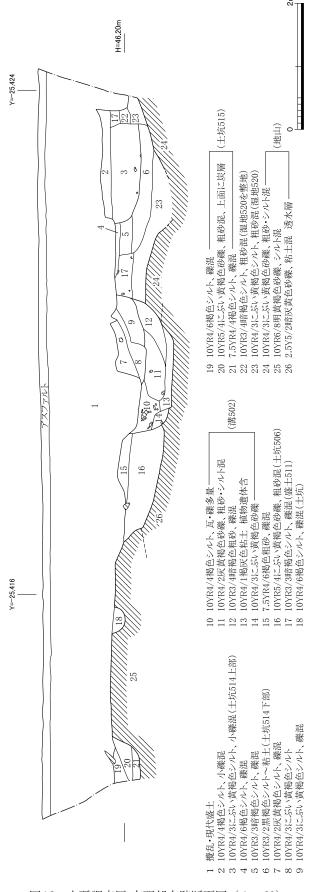


図12 本所調査区 南西部南壁断面図(1:60)

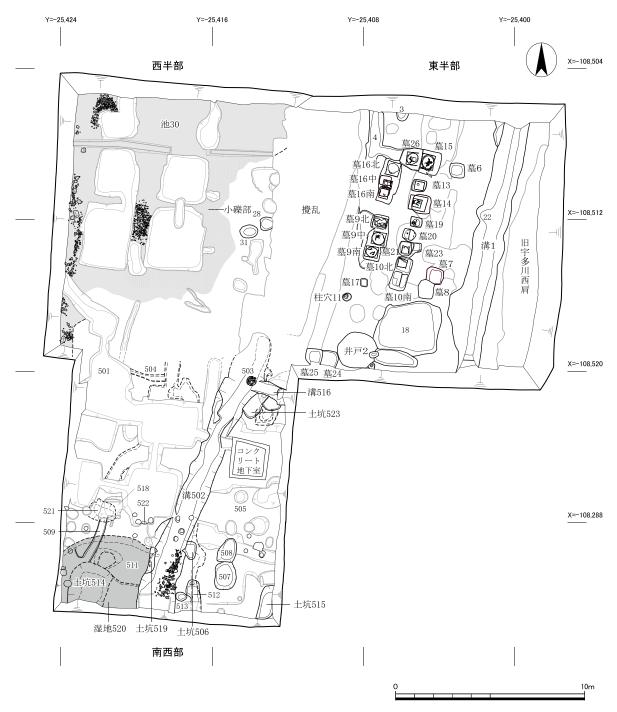


図13 本所調査区 遺構平面図 (1:200)

が3基(墓9北・9南・15、すべて6枚)、金属製品ではキセルが4基(墓8・14・15・16中、4 基とも雁首、吸口が揃う)、土器・土製品では土師器鉢が1基(墓26)、染付小椀が1基(墓20)、 軟質施釉陶器壷が1基(墓19)、軟質施釉陶器蓋が1基(墓21)、土人形が2基(墓13・16南)、木 製品では櫛が2基(墓9中・15)、扇が2基(墓14・15)、漆器椀・皿が4基(墓9中・9南・15・ 16北)、数珠が1基(26)、ガラス製品では瓶が2基(墓9中・16中)、板が1基(墓20)、それぞ れ副葬されていた。また墓10北・15・26には、葬送時に使用されたとみられる天蓋の軸と骨、及 び墨書で文様を描いた短冊形の木札が納められていた。

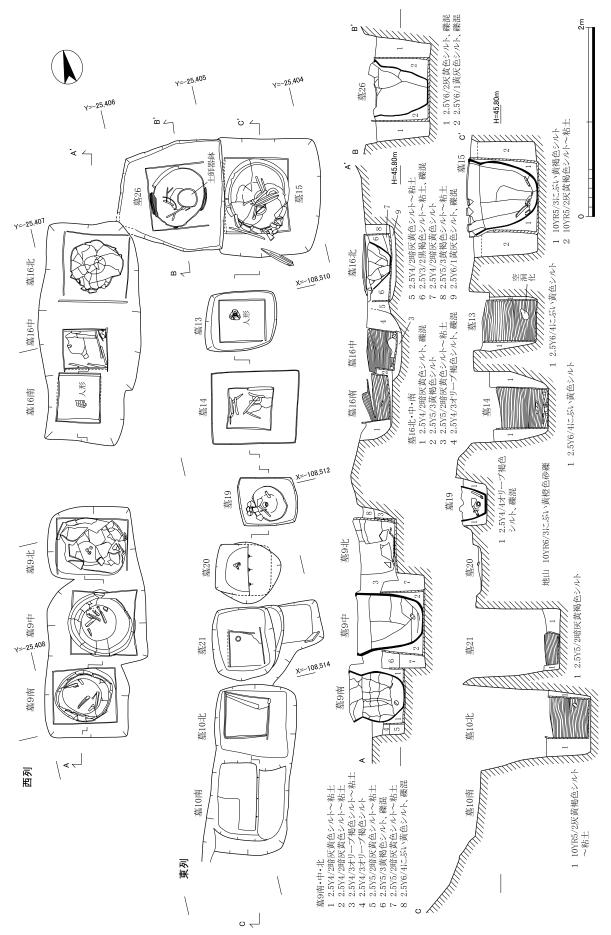


図14 本所調査区 墓実測図(1:40)

表 3 本所調査区 墓一覧表

遺構名	墓壙掘形	木棺(木枠)	甕	人骨	副葬品	備考
墓6	方形、東西80cm、 南北80cm、深さ10cm	なし	なし	遺存せず	なし	埋土に瓦入る。
墓7	方形?、東西89cm、 南北?、深さ30cm	なし	なし	遺存せず	なし	北辺は攪乱を受ける。
墓8	方形、東西90cm、 南北84cm、深さ65cm	なし	なし	遺存せず	キセル	墓壙底面に炭層あり。
墓9北	方形?、東西90cm、 南北70cm以上、 深さ41cm	方形、東西76cm、南北 59cm以上、深さ22cm、 二葉マツ	径60cm以上、 深さ44cm以上	遺存せず	銭(寛永通寳6)	木枠南辺は墓9中に壊さ れる。埋土に焼締陶器、 土師器、瓦入る。
墓9中	方形?、東西105cm、 南北85cm以上、 深さ64cm	方形、東西68cm、 南北65cm、深さ43cm、 二葉マツ	径66cm、 深さ69cm	成人男性か:頭蓋骨・下顎骨・ 上腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨・ 脛骨・腓骨・腰椎	櫛、漆器皿、 ガラス瓶	埋土に焼締陶器、ガラス 片入る。
墓9南	方形?、東西88cm、 南北65cm以上、 深さ52cm	方形、東西67cm、 南北59cm、深さ20cm、 二葉マツ	径54cm、 深さ55cm、 器壁は薄い。	成人女性:下顎骨・上腕骨・尺 骨・橈骨・大腿骨・脛骨・腓骨 ・腫骨	銭(寛永通寳6)、 漆器	埋土に焼締陶器、瓦入る。
墓10北	方形?、東西86cm、 南北85cm、 深さ122cm	方形、東西47cm、 南北49cm、深さ44cm、 二葉マツ	なし	遺存せず	なし	南辺は墓10南に壊される。 木札3枚出土。
墓10南	方形?、東西83cm、 南北85cm以上、 深さ10cm	なし	なし	遺存せず	なし	墓10北の上に掘り込む。 底部に炭層あり。
墓13	方形、東西75cm、 南北63cm、深さ64cm	方形、東西49cm、 南北45cm、深さ54cm、 二葉マツ、蓋板落下	なし	遺存せず	土人形	
墓14	方形、東西90cm、 南北77cm、深さ75cm	方形、東西48cm、 南北45cm、深さ54cm、 二葉マツ、蓋板落下	なし	成人女性:頭蓋骨・下顎骨・上 腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨・脛 骨	キセル、扇子骨	上部に石燈籠の中台。
墓15	方形?、東西105cm 以上、南北125cm、 深さ70cm	方形、東西68cm、 南北78cm、深さ45cm、 二葉マツ、蓋板落下	径68cm、 深さ74cm	成人男性か:下顎骨・上腕骨・ 尺骨・橈骨・脛骨・腓骨	漆器皿、銭(寛永 通寳6)、キセ ル、櫛、扇子	掘形に木札数枚、天蓋軸 と骨、墓石?、瓦入る。 埋土に焼締陶器入る。西 側を土坑26に壊される。
墓16北	方形、東西98cm、 南北75cm以上、 深さ31cm	方形、東西70cm、 南北72cm、深さ25cm、 二葉マツ	径56cm以上、 深さ28cm以上	遺存せず	漆器	埋土に焼締陶器入る。
墓16中	方形?、東西107cm、 南北60cm以上、 深さ40cm	方形、東西48cm、 南北42cm、深さ28cm、 スギ、蓋板落下、	なし	成人男性:頭蓋骨・下顎骨・尺 骨・とう骨・大腿骨・脛骨	ガラス瓶、 キセル	埋土に焼締陶器入る。
墓16南	方形?、東西80cm、 南北65cm以上、 深さ33cm	方形、東西45cm、 南北53cm、深さ30cm、 スギ、蓋板落下	なし	遺存せず	土人形(友引人 形)、針	埋土に焼締陶器、土師器、 木片入る。
墓17	方形、東西38cm、 南北44cm、深さ15cm	なし	なし	遺存せず	なし	
墓19	方形、東西62cm、 南北50cm、深さ25cm	なし	径34cm、 深さ25cm	10歳ぐらいの子供:下顎骨・頚 椎・鎖骨・上腕骨・肋骨・寛骨	軟質施釉陶器壷	甕底部が残存。
墓20	方形、東西69cm、 南北54cm、深さ10cm	なし	なし	遺存せず	ガラス板、 染付磁器小椀	墓壙底部のみ残存。
墓21	方形?、東西60cm、 南北76cm、深さ92cm	方形、東西36cm、南北 30cm以上、深さ15cm、 二葉マツ、蓋板落下	なし	遺存せず	軟質施釉陶器蓋	木枠南辺は存在せず。埋 土上部に一石五輪塔。埋 土に焼締陶器、瓦入る。
墓23	方形?、東西35cm以上、南北50cm、 深さ48cm	なし	なし	遺存せず	なし	埋土に瓦入る。西側を土 坑21に壊される。
墓24	方形、東西84cm、 南北80cm、深さ30cm	なし	なし	遺存せず	なし	
墓25	方形、東西88cm、 南北86cm、深さ25cm	なし	なし	遺存せず	なし	
墓26	方形?、東西113cm、 南北118cm、 深さ57cm	方形、東西55cm以上、 南北68cm、深さ60cm、 二葉マツ	径62cm、 深さ60cm	成人女性:下顎骨・鎖骨・肩甲骨・頚椎・胸椎・上腕骨・尺骨・橈骨・肋骨・寛骨・大腿骨・脛骨腓骨・腫骨・指骨	土師器鉢、 数珠10点以上	墓15の上に掘り込む。木 枠東辺は存在せず。人骨 遺存良好。掘形に木札入 る。

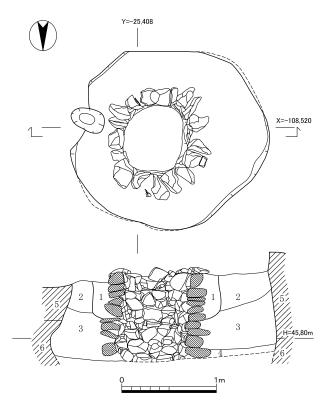
江戸時代前期の遺構は、東半部で溝1、南 西部で溝502、溝516、土坑515、土坑519、土 坑523などを検出した。

溝1 (図16、図版1-3) 幅約1.5m、深 さは検出面から約1 mある。南壁際では底が 0.4 m浅くなっており、土橋状を呈していたことが想定された。溝の断面形は「V」字形・「U」字形を呈する。北壁断面図(図16)では底は平坦で逆台形を呈し、内部に堆積した 3・4・5層は人為的に埋められた層であった。北端から5 m付近には焼土層が広がり、焼土塊も出土した。この焼土塊は、熱が弱かったためか、さほど硬質化していない。方位は北で東に約12度振れる。出土遺物は図 28に掲載した。

溝502(図版5-2) 幅約1.5~2 m、深 さは検出面から約1 mある。北端は西半部の 南東隅で立ち上がり、それより北には延長しない。溝の底部には腐植層を含むシルト、中位にはシルト、粗砂、砂礫が堆積し、流水があったことが窺われた。埋土上半部には江戸時代後期の瓦が多く含まれていた。この溝も、北で東に約22度振れる。出土遺物は図28に掲載した。

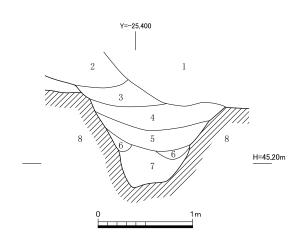
溝516 溝502の東肩に取り付き、ほぼ直 角に合流する。規模は幅約1.4m、深さは検出 面から0.75mある。溝はさらに東に延長する ため、調査区外で溝1と連接していた可能性 がある。

土坑515 南西部の南東隅で検出した。検 出面での規模は長さ1.8m、幅0.7m以上、深 さ0.4mあり、東と南へ延長する。出土遺物は 図28に掲載した。



- 1 10YR5/6黄褐色シルト、礫混、ビニール含
- 2 10YR6/6明黄褐色シルト、礫・粘土ブロック混
- 3 10YR4/6褐色シルト、礫混
- 4 10YR5/8黄褐色シルト、礫・粘土ブロック混
- 5 10YR6/3にぶい黄橙色砂礫、シルト混(地山)
- 6 10YR5/1褐灰色シルト、粗砂混(地山)

図15 本所調査区井戸2実測図(1:40)



- 1 10YR4/6褐色シルト、礫混 (溝1上整地層)
- 2 10YR5/6黄褐色シルト、礫混ー 3 10YR5/6黄褐色シルト
 - I С 1981.

(溝1内整地層)

- 4 10YR6/6明黄褐色シルト、礫混 5 10VR4/6褐色シルト 礫湿 ----
- 7 10YR6/3にぶい黄橙色砂礫 8 10YR7/6明黄褐色砂礫(地山)

図16 本所調査区溝1断面図(1:40、調査区北壁)

この他、内部に小規模な礎石を据えた柱穴11を東半部で検出した。所属時期は不明である。この 柱穴に類似する柱穴は、調査区内では検出できなかった。



図17 本所調査区 池30 実測図(1:100)

平安時代前期から中期に属する遺構として西半部で池30、南西部で湿地520を検出した。

池30(図17、図版4) 西半部の北西部には湿地状堆積が認められた。さらに調査区の西壁沿いには景石状の石材が置かれており、西側がより深くなること、並びに西壁沿いには植物遺体層が堆積することなどから、調査地点は池の東岸付近であり、西側にはさらに大きな池が広がっていたことが想定できた。池の東岸と南岸には小礫を敷いた形跡が認められたが、標高が不均等であることや傾斜が緩やか過ぎることなどから、池の汀として造作されたものではないと判断された。この池の下層は湿地状堆積を呈しており、池の遺構はそれを利用して形成されたことも判明した。ただし

湿地状堆積については、遺物が出土しなかったため、正確な年代は確定できなかった。池30のシルト〜粘土層(図17、西壁の3層)の種実を分析したところ、マツ、サクラなど多数の種実が確認できた。池の周囲にこれらが繁茂していたことは確実といえる。池30からは平安時代前期から中期の遺物が出土した(図28)。

湿地520(図版5-3) 南西隅で検出した湿地状堆積である。池30と同じく、上部には平安時代前期の遺物を含んでいたが、洲浜状の礫敷きや景石などの人工的な施設は認められなかった。

(2) 微妙殿調査区(図18)

平安京右京北辺四坊六町と右京一条四坊九町間の土御門大路上に位置する。調査面積は127㎡で、西半部、東半部の順に調査した。東半部は攪乱と配管が非常に多く、遺構は狭い範囲でしか残存していなかった。なお、西半部の中央付近では、1979年調査区(2-1)で南壁と中央に設置された測量用の鉄釘が残存していた。

層序 (図19)

南壁断面を解説する。上から(1)(2)は現代盛土である。その下の黄褐色シルト(10)は室町時代の土師器の細片を多量に含む。同じく室町時代の遺物を含む土坑65(9)は、断面作図箇所では(10)を掘り込むように判断できた。地表下0.55mで地山の明黄褐色砂礫(15)となる。遺構はすべてこの面の上で検出した。

遺構(図20、図版6)

室町時代、江戸時代前期・末期に属する遺構を検出した。新しい時期の遺構から解説する。

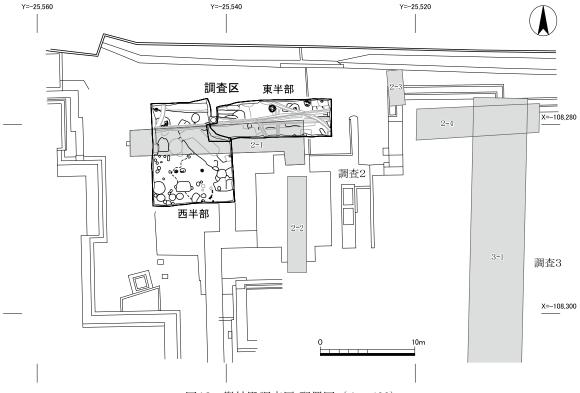


図18 微妙殿調査区配置図(1:400)

H=55.00m --25,546 攪乱 1 7.5YR4/4褐色シルト 2 10YR5/6黄褐色シルト、礫・炭混 3 10YR4/4褐色シルト(柱穴) 4 7.5YR4/6褐色シルト 5 10YR6/8明黄褐色砂礫(地山) 礫·炭混 0 9 攪乱 13 11 12 13 15 10VR4/6褐色シルト、礫・炭混 10VR4/3にぶい黄褐色シルト、礫混、土師器細片多量に含む 10VR5/4にぶい黄褐色シルト、小礫混(柱穴?) 10VR4/4褐色シルト、土師器含(土坑65) 10VR5/8黄褐色シルト、土師器含(整地層41) 10 O 6 6 8 8 10 9 107R4/6褐色シルト(現代盛士) 107R3/4暗褐色シルト、炭混 110YR4/4褐色シルト、礫混 (土坑52) 110YR4/6褐色シルト、礫混 (土坑52) Ø 2 gO Ø

図19 微妙殿調査区 西半部 南壁断面図 (1:40)

江戸時代末期に属する遺構として東半部で墓74・88を検出した。

墓74(図21) 陶器甕を直接地中に埋めた遺構である。本 所調査区の例からみて、江戸時代末期から明治時代に属する 墓とみられる。検出面での規模は直径0.6 m、深さ0.6 mあり、 内部から寛永通寳2枚と京焼椀が1点出土した。人骨は残存 していなかった。

墓88 径0.7 m、深さ0.4 mある土坑の中央に蓋付の染付鉢が据えられ、焼成された頭蓋骨片が中に納められていた。蓋付鉢が骨壷として使用されたことを示す貴重な事例である。

江戸時代前期に属する遺構として西半部で土坑62·63を 検出した。

土坑62・63 両方とも溝40の上部から掘り込んだ土坑である。土坑62は円形で、直径0.9 m、深さ0.4 mあり、土師器皿が数枚出土した。土坑62は南東側に延びる遺構の北西端とみられる。出土遺物は図28に掲載した。

なお東半部では、溝76、土坑73・79・80などがこの時期に 想定されるが、遺物量が少なく正確さを欠く。

室町時代に属する遺構は主に西半部で、溝、柱穴、土坑などを検出した。

溝40 (図22) 北端で検出した東西溝で、土御門大路北側溝に該当する位置にある。検出面での規模は幅1.1 m、深さ0.4 mあり、出土遺物から鎌倉時代に埋没したと推定された。

整地層41 南東部で室町時代前半期(14世紀代)の土師器 細片が堆積する範囲を示したものである。層の厚さは、最も 厚いところで0.25 mある。北側よりも南端が特に厚く堆積していた。出土遺物は図28に掲載している。

柱穴46・66・39 柱穴46・66は底部に小規模な礎石を 入れた柱穴で、柱穴間の距離は2.80mである。東西方向に並 ぶことから同一建物の柱穴と判断できるが、それ以上の展開 は示せない。礎石を入れた柱穴は、他に柱穴39があるが、こ の柱穴は溝40の北側に位置するため、別の建物柱穴とみるの が妥当である。

土坑42 東壁に半分がかかる。土坑中央部は底部が浅くなっている。それに比べると周囲は底が深くなり、形状も不

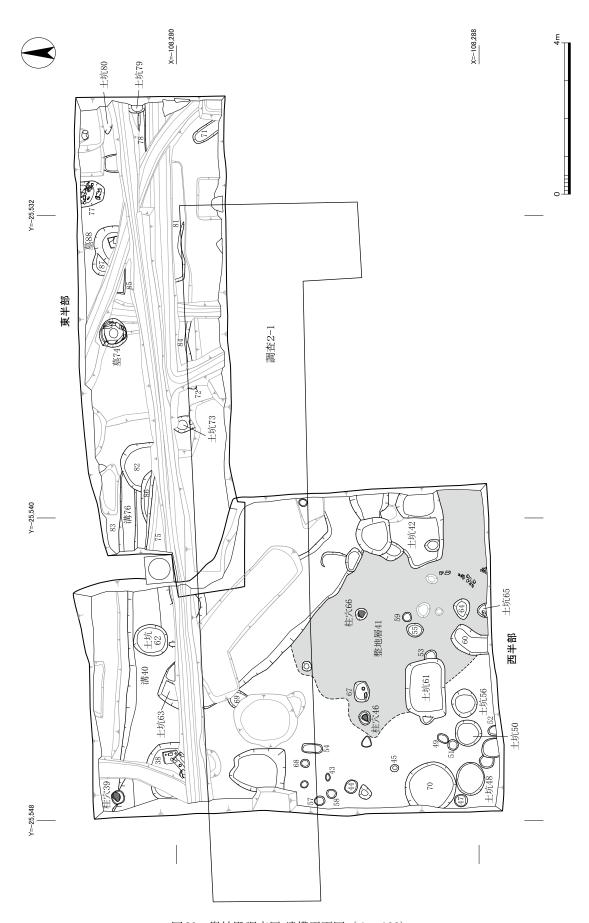


図20 微妙殿調査区 遺構平面図(1:100)

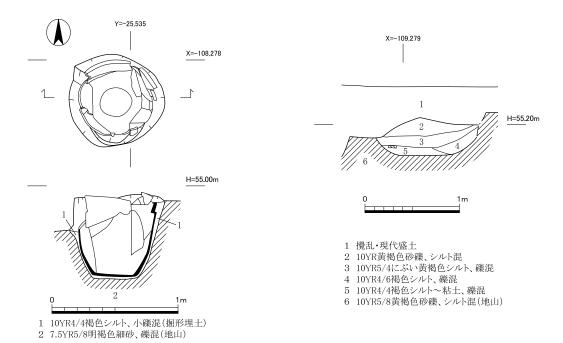


図21 微妙殿調査区 墓74実測図(1:30)

図22 微妙殿調査区 溝40 断面図 (1:40)

定形である。木の根の攪乱か、あるいは植樹した際の掘り込み跡と思われる。出土遺物は図28に掲載した。

土坑48・50・56 南壁沿いでは西から土坑48・50・56の3基が東西一列に並んでいる。断面 形はすべて「U」字形を呈し、これらの穴からは甕の破片は出土していないが、形状は甕据付穴に 類似する。

(3) 韶陽院跡調査区(図23)

平安京右京北辺四坊四町の南東部に位置する。調査面積は127㎡である。遺構の重複により2面に分けて調査した。

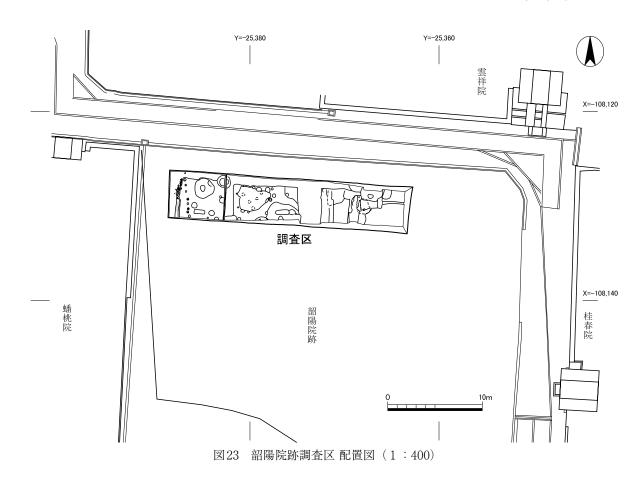
層序(図24)

現地表下 $0.5\sim1.0\,\mathrm{m}$ まで堆積する $1\sim7\cdot12\,\mathrm{m}$ は現代盛土である。そのうち $1\sim4\,\mathrm{m}$ はいわゆる「山土」と呼ばれるもので、地山の粘土~シルトが掘削され、近年当地に盛られたものである。その下の黒色シルト($16\,\mathrm{m}$)、黒褐色シルト($21\,\mathrm{m}$)は土壌化が進んだ旧耕土層である。この $16\cdot21\,\mathrm{m}$ を第1面とした。 $16\cdot21\,\mathrm{m}$ を除去すると地山となる($55\sim59\,\mathrm{m}$)。地山は粘質の粘土~シルト層と細砂~粗砂に礫が混じる砂礫層が互層となって堆積する。地山上面で検出した遺構を第2面とした。

遺構(図25、図版7・8)

第1面

旧耕土層とみられる土層(図24の16・21層)上面で検出した遺構群である。高まり・柱穴列・桶を埋めた施設・溝・土坑などがある。調査区が韶陽院の敷地では最も北側(裏側)に当たるため、これらは畑や通路に利用されていた頃の遺構とみられる。時期は幕末・明治時代頃に属する。



高まり1~4 北端で東西方向の高まり1を検出した。また高まり1に接続する南北方向の高まりを3箇所検出し、西から順に高まり2・3・4とした。これら高まりの間には耕土層と考えられる発達した土壌化層が堆積しており($16\cdot21$ 層)、畑もしくは庭として利用されていたと考えられる。

東西方向の高まり1は、検出幅約1.0m、検出長約19.0m、高さは約0.2mある。上面は平坦で固く締まる。妙心寺塔頭群は、共有道路が塔頭の敷地より高くなっている場合が多い。この高まり1も韶陽院北側の敷地境に近いことから、北側道路からの延長の高まりで、この北側に塀が築かれていたと推測される。

南北方向の高まり2は、検出幅約1.2m、検出長約4.0m、高さは約0.15mある。高まり上には、 北から約2.2mに渡って径0.1~0.3mの石材が平坦面を上にして敷かれ、その南側延長部分には、非 常に固く敲き締まる小礫敷が確認できた。敷地の西端付近で検出したことから、敷地への出入と関 連する遺構と推測される。

南北方向の高まり3は、検出幅約1.0m、検出長約3.5m、高さは約0.1mある。断面形はやや蒲鉾状になる。他の高まりより高さが低く、畑と畑の間の畔としての役割が考えられる。

南北方向の高まり4は、検出幅約2.5m、検出長約3.5m、高さは約0.3mある。断面形は蒲鉾状を呈し、上面は非常に固く締まる。韶陽院の東西敷地幅のほぼ中心に位置し、幅、高さともにほかの高まりより規模が大きいことから、北側道路から塔頭建物への通路と考えられる。現在でもこの北側延長上は、敷地への出入り口となっている。

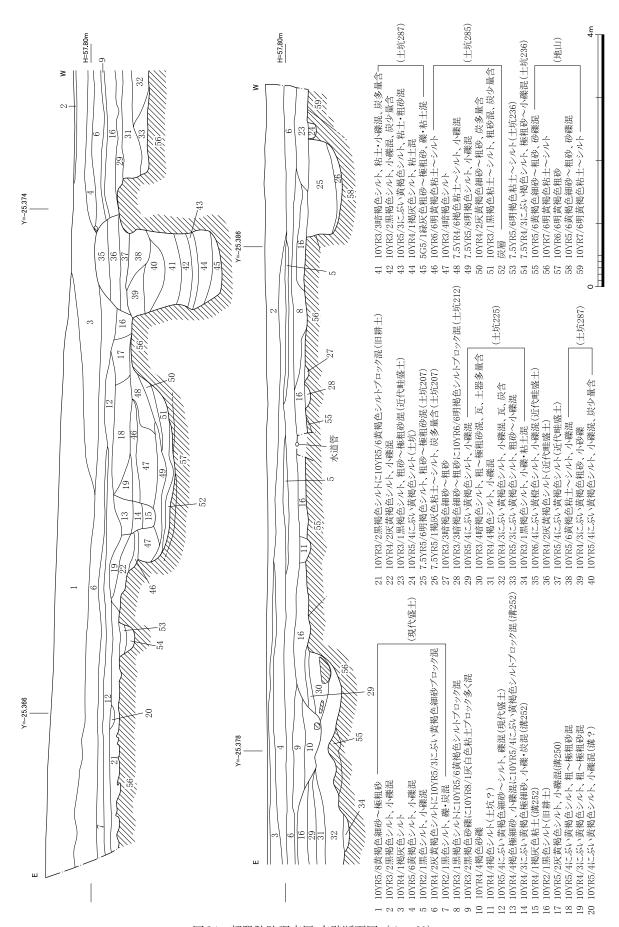


図24 韶陽院跡調査区 南壁断面図(1:60)

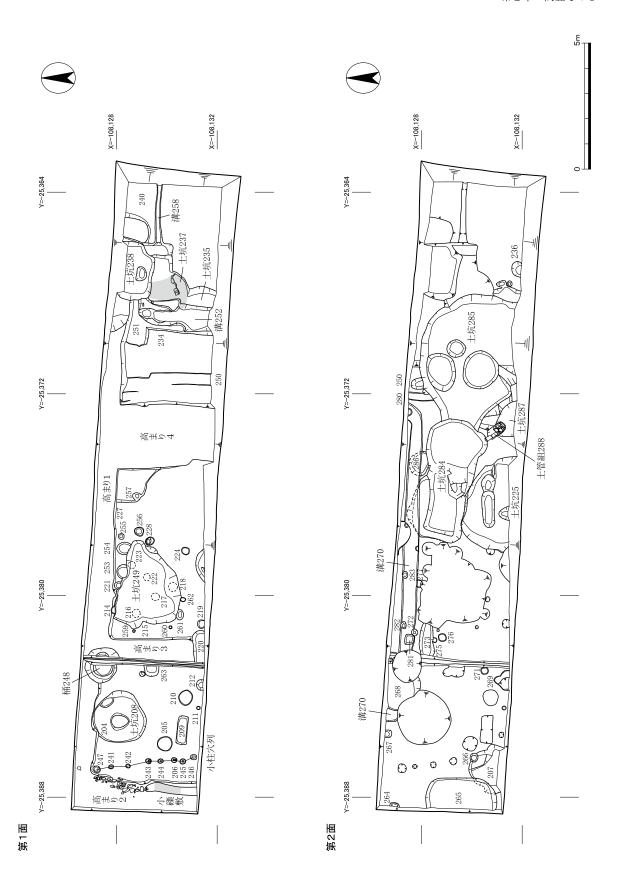


図25 韶陽院跡調査区遺構平面図(1:150)

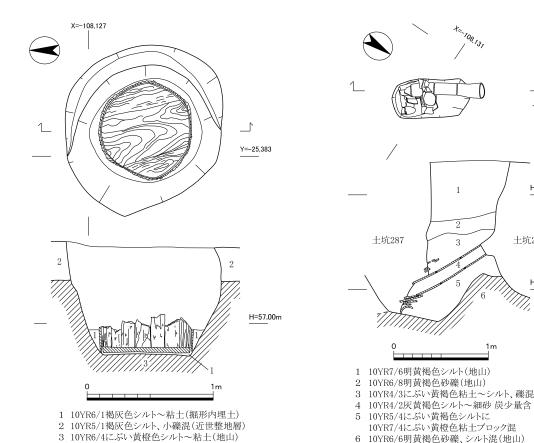


図26 韶陽院跡調査区 桶248 実測図(1:30)

図27 韶陽院跡調査区土管組288実測図(1:40)

1

3

H=57.00m

H=56.00m

土坑284

小柱穴列 高まり2の小礫を敷いた範囲の東側、Y=-25,386.5付近には小規模な柱穴が南北一 列に並ぶ。柱穴の間隔は0.5m前後あるが、等間隔ではない。生垣の痕跡と推定される。

桶248 (図26) 北西部の高まり3の北で検出した。平面形は円形で、掘形の直径は約0.04 mの 板を3枚組み合わせ目釘で固定し、径約0.7mの円形にしている。底板の外側に沿って幅0.12m前 後の縦板をめぐらせる。縦板の外側にはタガの痕跡が認められた。掘られた位置からみて、水か肥 料を溜めるための施設であったと考えられる。

溝252・258、土坑237・238 すべて東端付近で検出した。溝252は南北方向の溝で、検出面 での規模は幅約1m、深さ約0.5mあり、溝底は南ほど深い。溝258は東西方向の溝で、検出面での 規模は幅約0.2m、深さ0.08mと非常に小規模である。溝底はわずかに西側が深い。土坑238は東西 約2.5 m、深さは約0.4 mある。これら3基の遺構は、底部の標高からみて溝258、土坑238、溝252 の順に深いことから、南西側に水を流すための一連の遺構とみられる。土坑238からは多量の瓦が 出土した。寺の廃絶後に瓦が廃棄されたと考えられる。土坑238の南に位置する土坑237は、南北 約1.6m、東西約1.0m、深さ約0.15mの不整形な土坑で、土坑内には黒褐色粘土と明黄褐色粘土が 互層状態で入れられ、上面には扁平な石が据えられていた。溝252の東肩、土坑238の南肩に位置 しており、上記3遺構と関連する可能性がある。

土坑208 西端で検出した。直径約2.1 mの円形を呈し、底は中央が一段高い。形状からみて樹 木を移植した際の痕跡とみられる。

土坑249 中央やや西で検出した。形状は不整形で、東西約3.5 m、南北約2.5 m、深さは検出面から約0.25 mある。埋土に炭が多量に混じり、幾度も掘り返された痕跡が確認でききたことから、廃棄物処理土坑と推測される。

第2面

第1面を約0.15 m掘り下げ、地山上面で検出した遺構を第2面とした。溝・土坑・土管組施設などがある。土坑の多くは粘土・シルトを採取した土取穴とみられ、大半は江戸時代中期に属する。

溝270 北端で検出した東西方向の溝で、検出長約12.6 m、幅は約0.6 mある。深さは約0.05 mと非常に浅い。東端は中央部のやや東で北に折れる。西端は土坑268の西で北に折れる。

土坑207 南西隅で検出した。検出面での規模は、東西約1.9 m、南北1.15 m以上、深さは約0.4 mある。底部は中央部が深い。底部にはシルトが薄く堆積するが、その上部は黄褐色シルトブロックを多く含む層で一気に埋まる。

土坑225 中央部で南壁にかかり検出した。東西約4.0m、南北1.8m以上、深さは約0.6mある。 底部はほぼ平坦であるが、中央は一段深い箇所もみられた。地山の粘土・シルト層を掘り抜き、底 が砂礫層で止まっていることから、土取穴と考えられる。出土遺物は図30に掲載した。

土坑265 南西隅で西端にかかり検出した。検出面での規模は、東西1.2m以上、南北約2.65m、深さは約0.15mある。

土坑284 中央部で検出した。平面形は東西に細長く、東半が一段深くなっている。西半は東西方向の長方形で、東西約2.8 m、南北約2.2 m、深さは約1.0 mある。東半は不整円形を呈し、南北約2.3 m、東西約2.1 m、深さは約1.4 mある。断面形は袋状を呈し、地山の粘土・シルトを採取した土取穴と考えられるが、東半の深い土坑の南壁に土管が差し込まれており、土取り後も開口し、何らかの施設として利用されていたと推測される。出土遺物は図29に掲載した。

土坑285 中央部東寄りで検出した。不整円形を呈し、東西約4.5 m、南北3.5 m以上、深さは約0.8 mある。底部には径約1.5 m、深さ0.2 m程度の浅い窪みが2箇所とそれより小規模な窪みがある。西側に掘られた土坑284と同じ土取穴と考えられる。

土管組288 (図27、図版8-3、) 土坑284 南壁では地山を掘り抜いて土管が斜め下方向に3本差し込んで設置されていた。南側にある土坑287に水を落とすための施設と考えられる。水の出口である土坑287側では土管の下に丸瓦と平瓦が重ねて置かれており、高さを調整したものとみられる。土管の標高は、入口である土坑284側が56.40 m、出口の土坑287側が55.95 mで、高低差は0.45 mある。また北側の土坑284底部は、西半が56.42 m、東半が55.95 mで、高低差は0.47 mあり、西半底部の標高が土管入口の標高にほぼ等しい点は留意される。土坑284の東半底部は中央部より南端が深いため、底部に溜まった水を排水する目的で土管が設置されたことは確かであろうが、土坑底部が0.45 m深いため、土坑内の水を完全に抜き取ることが目的でなかったことも確かである。使用された土管と丸瓦は図39・40 に掲載した。

3. 遺物

整理箱92箱の遺物が出土した。内容は、土器類、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、木製品、壁土などである。以下、それら順に解説する。なお、本所調査区の墓から出土した人骨については、特徴を分析した後、妙心寺に返還した。

(1) 土器類

本所調査区池30(図28、図版9) 土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色土器、灰釉陶器などがある。Ⅲ期中段階から新段階に属する。土師器にはⅢ、杯B(高台が付くもの)、甕がある。Ⅲ(1~3)は口径11cm前後、器高1.5cm前後ある。口縁端部は強く外反し、端部は上方に立ち上がり終わる。甕(4)は口径20cm前後で、器高10.7cmまで復元できた。口頸部は外反し端部は内側に折り返して終わる。体部は外面を叩きで成形する。内面には当具の痕跡が付着する。黒色土器には椀、甕がある。椀はAタイプ(内面のみ黒色)である。甕(5)は小片からの復元である。須恵器には杯A(高台がないもの)、杯B(高台が付くもの)、鉢、壷、甕がある。杯B(6)は高台径13cm前後の大型品で、外面には自然釉が厚くかかる。壷(7・8)は瓶子と呼ばれるもので、7は口縁部、8は体部下半の破片である。緑釉陶器には椀あるいは皿があるが、小片のため図示できない。白色土器には皿がある。皿(9)は外面をヘラケズリした後、ヘラミガキを施す。内面もヘラミガキを施す。内外面ともに口縁部付近には煤が付着する。灰釉陶器には椀があるが、小片のため

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク 未掲載 箱数	B・C ランク 箱数
平安時代前期 •中期	土師器、黒色土器、須恵 器、緑釉陶器、白色土器、 灰釉陶器、瓦		土師器4点、黒色土器1点、須恵器3点、白色土器1点		
鎌倉時代 ~室町時代	土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 金属製品		土師器2点、金属製品2点		
江戸時代前期	土師器、施釉陶器、焼締 陶器、瓦、壁土、石製品		土師器10点、施釉陶器2点、焼締陶器1点、瓦12点、石製品3点		
江戸時代中期	土師器、染付、施釉陶器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦、壁土、石製品		土師器16点、染付14点、国産青磁 1点、施釉陶器12点、焼締陶器3 点、軟質施釉陶器1点、瓦4点、 土管3点、壁土10点、金属製品1 点		
江戸時代末期 ~明治時代	土師器、染付、施釉陶器、 焼締陶器、瓦、銭貨、金 属製品、石製品、木製品、 ガラス製品、土人形		土師器1点、染付3点、施釉陶器 1点、軟質施釉陶器4点、焼締陶 器7点、瓦15点、銭貨11点、金属 製品14点、石製品6点、木製品28 点、ガラス製品2点、土人形2点		
合 計		112箱	200点(20箱)	92箱	0 箱

表4 調査その1 遺物概要表

[※] コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

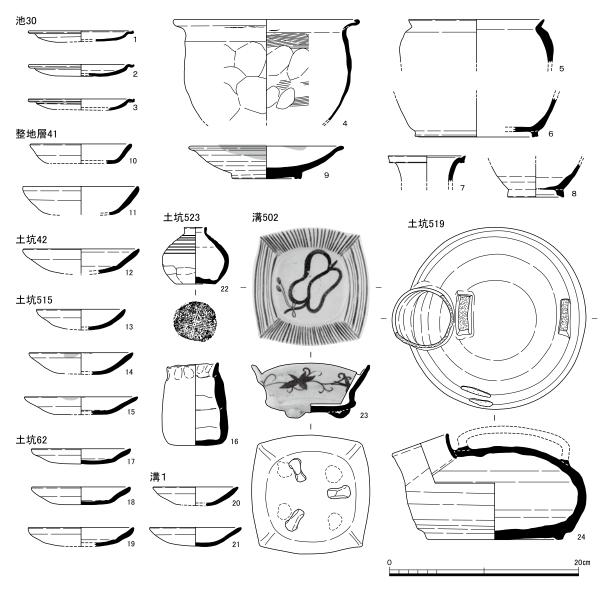


図28 池30、整地層41、土坑42・62・515・519・523、溝1・502出土土器実測図(1:4)

図示できない。

微妙殿調査区整地層41 (図28) 土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器などがある。Ⅷ期中段階から新段階に属する。土師器皿(10・11)は10が赤色系、11が白色系を呈する。両方とも器表は磨滅が顕著である。瓦器には鍋と羽釜がある。須恵器には東幡系に属する甕がある。輸入陶磁器には青磁椀、白磁皿あるいは椀がある。いずれも小片のため図示できない。

微妙殿調査区土坑42(図28) 土師器、須恵器、焼締陶器などがある。XI期に属する。土師器皿 (12) は口径12.2cm、器高2.6cm以上ある。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は薄い。先端は小さく上方に延びておさめる。内面は、底部と体部の境に圏線がめぐる。須恵器には鉢がある。焼締陶器には常滑甕があるが、いずれも小片のため図示できない。

本所調査区土坑515 (図28、図版9) 土師器がある。XI期に属する。 $13\sim15$ は土師器皿である。13は口径9.2cmある中型皿で、外面に煤が付着する。 $14\cdot15$ は口径 $10.8\sim11.9$ cmあり、大型皿に属する。15の内面には圏線が巡るが、14は確認できない。焼塩壷(16)は体部内面を強くナデ

で調整し、口縁部は指オサエで調整する。内面には布目が残存する。心棒に布をかぶせ、その上に 粘土塊を巻いて成形したようにみえる。

微妙殿調査区土坑62(図28、図版9) 土師器、焼締陶器がある。 XII期に属する。土師器皿(17~19) は口径11cm前後で内面には圏線が巡る。器表は磨滅が顕著である。口縁部はいったん外反した後、彎曲しながら上方におさめる。 焼締陶器には甕があるが、小片のため図示できない。

本所調査区溝1(図28、図版9) 土師器、磁器などがある。XI期に属する。土師器皿(20・21) はともに口径10cm前後あり、中型皿に属する。内面には圏線は巡らない。磁器には白磁椀があるが小片のため図示できない。

本所調査区土坑523 (図28) 土師器、焼締陶器などがある。XI期に属する。焼締陶器壷(22)

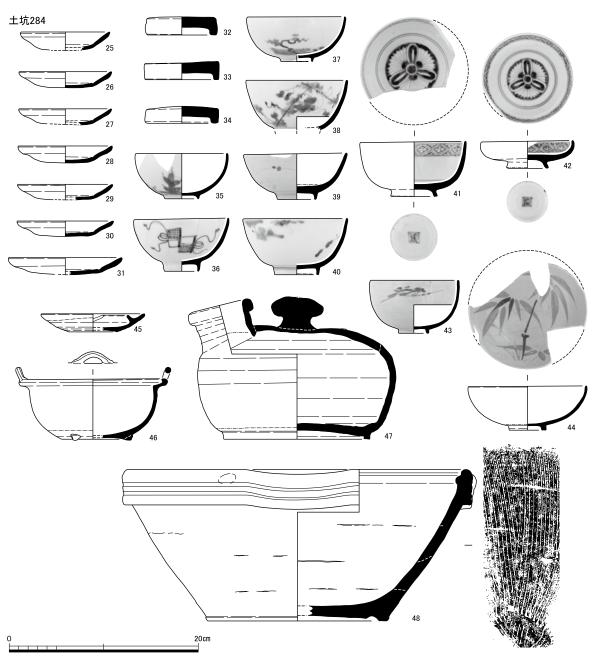


図29 土坑284出土土器実測図(1:4)

は口頸部が細く、花瓶の形態をもつ。肩部には沈線が7条引かれる。底部外面には2本線と5本線が交差した線刻文様(ヘラ記号)が描かれる。

本所調査区溝502 (図28) 土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器などがある。XI期に属する。志野織部向付(23)は完形品である。底部は粘土を輪状に丸め、3箇所に貼付する。脚に沿う4箇所にトチン跡がある。体部外面は紅葉と蔓が組み合さった文様が描かれ、内面は直線文様、内面の見込は軍配文様が描かれる。

本所調査区土坑519(図28、図版9) 施釉陶器がある。XI期に属する。施釉陶器水差(24)は 把手と口頸部の一部が欠損するが、体部はほぼ完存する。底部は低い高台を削り出す。鉄釉は底部 と口頸部の一部を除く全面にかかる。

韶陽院跡調査区土坑284(図29、図版10) 土師器、染付、京焼、施釉陶器、焼締陶器などがある。 XII期に属する。土師器皿(25~31)は口径9.5cmから12.0cmまであり、内面には圏線が巡る。 先述した土坑515、土坑62出土資料に比べると小型化し、口縁部下のくびれが顕著となる。焼塩壷蓋(32~34)は頂上部が平坦で内面には布目が付着する。33の天井部外面には対面する2箇所に 煤が付く。染付椀(35~41)・皿(42)は外面に呉須で文様が描かれる。文様は草木が多い。35はマツ、36は唐櫃と組紐、37は生垣と松が描かれる。39は底部に厚みがあり、外面の釉も灰色である。41・42は外面に青磁釉がかかる。内面は口縁部下に菱形文様、見込に三葉文が描かれる。43・44は京焼椀である。43は外面、44は内面に草木の文様をもつ。油受皿(45)は内面に返りをもつ。 鉄釉鍋(46)は口縁部に一対の把手が付く。溲瓶(47)と称されるものは中央に宝珠形のつまみをもつ。口縁部は片方に寄せて付けられる。内・外面に鉄釉がかかる。底部は削り出し。内面中央、つまみの裏側には絞り跡が見える。48は備前擂鉢である。内面の櫛目は4cm10本単位で時計回りに施文される。擂目は底部ほど擂り減り、平滑となっている。口縁付近は赤紫色を呈し焼成は良好で堅致である。

本所調査区土坑514(図30) 土師器、染付、京焼、施釉陶器、焼締陶器などがある。 XII期に属する。土師器皿(49)は口径12.2cm、器高1.5cmあり、体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は薄く終わる。この土師器皿のみ XI 期の形態を有する。土師器火入(50)は内湾する体部をもつ。口縁端部は内側に肥厚する。内外面とも摩滅が顕著である。51~54は染付椀である。51は断面形が角形の椀、52~54は通有の椀である、51は外面に青磁釉がかかる。内面は口縁部下に菱形文を帯状に配置する。52は外面を上下2段で6等分し、それぞれに菱形文と斜格子文を交互に配置する。53の外面には草木文様を配置する。高台は高い。54の外面には紅葉・楓様の文様を配置する。器壁は厚く、呉須による文様も小規模である。京焼椀(55)は口縁部が直立する。外面に松笠文様を配置する。鉄釉鍋(56)は口縁部を内側に折り返す。底部は粘土塊を貼付し三足とする。信楽擂鉢(57)は小片のため断面のみを図示する。擂目は10本単位とみられる。

韶陽院跡調査区土坑225 (図30、図版11) 土師器、染付、京焼、施釉陶器、焼締陶器などがある。 XIII期に属する。土師器皿 (58~60) は口径10cm前後、器高2cm程度ある。土坑284出土土師器皿 (25~31) より歪みが強く、特に58・59は顕著である。焼塩壷 (61) は口縁端部が直立しそ

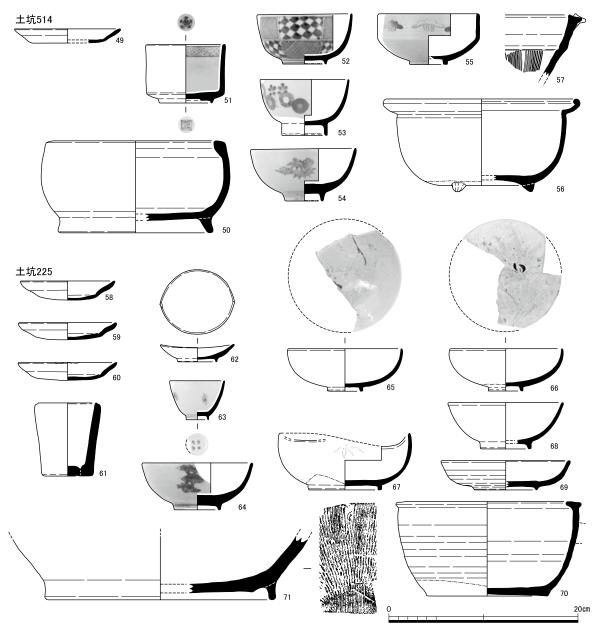


図30 土坑225・514出土土器実測図(1:4)

のまま終わる。底部には被熱の痕跡がある。図示した以外の個体には、外面に「泉□」のスタンプがある。青磁 (62) は木葉形を呈し、口縁部は波打つ。高台内も含めた全面に淡い青磁釉がかかる。完形品である。63・64 は染付椀である。63 は小杉椀で外面に杉葉と蝶を描く。64 は外面に松を描く。65~68 は京焼椀である。65・66 は内面に草木文様を描く。66 は被熱のため釉が失われている。67 は口縁部が波状を呈する。68 は内外面とも無文で、高台内を含めた全面に施釉する。施釉陶器皿 (69) は淡い緑色の釉がかかる。内面底部は釉剥ぎになる。外面底部もトチンが剥離した痕跡がある。体部外面は稜線が顕著でヘラケズリ跡とみられる。鉢 (70) は深い体部をもつ。底部外面以外の全面に灰釉がかかる。底部外面は糸切痕跡をとどめる。底部には粗砂が付着する。焼成時のトチン跡とみられる。把手が剥離した痕跡がある。片口なら行平か。信楽擂鉢 (71) は体部下半の破片である。内面の擂目は幅2.9 cmで10本1単位となり、反時計回りに施文されている。底部はさほ

ど磨り減っていない。

墓副葬品(図31・32、図版11) 本所調査区と微妙殿調査区で検出した墓のうち、本所調査区墓13・16中・16南・19・20・21・26と微妙殿調査区墓74・88では、副葬品として土器、ガラス瓶、土人形が入れられていた。

軟質施釉陶器壷(72)は口径3.9cm、器高5.2cm、高台径3.8cmある。口縁下は連子状とする。体部上半には花文、下半は山形の文様を陽刻で表現する。陽刻文様は型への彫り込みとみられる。左右一対の把手は獣面で表現される。把手のひとつは若干時計まわりに傾いている。把手の中には穿孔があり、紐で吊るすことが可能であった。釉は外面の全面にかかり、体部内面と高台内側は無釉である。線香立として使用されたとみられる。完形品。本所調査区墓19出土。

軟質施釉陶器蓋 (73~75) はいずれも浅い皿の形状をもつ。つまみはないが、下面の調整が雑なこと、上面に釉がかかり装飾性が高いことなどから、文様がある面を上にして使用したとみて蓋と判断した。3点とも口縁端部には窪みが5箇所形成されている。この窪みは棒状の工具を押圧して付けたとみられる。底面は無釉でヘラ切りの後は調整しない。上面には釉がかかる。釉による文様は、底部中央は緑色の丸文が3つ、灰色系の釉で「井」形の文様を描く。73は本所調査区墓21、74・75はその周辺から出土。

染付小椀(76)は口径2.3cm、器高1.3cmのきわめて小型の製品である。外面のみ赤色の釉がかかる。本所調査区墓20出土。

土師器鉢(77)は浅く平たい椀状を呈する。底部は平底で調整せず、乾燥時に仮置きした際の繊維質がそのまま残る。内面と外面はナデで調整する。口縁部は丁寧にナデる。内面のナデは底部まで達する。体部外面に粘土継目が観察できる。本所調査区墓26出土。

78・79は土人形である。78は着物姿で正座する男子像。両耳の上には穿孔がある。土型による 貼り合わせ成形で作られている。内部は空洞で中には粘土塊が入れられ、振るとカラカラと音が鳴 る。本所調査区墓13出土。79は5体の男子像が右肩を重ねるようにして並ぶことから、「友引人形」 と通称されるものである。裏面は右手を隣の左肩にかける仕種まで表現されている。貼り合わせに よる成形で中は空洞であるが、振っても音はしない。本所調査区墓16南出土。

ガラス瓶 (80・81) は口に栓が付く器形。ガラスは曇り色で透明性がない。栓 (80) を差し込むことで密閉性は高かったとみられる。薬ビンとして使用されたものであろう。本所調査区墓16中出土。

京焼椀(82)は口径12.3cm、器高4.9cmある。内面に笹状の文様が描かれる。底部外面のみ無釉で高台内側に「音羽」のスタンプが押圧される。微妙殿調査区墓74出土。

83・84は染付蓋付鉢である。鉢(83)は口径11.4cm、器高8.7cmある。体部は直立する。体部外面にコンニャク版による花文が6箇所配置される。蓋(84)は外径12.4cm、器高3.9cmあり、天井部にコンニャク版による花文が5箇所配置される。鉢内部には焼成された骨片が含まれ、骨壷として使用されたものである。微妙殿調査区墓88出土。

墓甕(図33・34、図版12・13) 本所調査区の墓9北、墓9中、墓9南、墓15、墓16北、墓19、

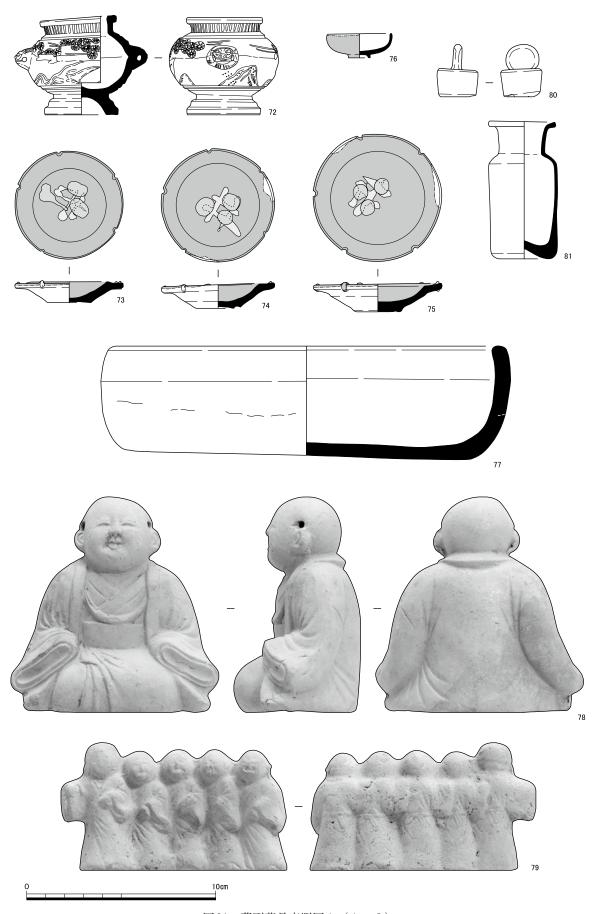


図31 墓副葬品実測図1 (1:2)

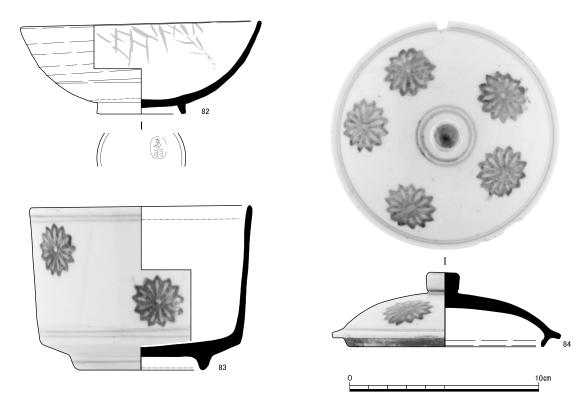


図32 墓副葬品実測図2(1:2)

墓26と微妙殿調査区の墓74の8基は主体部に陶器甕が使用されていた。このうち墓19は底部が残存するだけであったが、他の7基は口縁部から底部まで完存していた。甕はすべて信楽産であり、時期は江戸時代末期から明治時代と推定される。

墓15甕(85)は口径72.8cm、器高76.4cm、底部径21.5cmある。口頸部はやや外上方に延びる。口縁端部は内側に水平に延び、上に緩い面をもって終わる。口縁部下14cm付近で屈曲し、やや肩が張って体部に至る。内面は、底面から上に10cm、27cm、45cm付近に粘土の接合痕跡がみられるため、体部4段、口頸部1段の粘土継ぎ足しによって全体が成形されたと想定される。鉄釉をハケで厚く塗布し、ハケの痕跡が明瞭に残されている。内面は底部まで釉が塗布されるが外面底部は無釉である。底部に墨書があった形跡があるが、判然としない。

墓74甕(86)は口径67.0cm、器高67.8cm、底部径25.0cmある。器高に比べて底部径が大きい。口頸部は9cmしかなく、短い印象を受ける。内面は、底面から上に11cm、22cm、39cmに粘土の継ぎ目痕跡がみられ、体部4段、口頸部1段の継ぎ足しで形成されたようにみえる。口頸部外面は指による押圧が顕著で、凹線が形成される。凹線はくびれ部も含めると5本となる。釉はハケ塗りで、内面は底面から上に22cm~42cm間は釉が厚く塗られる。底部は無釉で墨書はみられない。

墓26甕(87)は口径57.9cm、器高65.3cm、底部径21.6cmある。墓15甕(85)より一回り小型で、器壁も薄い。内面は、底面から上に13cm、31.5cmに粘土継ぎ目が観察でき、体部3段、口頸部1段の4段で成形されたようにみえる。底部外面は無釉で墨書がある。墨書は中央に「二」があり、縁に沿って「な と せ て」と読める。「二」は墓9中甕(89)に「イ」があることから、これも片仮名によって順番を表記したとみられる。

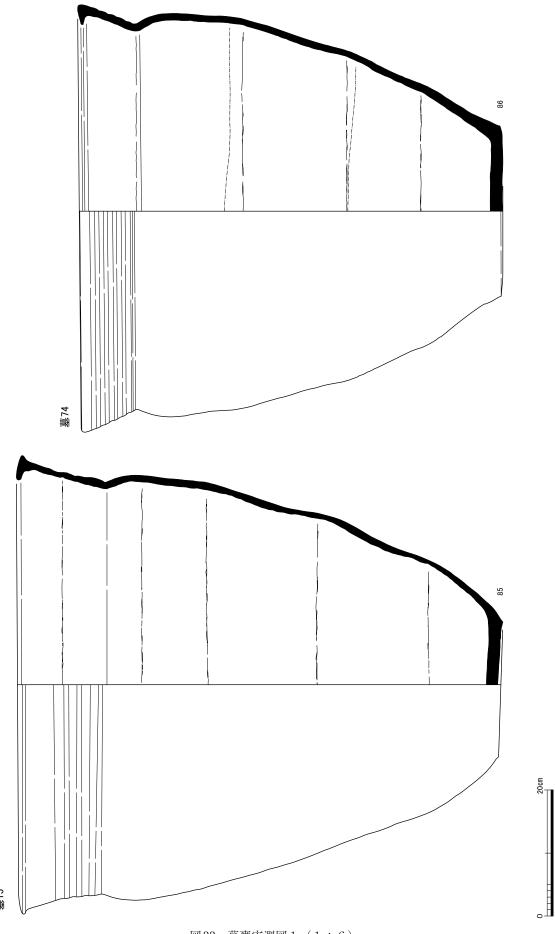


図33 墓甕実測図1 (1:6)

この他、以下の4点の甕底部にも墨書がみられた。

墓9北甕(88)は底部径23.6cmある。墨書は仮名が3文字で「すりわ」と読める。

墓9中甕(89)は底部径20.8cmある。底部は無釉。墨書は「イ」と読める。「イ」は片仮名で、順番を示す表記として墨書されたのであろう。

墓9南甕(90)は底部径23.9cmある。墨書は笠形の中央に「十」が組み合う。屋号のようであるが、「十」は数字の可能性がある。

墓16北甕(91)は底部径22.8cmある。墨書は笠形の中央に「七」、その下方に仮名が3文字あり、墓9北甕(88)と同じく「す り わ」と読める。

これらの墨書であるが、文字・記号の種類や種類が共通することから、甕の持ち主が書いたものでないと判断できる。甕の生産地で書かれたか、問屋のような保管場所で書かれたか、いずれかとみられる。

(2) 瓦類

軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦、袖瓦、板塀瓦、道具瓦、平瓦、丸瓦などがある。平瓦が最も多い。

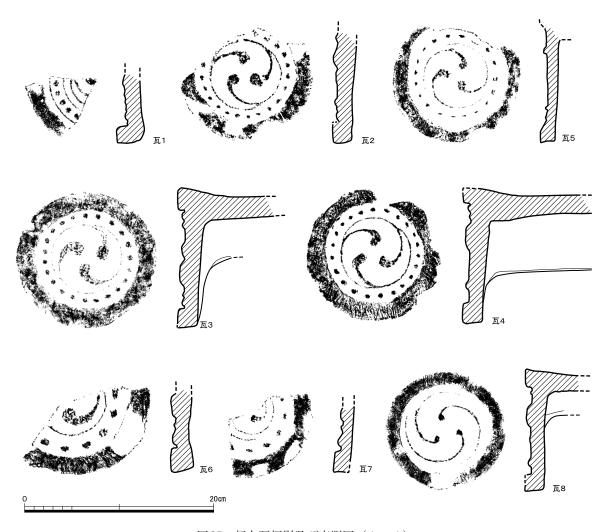


図35 軒丸瓦拓影及び実測図(1:4)

軒丸瓦(図35、図版14) 瓦当文様はすべて巴文である。巴は瓦8を除くすべてが右方向(時計回り)に巻き込む。巴文の尾部先端の接続の仕方や珠文の大きさ、配置数に違いが認められる。

瓦1は巴文の尾部の巻込が強い個体である。焼成良好で堅緻。本所調査区墓16北出土。

瓦2は巴文の尾部の先端が連接する。珠文数は23個で出土資料の中で最も多い。焼成不良。本所調査区墓12出土。

瓦3・4は巴文の尾部の先端が連接する。珠文数は22個で、瓦2より1個少ない。焼成不良で淡灰色を呈する状態は、軒平瓦の瓦9~11、瓦12・13に類似し、セット関係にあった瓦とみられる。ともに本所調査区溝502出土。

瓦5は巴文の尾部の先端が途切れるもので珠文数は19個ある。巴は盛り上がりが低く、間隔も

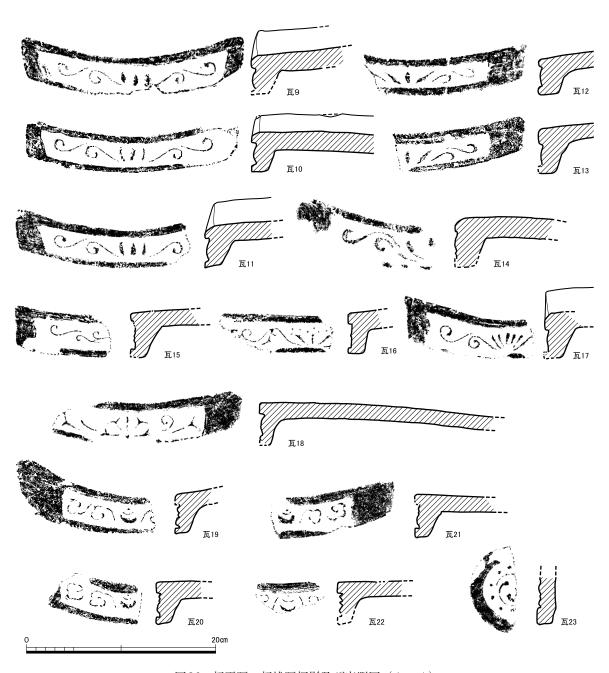


図36 軒平瓦・軒桟瓦拓影及び実測図(1:4)

やや広い。瓦当縁は斜めとなり、作りが雑な印象を受ける。本所調査区溝502出土。

瓦6は珠文が大きい。韶陽院跡調香区土坑238出土。

瓦7は巴が小さい。韶陽院跡調査区検出作業時出土。

瓦8は巴文のみで構成され、珠文は配置されない。本所調査区土坑514出土。

軒平瓦・軒桟瓦(図36、図版14) 瓦当文様から以下に分類した。

瓦9~11は均整唐草文で中心飾りは太い縦棒の両側をカッコで囲む。左右は唐草文で2回反転 し、唐草の先端は強く巻込む。焼成不良品が多い。3点とも本所調査区溝502出土。

瓦12・13は均整唐草文で中心飾りは太い縦棒の左右に斜め上方の棒を配置する。左右は唐草文で2回反転し、先端は緩く巻込む。焼成不良が多い。本所調査区溝502から3点出土、瓦9~11と 共存する。

瓦19~22は均整唐草文で中心飾りは扁平な壷形を配置する。中心の壷は肉厚のものが主流であるが、瓦22は盛り上げが低い。左右は唐草文で2回反転する。唐草は湾曲しながら展開する。文様の彫り出しはシャープで、黒色を呈し、焼成は良好、堅緻である。瓦19~21は韶陽院跡調査区土坑238、瓦22は本所調査区検出作業時出土。

上記以外の軒平瓦は瓦当文様が個々で異なる。

瓦14は大振りでの軒平瓦で、唐草は長く、2回反転である。微妙殿調査区西壁(図19の6層) 出土。

瓦15は反りが少なく、唐草は3回反転である。韶陽院跡調査区土坑285出土。

瓦16は中心飾りが3葉の上に珠文を配置し、左右の唐草は2回反転とみられる。韶陽院跡調査 区土坑225出土。

瓦17は中心飾りが5本線で放射状に広がる。左右の唐草は2回反転である。韶陽院跡調査区土

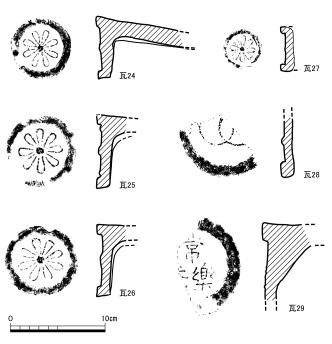


図37 小丸瓦・飾瓦拓影及び実測図(1:4)

坑225出土。

瓦18は中心飾りと唐草の先端が二股 に分かれる。唐草は2回反転である。 本所調査区溝502出土。

瓦23は軒桟瓦の丸瓦部分である。韶 陽院跡調査区土坑238出土。

小丸瓦・飾瓦(図37、図版14) 5点 ある。

瓦24~26は瓦当が単弁八葉菊花文である。中房は円形浮文を貼り付ける。 裏面には丸瓦を差し込んで固定する。 丸瓦と瓦当が剥離するものはみられない。瓦24は韶陽院跡調査区土坑237、 瓦25は韶陽院跡調査区土坑287、瓦26

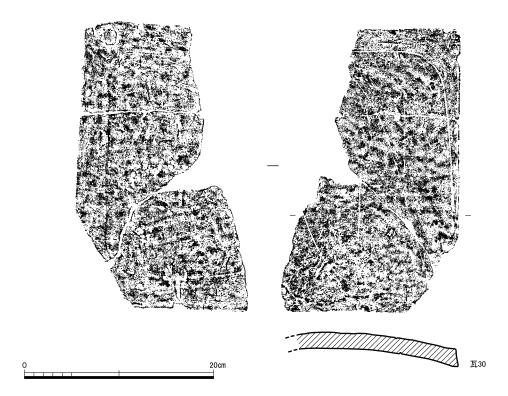


図38 平瓦拓影及び実測図(1:4)

は本所調査区溝502出土。

瓦27は直径4.6cmと非常に小型の丸瓦で裏面全面に剥離痕跡がある。道具瓦として他の瓦に接合していたとみられる。韶陽院跡調査区土坑238出土。

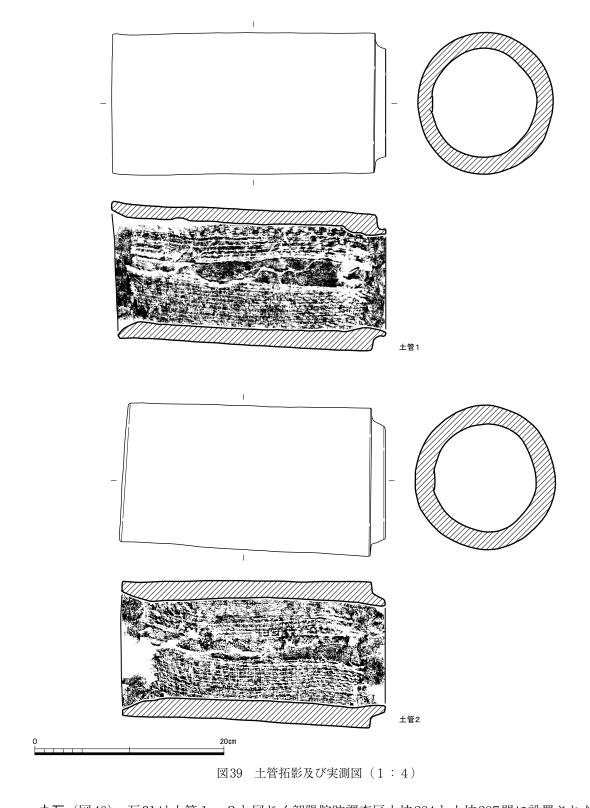
瓦28は瓦当面に輪違い文を配置したもので、軒桟瓦の丸瓦部の可能性もある。韶陽院跡調査区 土坑284出土。

瓦29は瓦当面に「常楽□」の3文字を浮き出している。裏面が厚いため飾瓦の一部とみられる。 本所調査区土坑506出土。

この他に隅瓦も数点出土している。

線刻文様がある平瓦(図38) 瓦30は平瓦凸面にヘラで線刻文様を描いたものである。線刻は縁に沿って緩くカーブし、反対側にも同様のカーブする線、両方の間にも2本の弧線が描かれる。本所調査区溝502出土。

土管(図39・40、図版15) 土管1~3は韶陽院跡調査区土坑284と土坑287間に設置された土管組288で使用されたものである。土管1・2は完形品であるが、土管3のみ先端の一部が欠損する。外面はナデで調整する。白斑が、片側は縦方向に長く、反対側は縦方向に斑点状に付く。丸瓦玉縁に相当する部分の突出は1.5cm程度で、丸瓦に比べて極端に短い。内面は布目の付着が顕著である。このことから、棒状の器具に布を巻き、その上に粘土を巻き付けて成形した後、心棒を外したと推定できる。表面は、約半分が磨滅する。残存状態が異なるのは、半分が露出し、裏側は地中に埋まっていたためと推定される。土管1は長さ29.0cm、直径14.9cm、厚さ1.6~2.0cm。土管2は長さ28.1cm、直径15.2cm、厚さ1.8~2.1cm。土管3は長さ28.5cm、直径14.9cm、厚さ1.6cmある。



丸瓦(図40) 瓦31は土管 $1\sim3$ と同じく韶陽院跡調査区土坑284と土坑287間に設置された土管組288のうちの最下部で使用されたものである。先端は欠損するが、これは長すぎたため人為的に割られたものとみられる。凸面側から2孔を穿つ。長さ37.4cm以上、幅13.7cm、玉縁の長さ3.2cmある。玉縁の取り付け部は丸瓦主軸からみると歪んでいる。

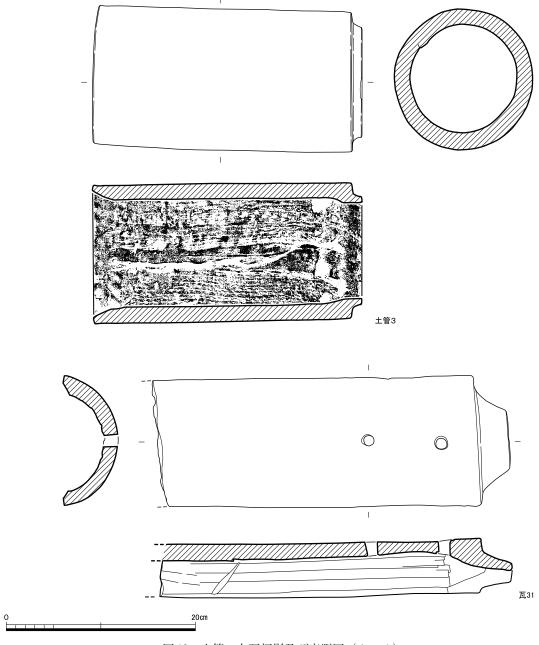


図40 土管・丸瓦拓影及び実測図(1:4)

(3) 銭貨(図41、図版15)

銭貨は合計30枚出土した。内訳は、本所調査区では墓9北から寛永通寳6枚、墓9南から寛永通寳6枚、墓15から寛永通寳6枚、整地層18から3枚(種類不明)、攪乱坑から寛永通寳1枚、微妙殿調査区では土坑62から寛永通寳6枚、墓74から2枚(種類不明)、韶陽院跡調査区では土坑225から1枚(種類不明)である。ただし、癒着するものが多いこと、保存状態が悪いことなどから、種類が判明したのは図41で示した11点にとどまった。

銭1~5は本所調査区墓9北出土で、銭1・2は古寛永、銭3~5は新寛永である。

銭6~8は本所調査区墓9南出土で、銭7・8は古寛永、銭6は新寛永である。

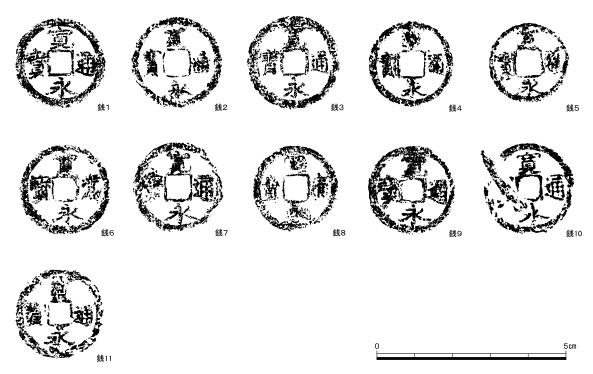


図41 銭貨拓影(1:1)

銭9・10は微妙殿調査区土坑62出土で、ともに古寛永である。銭11は本所調査区攪乱坑出土で、 古寛永である。

(4) 金属製品(図42、図版15)

キセル・釘、金具、板状製品などがある。

キセルは本所調査区墓8・14・15・16中の4基から出土した。4基とも墓の副葬品で、雁首と吸口が揃って納められていた。この他、微妙殿調査区から1点(吸口)、韶陽院跡調査区から1点(吸口)出土した。金1は雁首と吸口の間の木質部が残存する完存品である。雁首と吸口の直径は他よりやや太い。雁首の長さは5cmで、太さに比べ短い。雁首、吸口ともに縦方向に線が刻まれる。この線は装飾とみられる。吸口には金メッキが残存する。本所調査区墓15出土。金2・3は雁首と吸口で、雁首先端の火口は欠損する。ともに銅管を製作した際の継目が残る。本所調査区墓8出土。金4・5は雁首と吸口で、両方とも中に竹が乾燥状態で残存する。本所調査区墓14出土。金6・7は雁首と吸口で、太さの割りに長さは短い。本所調査区墓16中出土。金8は吸口で、直径は細い。銅管を製作した際の継目が観察できる。韶陽院跡調査区土坑284出土。

金9は釘で先端は欠損する。身は扁平で薄い。頭部は片方に折り曲げている。本所調査区墓13出土。金10も釘とみられるが、錆が顕著で細部は観察できない。韶陽院跡調査区土坑225出土。金11は釣針形を呈する金具で両方の先端は欠損する。本所調査区墓16南出土。金12は鉄棒、金13は鉄板を緩やかに湾曲させた製品で、ともに用途は特定できない。鉄12は本所調査区墓13出土。鉄13は微妙殿調査区土坑61出土。金14は長さ16.8cm以上ある鉄板で、鉄鎌のような製品が推定できる。韶陽院跡調査区土坑208出土。金15も鉄板の製品であるが、用途は特定できない。韶陽院跡調査区

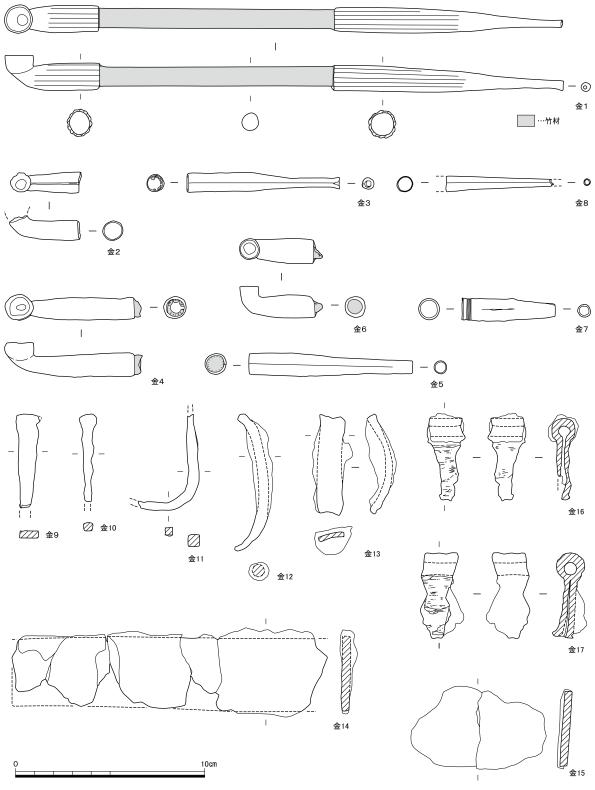


図42 金属製品実測図(1:2)

土坑287出土。

金16・17は頭部を輪状とし、先を二股に分け先端を直角に折り曲げたもので、木材を固定するための留金具とみられる。側面には木質が残存し、厚さ3cm程度の木材を固定していたとみられる。微妙殿調査区整地層41出土。

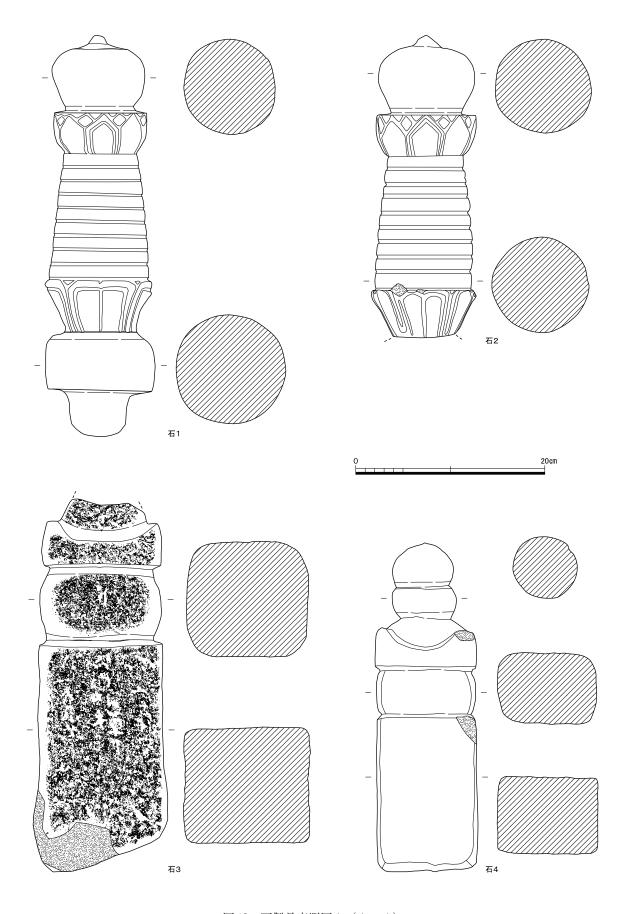


図43 石製品実測図1 (1:4)

(5)石製品(図43·44、図版16)

宝篋印塔、一石五輪塔、滑石製石釜、 硯、砥石、砥石未成品、石製灯籠中台な どがある。

宝篋印塔(石1・2) 先端に取り付く相輪が8点確認できた。内訳は、本所調査区溝502から6点、微妙殿調査区の 重機掘削時に2点出土している。

宝篋印塔の相輪は上から「宝珠」「請花」「九輪」「請花」「伏鉢」の5つの部位で構成される。石1はすべての部位が残存し、石2は伏鉢を欠く。残り6点は、最下部の伏鉢を欠くものが2点、九輪より下が欠損するものが1点、宝珠を欠くものが1点、伏鉢のみが2点で、これらは図示していない。

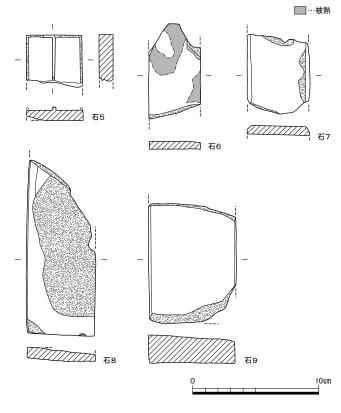


図44 石製品実測図2(1:3)

石1・2とも上の請花には蓮弁が刻まれる。ただし蓮弁そのものは山形を呈しており、「蓮弁」というよりも「山」か「雲」のようにみえる。弁と弁の間には同様の山形文様が配置されており、遠くの山並みを表現したようにみえる。弁の数は八弁である。そのうちの一弁は周囲に界線がめぐり、他の弁と区別される。正面を意識したものであろう。下部の請花も八弁であるが、こちらは蓮弁が二弁一単位の複弁として表現され、それぞれの弁の周囲には界線がめぐる。石材の種類は石英閃緑岩とみられる。両方とも本所調査区溝502出土。

一石五輪塔(石3・4) 2点ある。五輪搭は、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪で構成され、一石を削り出して作られている。石3は上部の空輪・風輪が欠損する。表面に文字を線刻する。線刻文字は、火輪は梵字「【」(ラ)、水輪は梵字「【」(バ)、地輪は向って右に「□□□□」(年号か)、中央に梵字「ズ」(ア)、その下に「□□禅門」、左に「□月□□」(月日か)が判読できる。石英閃緑岩製。本所調査区盛土出土。石4は5つの部位がすべて完存するが、石3より小型である。線刻文字は確認できない。花崗岩製。本所調査区墓21出土。

硯(石5) 小型の硯で製品の下半が欠損する。中央に仕切りを設ける二連硯で、右半には朱が 付着する。韶陽院跡調査区土坑238出土。

砥石(石 $6\sim9$) 石 $6\sim8$ は厚みがなく平坦である。表面は平滑に研磨され、色調は黄色系を呈する。材質は珪質粘板岩である。石9 はやや厚みがあり、材質は砂岩製で、荒砥に属する。石6 は本所調査区溝502出土。石 $7\cdot8$ は韶陽院跡調査区土坑238出土。石9 は韶陽院跡調査区土坑225出土。

(6) 木製品(図45·46、図版17·18-1)

本所調査区の墓9中、墓10北、墓15から、櫛、扇、天蓋の軸・骨、装飾をもつ木札、串などが 出土している。

櫛 (木1・2) 木1は長さ15.5cm、幅4.5cmある。中央に漆による文様がある。歯の数は52本であるが、中央部の11本分が欠損する。墓15出土。木2は長さ14.7cm、幅3.3cmある。櫛幅が狭く細長い。また両端は歯が短い。歯の数は45本であるが、図の左端3本分が欠損する。墓9中出土。

漆器皿(木3・4) 木3は内面に朱漆が塗られるが、鮮やかさは劣る。見込部分のみさらに赤色を重ねる。外面は黒漆で、上に金泥で絵画が描かれていたようであるが、文様は判然としない。墓15出土。木4は内面に朱漆が塗られ、外面は黒漆の上に藤文が3方向に描かれる。墓9中出土。なお墓9南、墓16北からは漆器椀・皿のものとみられる漆膜が出土したが、木質は残存していなかった。

木札(木5~9) 長さ16.5cm前後、幅5.6cm前後、厚さ0.6cm前後ある長方形の板である。隅に切り込みを入れ多角形とする。板の一面に墨書で円形や弧線を描く、円弧は二重で、人物の目のように見える。上端に釘穴がある。別の板に固定したとみられる。すべて墓15出土。類似するものが2005・2006年に実施された伏見区竹中町の調査で江戸時代末期の墓から出土している。

天蓋軸(木10) 天蓋の先端に取り付けられた軸部と推定できる。頭部は尖り、断面八角形を呈する。中程は円形に削り込む。下半分は断面正方形で下端は十字に切り込む。ここに骨を差し込んで固定したのであろう。図で左上の溝には木材が残存する。墓15出土。

箸状製品(木 $11\sim14$) 4点ある。長さ20cm前後あり、一方の先端を削って尖らせる。断面は方形である。形状からは箸として製作・使用されたものとみられる。すべて墓15出土。

板状製品(木 $15\sim17$) 3点ある。下方と側面に切り込みがあり、おもちゃのピストルのような形状を有する。3点とも片方に寄せて穿孔が2箇所あり、その下には墨書がある。穿孔には木 $18\sim22$ の串を差し込む。すべて墓10北出土。

串状製品(木 $18\sim22$) 木 $18\sim20$ は長さ7.6cm前後、最大幅1.6cmあり、木 $15\sim17$ の穿孔部に刺し込んだ状態で出土した。串先の部分は黒く汚れている。3点とも墓10北出土。木 $21\cdot22$ は木 $18\sim20$ より長さがあり、先から7cm前後で上が破損している。2点とも墓15出土。

天蓋骨(木23~28) 木23~25は先端が蕨手状に巻き込むもので、木25は先端を欠損するが、本来は木23、24のようであったとみられる。木26~28は緩く彎曲するもので、木23~25と合体して天蓋の骨であったと推定できる。すべて墓15出土。

数珠 10点以上あるが、当初の数量は不明である。直径0.6cm~0.9cm、材質はモチノキである。 幕26出土。

扇 2点ある。ともに残状態が悪いため、図、写真では提示できない。骨数はともに12枚と推定される。基部から上へ1.8cmの位置に綴じ穴がある。また上へ13cm付近から先は銀色を呈する。装飾の銀紙が貼られていたのであろう。 $214 \cdot 15$ 出土。

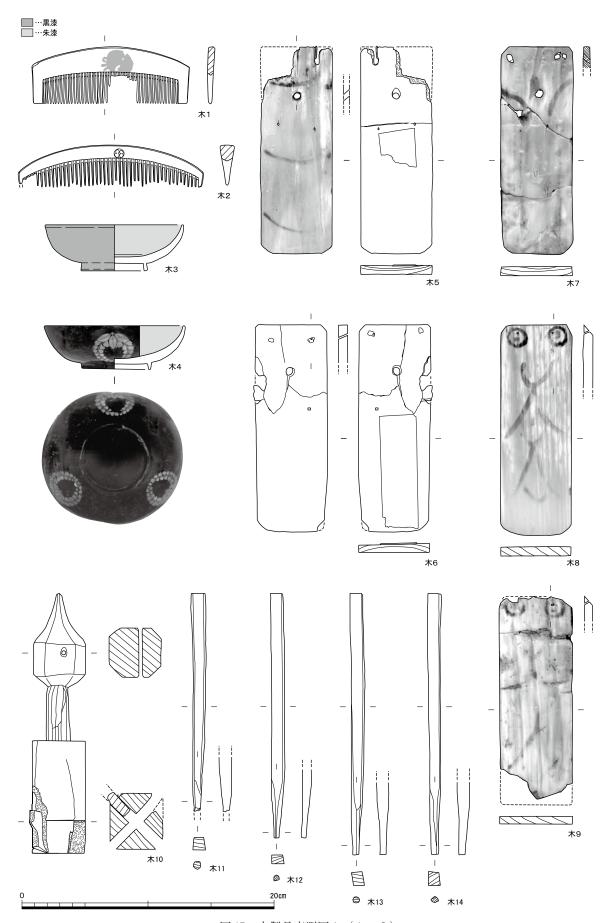


図45 木製品実測図1 (1:3)

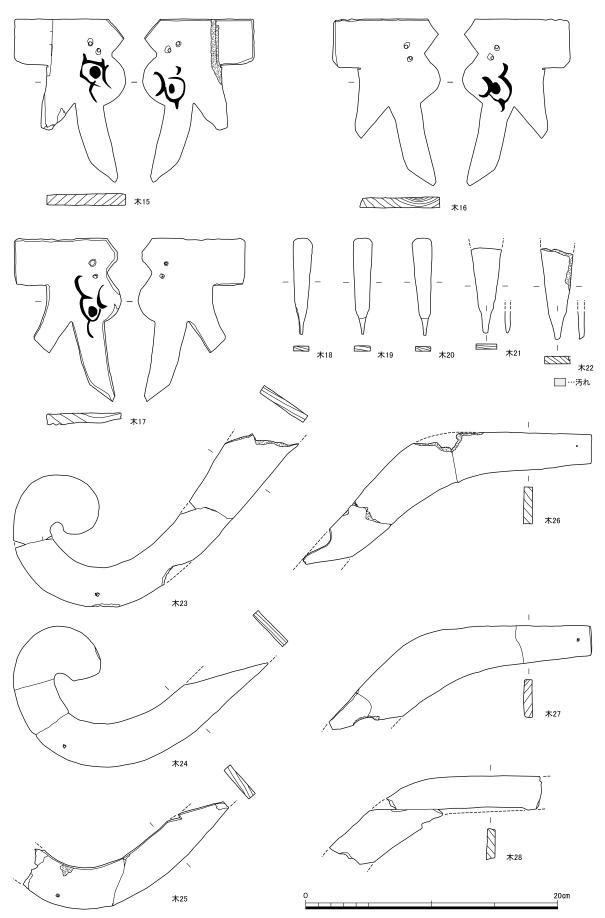


図46 木製品実測図2 (1:3)

(7) 壁土・窯壁 (図版18-2)

本所調査区溝 1、韶陽院跡調査区土坑 $184 \cdot 225 \cdot 256 \cdot 284$ などから出土している。溝 1 から出土した壁土塊は焼成が弱いため、硬く焼け締まっていない。土坑 284 から出土した焼土塊(土 10)は大きな個体があり、木舞が剥離した痕跡も確認できる。個体は硬く焼成されているが、高温に晒されたとまではいえない堅さである。土 $7 \sim 10$ は 1 面が黒色化し、内湾するため、窯壁などの鋳造施設の一部とみられる。

4. 小 結

史跡妙心寺境内では、これまでに数回の調査が実施されており、江戸時代を中心とした遺構・遺物が良好に検出されている。今回は、本所調査区、微妙殿調査区、韶陽院跡調査区の3箇所で、それぞれ異なる調査所見が得られたので、それらを時代順にまとめておく。

平安時代 平安時代については、本所調査区で前・中期に造られた池 (池30) を検出した。この池は平安京右京一条四坊七町の邸宅内に設けられた園池の一部とみられるが、池の下部は湿地状堆積を示しており、自然の窪地を園池に利用したものとみてよい。また、調査区西壁沿いが深くなっていることから、池本体は調査地のさらに西側に広がっていたとみられる。同様の池状遺構は北西部の立会調査で確認されており、埋没時期はやや異なるものの関連性は注目してよい。

微妙殿調査区、韶陽院跡調査区では平安時代前・中期の遺構・遺物は認められなかったが、微妙殿で1979年に実施された調査(調査2)では平安時代前期・後期の遺構が確認されている。今回は検出できなかったものの周囲には遺構が遺存する可能性は高いといえる。

鎌倉時代から室町時代 鎌倉時代から室町時代の遺構は、微妙殿調査区で柱穴、土坑など検出した。微妙殿調査区は妙心寺の七堂伽藍の真北側に位置する。室町時代には妙心寺が開創されることから、出土した遺構・遺物は妙心寺の変遷を考える上で貴重な所見といえる。また、微妙殿調査区では土御門大路北側溝に該当する溝(溝40)を検出した。溝からの出土遺物は少なく、正確な年代決定は困難であったが、条坊遺構が当該地に及んでいたことを示す資料である。

江戸時代前期 江戸時代前期の遺構としては、本所調査区で溝1・502を検出した。2つの溝はともに北で東に振れており、調査地の東を流れる宇多川とほぼ同じ方位である。特に溝1は、北約100mに位置する涅槃堂の調査で検出された溝60と規模・方位が類似することから、その南延長に該当する可能性が高い。そのように考えるなら、妙心寺の東端は宇多川を東限として、その内側にも溝が平行して掘られていたことになる。溝1の性格をめぐっては、今後とも検討が必要である。

江戸時代中・後期 韶陽院跡調査区の地山は黄褐色を呈する粘土・シルトであることから、江戸時代中期には土取場として利用されたことが判明した。塔頭の北端に位置するため、粘土・シルトの採掘場として利用されたのであろう。土取穴の平面形は不整形であるが、これは敷地が広かったため掘削にさほど制約がなかったためと考えられる。

江戸時代末期から明治時代 本所調査区で墓群を検出した。調査区の北側には養源院墓地が現

存しており、検出した墓群はその南延長部に相当する。主体部の構造は、① 箱形木棺の中心に甕を据え遺体を葬ったもの、② 箱形木棺の中に遺体を直接葬ったもの、③ 甕を直接地中に埋め遺体を葬ったもの、の3種類が確認できた。墓への副葬品は非常に乏しく、これらが墓群の特徴として指摘できる。この他、墓壙掘形から墨書をもつ木札が出土しており、葬送儀礼を示すものとして注目される。このような墓群の内容は、当研究所が2005・2006年に伏見区竹中町で調査した墓群と共通性が高く、近世末期の墓制を知る貴重な資料を提供したものといえる。

韶陽院調査区では土取穴が埋められた後、畑が広がり、その間に通路や肥溜めが置かれる様子が 判明した。塔頭北端部の景観が復元可能になったことも、今回の調査成果といえる。

註

- 1) 墨書土器の判読については、京都市歴史資料館の宇野日出生氏よりご教示いただいた。
- 2) 『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年 P114に類似する製品が掲載される。
- 3) 『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006 27 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年 図版73:74参照
- 4) 『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年 P23参照
- 5) 『史跡妙心寺境内·平安京右京一条四坊八町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002 16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 6) 『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2006 27 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007 年

第3章 調査その2 (平成25年度)

1. 経 過

調査その2は、配管路工事に伴う発掘調査である。調査対象地は、史跡妙心寺境内及び平安京右京一条四坊九・十町、条坊路である土御門大路・鷹司小路・無差小路に相当する。

発掘調査は、府・市文化財保護課によって配管路上に調整・設定された発掘調査区について2013年12月10日から実施した。発掘調査区は、当初、山門から法堂に至る妙心寺主要伽藍周辺に1~11区の調査区が設定されていたが、山門南西側の5区は工事区外に当たるため除外され、その後、新たに追加された調査区を含めると、13箇所に及ぶ。発掘調査は、山門及び仏殿の西側に6区と11区、次いで東海庵南側及び微妙殿東側に1区と10区を設定して調査を進め、12月中に各調査区の調査を終えた。2014年1月初旬からは、仏殿及び法堂の西側に7区と8区、中旬には法堂北東及び南東側に2区と9区、後半には仏殿東側及び山門の北東側に3区・4区、本所西側のハンドホール予定地に12区を設定して調査を進めた。2月初めからは、3区で検出した近世から中世に属すると考えられる柱穴や土坑などの広がりについて確認が必要との府・市文化財保護課の指導を受け、それを確認する目的から、3区に北接して13区、南接して14区を設定し、調査を進めた。2月14日には、現場での作業を終了した。2月21日には、現地仮設事務所・仮囲いなどを撤去し、全調査を終了した。

2. 遺 構

各調査区は、調査経過で示したように主に妙心寺中心伽藍周辺に設定されている。1・10・12区 については、中心伽藍から東側に離れた位置にある。

各調査区とも層位・検出遺構ともそれぞれ異なるため、各調査区ごとに述べる。従って、基本層 序は、各調査区の記述ならびに実測図を参照されたい。各調査区の断面から地山の検出高を比較す ると、概して山門から法堂に至る妙心寺中心伽藍に近接した調査地点では、地山の標高が高く、東 西方向に緩やかに傾斜する。



図47 2・3・13・14区調査前全景(南から)



図48 3区調査風景(南から)

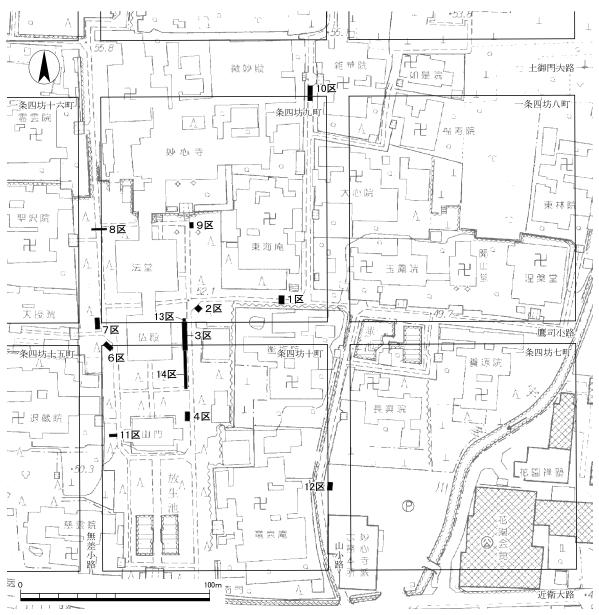
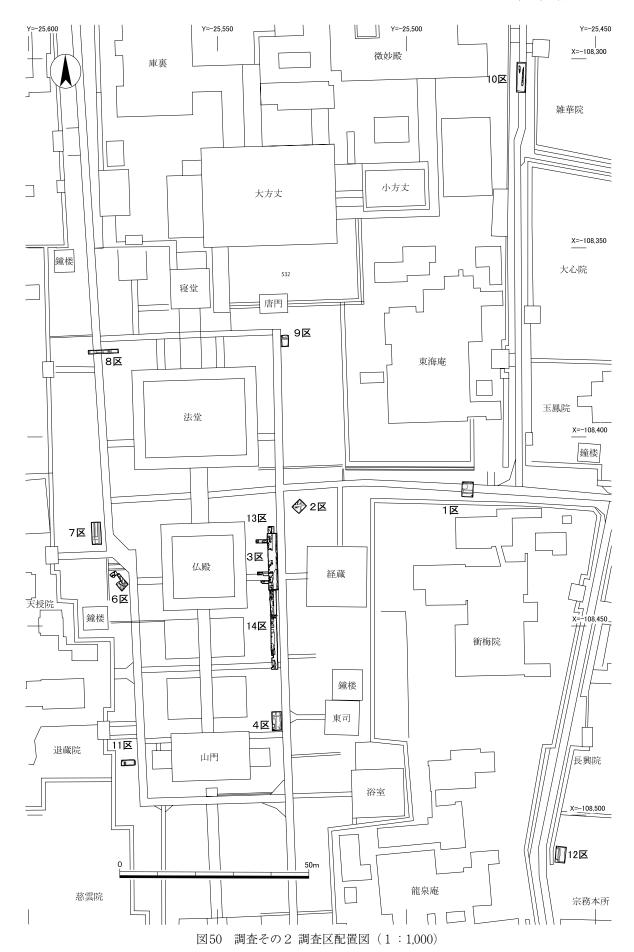


図49 調査その2 調査位置図(1:2,000)

表5 調査その2 遺構概要表

時 代	遺構	備考
平安時代	14区:土坑18	
鎌倉時代 ~室町時代	2区:土坑2、3区:土坑33・34、柱穴6、 8区:土坑1、整地土層、 10区:土坑1・3・5・7、柱穴2、溝4・6、遺物包含層、 11区:溝1、14区:土坑17、柱穴13~16、遺物包含層	
江戸時代	3区:土坑1・18・19、柱穴2・3・7・8・11・15・20・21、 4区:土坑1、7区:積土層、8区:積土層・整地土層、 9区:土取穴1、11区:整地土層、14区:土取穴3~5	

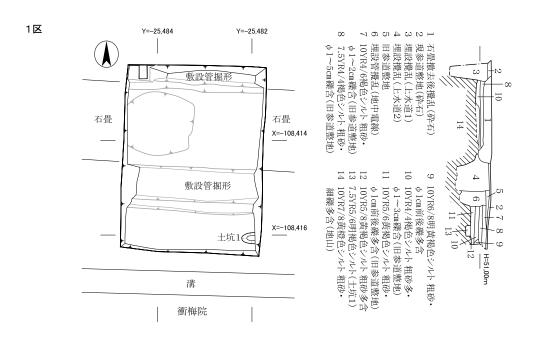


- 53 -

各調査区内は、地中埋設管などの現代の攪乱が多数分布し、遺構の遺存する箇所は狭い。遺構は整地土層上面ならびに地山上面で検出した。検出した遺構には平安時代・鎌倉時代・室町時代・ 江戸時代のものがある。以下に主要な遺構について述べる。

(1) 1区の遺構(図51、図版19-1)

東海庵と衡梅院間の東西方向の参道上に位置する。平安京跡では右京一条四坊九町の南東部に相当する。調査区の規模は、東西約3.0 m、南北約4.0 mある。地表面の現況は、南へ緩やかに約0.1 m下がる。調査区の南部及び北端には埋設管による攪乱が東西方向に延長する。



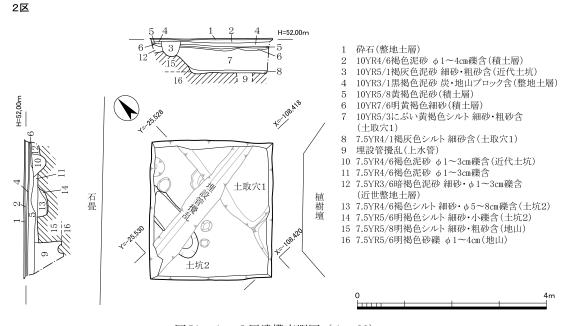


図51 1・2区遺構実測図(1:80)

基本層序

現地表下0.1 mまで現参道積土層、積土層下は、北半で0.25 m、南半では0.45 mまで旧参道整地土層が堆積し、整地土層下は、地山の黄橙色シルト層が堆積する。地山上面の標高は50.80 m。

旧参道を形成する土層は、北半では2層、南半では4層堆積する。旧参道積土層のうち、10層の 褐色シルト層までは、瓦細片や花崗岩片を包含し、近世に属すると考えられる。8・10・11層上面 は、固く路面状を呈する。10層及び11層南端では、南へ下がる北肩口を検出した。この肩は東西方 向に延長し、大半は調査区外に広がるが、各路面状面に付属する溝の堆積土層の可能性がある。

潰構

土坑1 調査区南東隅の地山上面で検出した。東肩口は調査区外に広がる。検出面での現存規模は、長さ約0.3 m、幅約0.2 m、深さ0.1 mある。遺物は出土していない。

(2) 2区の遺構(図51、図版19-2)

妙心寺仏殿の北東部に位置する。平安京跡では右京一条四坊九町の中央南端に相当する。調査区の規模は、長辺約3.0 m、短辺約2.6 mある。地表面の現況は、ほぼ平坦である。調査区内中央北部には埋設管による攪乱が東西方向に延長する。

基本層序

現地表から0.3 mまで、近代積土層が堆積し、同層下は、江戸時代と考えられる積土層が厚さ0.1 m前後堆積し、明褐色シルト・明褐色砂礫層の地山となる。地山上面の標高は51.80 m。

遺構

土坑2 地山上面で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈する。北肩口は調査区外に延長し、南半は敷設管攪乱により削平を受ける。検出面での現存規模は、南北長約1.7m、幅約0.6m、深さ約0.2mある。鎌倉時代と考えられる土師器皿・瓦器椀の細片や平安時代後期の土師器皿細片が出土した。

土取穴1 調査区東半で検出した。ガラス瓶片を包含する。

(3) 3区の遺構(図52・53、図版20)

妙心寺仏殿の東側に位置する。平安京跡では調査区ほぼ全体が鷹司小路に相当する。調査区の規模は、東西約2.5 m、南北約15.0 mある。また、府・市文化財保護課の指導を受け、3区西側に東西方向の拡張区を3箇所設定した。北拡張区は、東西3 m、南北0.9 m、中拡張区は、東西2.9 m、南北約0.8 m、南拡張区は、東西2 m、南北0.8 mの規模に設定した。地表面の現況は、南へ緩やかに約0.4 m下がる。調査区内東部には埋設管による攪乱が南北方向に延長する。

基本層序

現地表から0.1 mまで現代積土層が堆積し、同層下は、江戸時代と考えられる積土層が厚さ0.1~0.25 m前後堆積し、明褐色シルト・褐色砂礫層の地山となる。地山上面の標高は、北端で51.75 m、南拡張区で51.45 m。

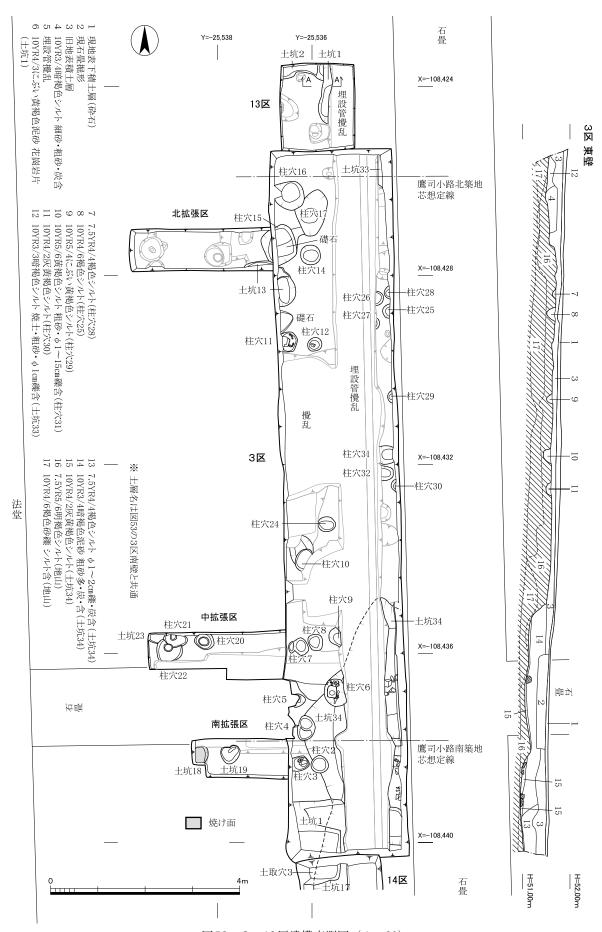


図52 3・13区遺構実測図(1:80)

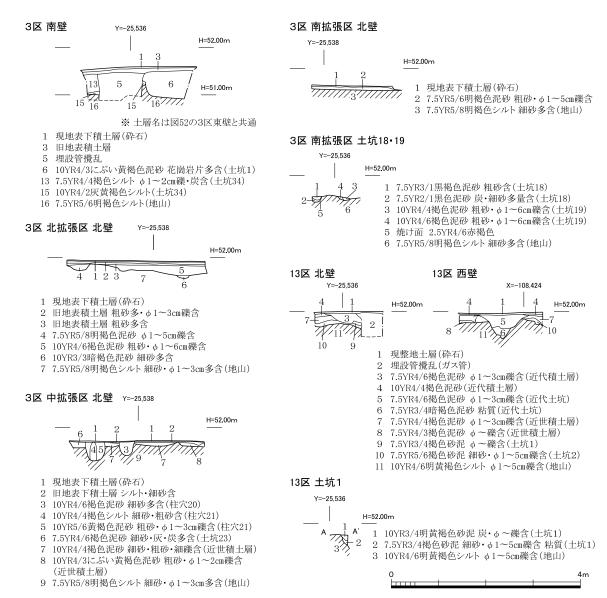


図53 3・13区断面図(1:80)

遺構

ほぼ全域で近世の柱穴、土坑や土取穴を検出した。南端と北端の東壁際では中世の土坑を検出した。鷹司小路に関連する遺構については未検出である。主要な遺構について述べる。

土坑34 調査区南端で検出した。東・南へは調査区外へ広がり、北・西肩口を検出した。北・西 肩口は緩やかに下がり底面に至る。底面は南北の中位で段差があり、南側が約0.2 m下がる。上段 並びに段差下には底面に密着した状態で長軸0.05~0.15 mの礫が集中する箇所がある。最下層には 灰黄褐色シルト層が堆積する。検出面での現存規模は、南北長5.3 m、東西長2.2 m、深さ0.55 m。 土師器、中世須恵器、瓦器、輸入陶磁器などW期新段階からW期古段階の遺物が出土した。

土坑33 調査区北東隅で検出した。北・東は調査区外へ広がり、南肩口は攪乱によって削平を受ける。検出面での現存規模は、南北長0.8 m、東西長0.1 m、深さ0.2 m。土師器、瓦器など中世の土器類の細片が出土した。

土坑19 南拡張区西部で検出した。北肩口上部は石畳攪乱により削平を受けるが、平面形は楕

円形を呈する。肩口から底面にかけて熱を受け赤変する。検出面での現存規模は、長軸0.42m、短軸0.4m、深さ0.08m。底面に鉄分で固化した土塊が遺存していた。土師器細片が出土した。

土坑18 南拡張区西端で検出した。西肩口は調査区外に広がるが、平面形は楕円形を呈する。肩口から底面にかけて熱を受け赤変する。検出面での現存規模は、南北径0.8 m、東西径0.3 m、深さ0.1 m。土師器、鉄滓の細片が出土した。

土坑1 調査区南西隅で検出した土取穴と考えられる遺構で、底面は地山の砂礫層上面である。 埋土は花崗岩片が詰まる。検出面での現存規模は、南北長1.1 m、東西長1.05 m、深さ0.6 m。

柱穴 柱穴は、28基検出した。土層観察などから、大半は江戸時代のものと考えられる。調査区 北部で検出した柱穴15~17を除き、平面形は円形を呈し、径0.3~0.5 mある。特徴的な柱穴について述べる。柱穴6は土坑34の上面で検出した。平面形は楕円形を呈し、底面に長辺0.25 mの根石を据え、根石周囲には0.01~0.1 cmの礫を巡らす。埋土の観察から中世のものと考えられる。柱穴2・3と柱穴7・8は南北方向に柱筋が通り、柱間は約2.5 mある。柱穴2・3は妙心寺法堂南柱筋とも東西方向に柱筋が通る。柱穴7と柱穴20間の東西柱間は2.0 m、柱穴7と柱穴21・22間の柱間は約2.7 m。また、調査区北部では柱穴11に北接して礎石状の上面が平坦な花崗岩を検出した。堀形はない。また、柱穴15内にも花崗岩が根石状に遺存するが、上面は傾斜しており、元位置ではなく、廃棄された可能性がある。柱穴11は底面に根石を据え根石周囲に小礫を巡らす。柱穴15~17は平面形が方形ないし楕円形を呈し、長軸0.6~1.0 m、深さ0.7~0.9 mある。

(4) 4区の遺構(図54、図版21)

妙心寺山門の北東に位置し、平安京跡では右京一条四坊十町の中央北西寄りに相当する。調査区の規模は、東西3.0 m、南北5.0 mある。地表面の現況は、南へ約0.2 m緩やかに下がる。調査区内東半には埋設管による攪乱が南北方向に延長する。

基本層序

現地表から0.1 mまで現代の整地・積土層、積土層下には近世の整地土層が約0.2 m堆積する。この土層は、後述する土取穴上面を覆う土層であるが、土取穴埋土が軟弱であるため、4 区中央部でたわむ。整地土層下の調査区南端には、中世と考えられる整地土層が厚さ0.03 m堆積する。中世整地土層下は、明黄褐色シルトの地山となる。地山上面の標高は、50.50 m。

遺構

土坑1 調査区の西半で検出した。東肩口は攪乱により削平を受け、北・西肩口は調査区外へ広がる。南肩口のみを検出した。底面は平坦である。土取穴と考えている。検出面での現存規模は、南北長約4.4m、東西長約0.9m、深さ約0.8mある。底面には灰黄褐色シルト層が堆積し、一定期間滞水していたことが窺われる。また、北西部には花崗岩片を多量に包含する。遺物は江戸時代の丸瓦・平瓦・塼、中世の平瓦などが出土した。

柱穴2(図版21-3) 調査区南西端で検出した。北肩口は土坑1により削平を受ける。平面形は楕円形を呈し、長径0.5 m、深さ約0.9 mある。

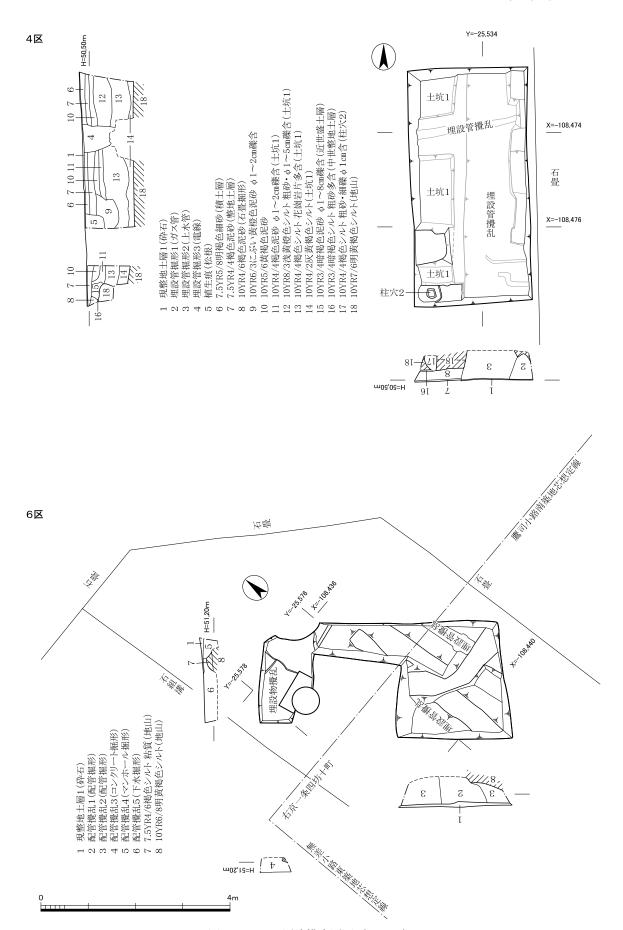


図54 4 · 6 区遺構実測図 (1:80)

(5) 6区の遺構(図54、図版22-1)

妙心寺仏殿の西側に位置し、平安京跡では右京一条四坊十町の北西隅に相当する。調査区の規模は、現存施設を避けたため、「コ」字状を呈し、長辺5m、短辺2.5mあるが、調査面積は、11.7m²となった。地表面の現況は、ほぼ平坦である。調査区内全域に埋設管による攪乱が延長する。

基本層序

現地表から0.1 m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、埋設管の攪乱土層が堆積し、攪乱土層下は、褐色シルトや明黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、51.20 m。

遺構

地山面は地表下0.2mで検出したが、ほぼ全域で埋設管による攪乱を受け、遺構は未検出である。

(6) 7区の遺構(図55、図版22-2)

妙心寺仏殿の北西に位置する。平安京跡では右京一条四坊九町の南西部、無差小路と鷹司小路の 交差点に相当する。調査区の規模は、東西2.5 m、南北6.0 mある。地表面の現況は、ほぼ平坦であ る。調査区内東半には埋設管による攪乱が南北方向に延長し、南端は攪乱により削平を受ける。

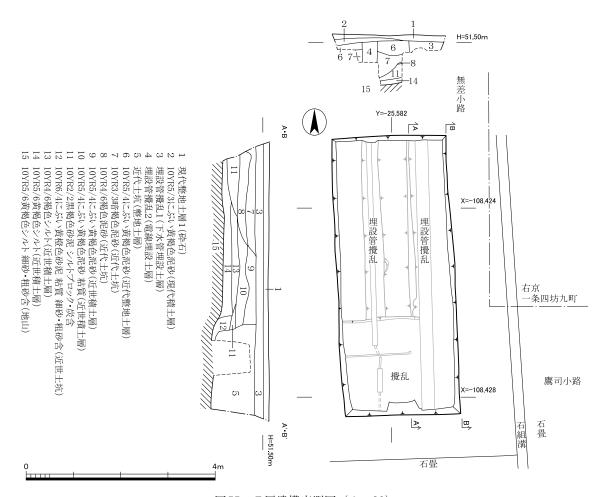


図55 7区遺構実測図(1:80)

現地表から0.3 m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、厚さ0.3 mの近世積土層が堆積する。積土層下にはさらに2層の近世積土層が堆積し、黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、50.70 m。

遺構

現地表下0.7 mで、調査区内中央部に近世の積土層があり、北端と南端で北及び南へ下がる遺構の肩口を検出した。いずれも埋土は炭を含む黒褐色シルト層で、平安時代後期や室町時代の土師器細片包含するが、肩口となる積土層には江戸時代の焼締陶器が含まれる。

この黒褐色シルト層は、その後の埋設管工事の折の断面観察で広がりを確認した。南は6区-7区間で地山を検出し、6区から南や東へは広がらないこと、7区の北側では数mにわたり広がること、西は天授院門前までほぼ水平に堆積することなどを確認した。

(7) 8区の遺構(図56、図版23-1)

妙心寺法堂の北西に位置する。平安京跡では右京一条四坊九町の西端に相当し、調査区中央部に 無差小路東築地芯想定線が南北に延長する。調査区の規模は、東西8.0 m、南北1.0 mある。地表面 の現況は、ほぼ平坦である。調査区中央以西には埋設管による攪乱が南北方向に延長する。

基本層序

現地表から0.1 m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。現代積土層下は、厚さ約0.8 m近世整地土層や積土層が堆積する。法堂西側の境内整備に伴う土層と考えられる。近世土層下は、明黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、51.65 m。

遺構

土坑1 調査区中央西部で検出した。大規模な土坑あるいは溝と考えられる遺構で、南北肩口は調査区外へ広がり、東西肩口は攪乱などにより未検出である。湧水が激しく底面は未確認であるが、ボーリング棒によって、堆積土層は検出面から深さ約1.0mあることを確認した。土師器皿、瓦器鍋、輸入青磁椀、滑石羽釜の細片のほか丸瓦・平瓦の細片が出土した。VI期新段階前後。

東部では江戸時代の整地土層及び積土層を8面検出した。地山上の16層は積土層で、上層の15層は上面が固い。その上の14層は上部に近世瓦を包含し、上面は固い。さらにその上の13層上面も固く、植生根はこの土層上面で水平に伸びる。上部は12・11層の積土層が堆積し、その上部に8層積土層、7層整地土層が一工程と考えられる。6層積土層と2層整地土層は同一工程で、現代の造作である。15層からW期古段階と考えられる土師器皿細片が出土した。

(8) 9区の遺構(図56、図版23-2)

妙心寺唐門の南東に位置し、平安京跡では右京一条四坊九町の中央西寄りに相当する。調査区の 規模は、東西2.0 m、南北3.0 mある。地表面の現況は、わずかに南東側へ下がる。調査区内北半に は埋設管による攪乱が東西方向に延長する。

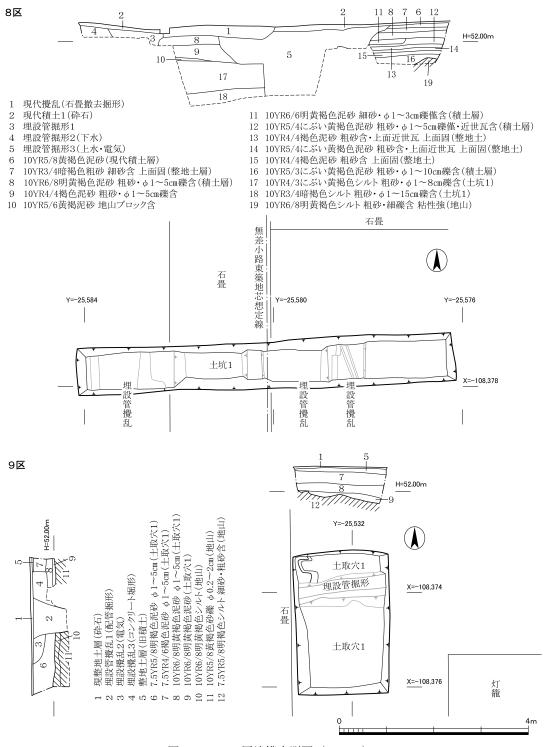


図56 8・9区遺構実測図(1:80)

現地表から0.05 m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、土取穴1の埋土が堆積 し、黄褐色砂礫層や明褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、51.90 m。

遺構

土取穴1 現地表下0.45 mで検出した。全域が土取穴の埋土である。埋土内には土層により花崗岩片や近世の瓦を包含する。

(9)10区の遺構(図57、図版24)

微妙殿と雑華院間の南北参道上に位置する。平安京跡では右京一条四坊九町の北東隅に相当し、調査区南寄りには土御門大路南築地芯想定線が東西方向に延長する。調査区の規模は、東西2.5 m、南北8.0 mある。地表面の現況は、約0.1 m南へ緩やかに下がる。調査区内東端・中央・西端には埋設管による攪乱が南北方向に延長し、北端及び南端も攪乱を受ける。

基本層序

現地表から0.4 m前後まで現代の整地や攪乱土層が堆積する。攪乱土層下は、整地土層の第1・2層が厚さ各0.1 m堆積し、黄褐色シルト層や黄褐色砂礫層の地山となる。地山上面の標高は、53.70 m。第1層からはVI期からWI期、第1・2層からはVI期古段階前後の遺物が出土した。

遺構

第2層上面で土坑 $1 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 7$ 、柱穴2、溝 $4 \cdot 6$ などの遺構を検出した。いずれの遺構も攪乱により大半が削平を受ける。

土坑1 調査区北部で検出した。北肩口の一部が遺存していた。検出面での現存規模は、東西長約0.3 m、南北長0.6 m、深さ0.55 m。土師器、焼締陶器、平瓦などの細片が出土し、中世と考えている。

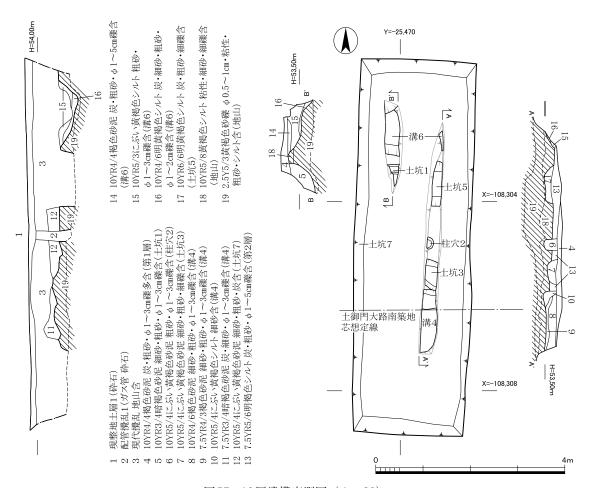


図57 10区遺構実測図(1:80)

- 土坑3 調査区南寄りで検出した。南北肩口が遺存していた。検出面での現存規模は、東西約0.3 m、南北約0.6 m、深さ0.2 m。土師器、平瓦などの細片が出土した。
- 土坑5 土坑3の北側で検出した。南北肩口が遺存していた。検出面での現存規模は、東西長約 0.2 m、南北長0.9 m、深さ0.2 m。 VI 期頃の土師器細片が出土した。
- 土坑7 西壁断面で検出した。検出面での現存規模は、南北1.5 m、深さ0.3 m。 V 期新段階から VI 期古段階の土師器・中世須恵器の細片が出土した。
- **柱穴2** 土坑3・5間で検出した平面形が円形の柱穴である。径0.25 m、深さ0.3 m。 Ⅵ期頃の 土師器細片が出土した。
- 溝4 土坑3に南接して検出した。北肩口が遺存していた。北肩口はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。検出面での現存規模は、東西長約0.3m、南北長1.3m、深さ0.3mある。北肩口の西延長の西壁で、埋土は異なるが底面の標高がほぼ同じ土層が堆積しており、同一の遺構と想定した。Ⅵ期からⅧ期頃の土師器・中世須恵器・瓦器などの細片が出土した。
- 溝6(図版24-3) 土坑1の北側で検出した。南肩口が遺存していた。検出面での現存規模は、 東西長0.3m、南北長1.0m、深さ0.4m。南肩口は土御門大路南築地芯想定線から北へ約3.1mに位置する。Ⅵ期新段階からⅧ期古段階の土師器・瓦器の細片が出土した。

(10) 11区の遺構(図58、図版25)

妙心寺山門の真西に位置する。平安京跡では右京一条四坊十町の中央西端に相当する。調査区の 規模は、東西3.7m、南北1.5mある。地表面の現況は、約0.1m緩やかに下がる。調査区内北端に は東西方向に、中央から東端には南北方向に埋設管による攪乱が延長する。

基本層序

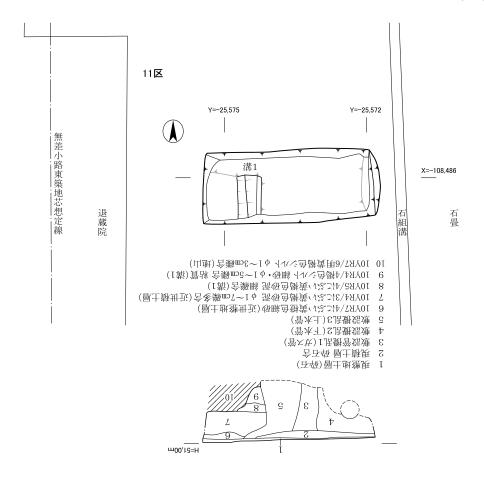
現地表から $0.1\sim0.2$ m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、西端には近世と考えられる整地土層が厚さ約0.1m、積土層が厚さ約0.5m堆積し、褐色シルト層や明黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、50.30m。

遺構

溝1(図版25-2) 調査区西側の地山上面で検出した。南北方向を示す。東肩口及び北側は攪乱により削平を受け、南は調査区外へ延長する。検出面での現存規模は、南北長0.9m、東西長0.5m、深さ0.55m。土師器の細片が出土した。時期は不明であるが、土層観察から近世以前の遺構と考えている。溝1の西肩口は、無差小路東築地芯想定線から東へ3.95mに位置する。

(11) 12区の遺構(図58、図版26-1)

ハンドホール設置に伴って実施したもので、宗務本所の北西に位置する。平安京跡では右京一条四坊十町の中央西端に相当し、調査区内西半に山小路西築地芯想定線が南北方向に延長する。調査区の規模は、東西2.6 m、南北4.2 mある。地表面の現況は、南東方向に緩やかに下がる。調査区内西端には南北方向に敷設管による攪乱が延長し、東半は攪乱により削平を受ける。



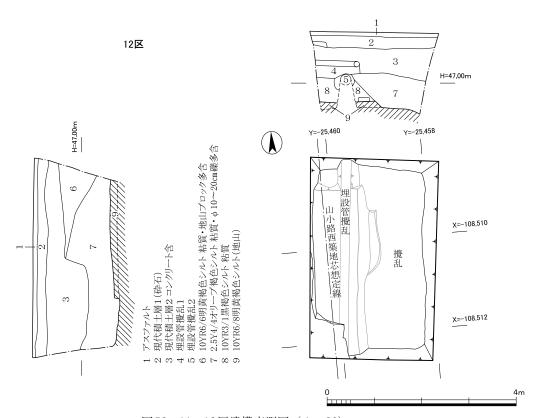


図58 11・12区遺構実測図(1:80)

現地表から0.2~0.3 mまで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、埋設管などの攪乱土層が堆積し、明黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、46.40 m。

遺構

調査区の全域が現地表下1.6 mまで地下埋設管の攪乱を受け、遺構は未検出である。

(12) 13区の遺構 (図52・53、図版26-2)

妙心寺仏殿の東側、3区の北拡張区として設定した調査区である。平安京跡では右京一条四坊九町の南端に相当する。調査区の規模は、東西1.6m、南北1.8mある。地表面の現況は、ほぼ平坦である。調査区内東半には南北方向に敷設管による攪乱が延長する。

基本層序

現地表下0.1 m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、近世の積土層が厚さ約0.2 m堆積し、明黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、51.85 m。

遺構

地山上面で土坑1・2を検出した。いずれも遺物は出土していない。

土坑1 東肩口は攪乱により削平を受け、北は調査区外へ広がる。検出面での現存規模は、南北長1.3m、東西長0.3m、深さ0.2m。

土坑2 底面に凹凸があり、木の根痕の可能性がある。

(13) 14区の遺構 (図59、図版27)

妙心寺仏殿の東側、3区の南拡張区として設定した調査区である。平安京跡では右京一条四坊十町の北端に相当する。調査区の規模は、東西1.6m、南北20.6mある。地表面の現況は、約0.5m南へ緩やかに下がる。調査区内東半には南北方向に、北部及び南部には東西方向に敷設管による攪乱が延長する。

基本層序

現地表下0.1 m前後まで現代の整地・積土層が堆積する。積土層下は、調査区南端では中世と考えられる包含層が厚さ0.03 cm堆積し、明黄褐色シルト層の地山となる。地山上面の標高は、調査区北端で51.45 m、南端で50.85 m。

遺構

調査区全域で平安時代の土坑、中世の柱穴・土坑、近世の柱穴・土取穴・溝などを検出した。

土坑18 調査区南部で検出した。東肩口は攪乱により削平を受け、南は調査区外へ延長し、北肩口及び西肩口を検出した。西肩口は南北に長く溝状を呈する。検出面での現存規模は、南北長5.5 m、東西長0.5 m、深さ0.25 m。土師器・灰釉陶器・輸入陶磁器などが出土した。V期中段階からVI期古段階。

土坑17 調査区北隅で検出した。東肩口は攪乱により削平を受ける。西肩口は屈曲する。北は

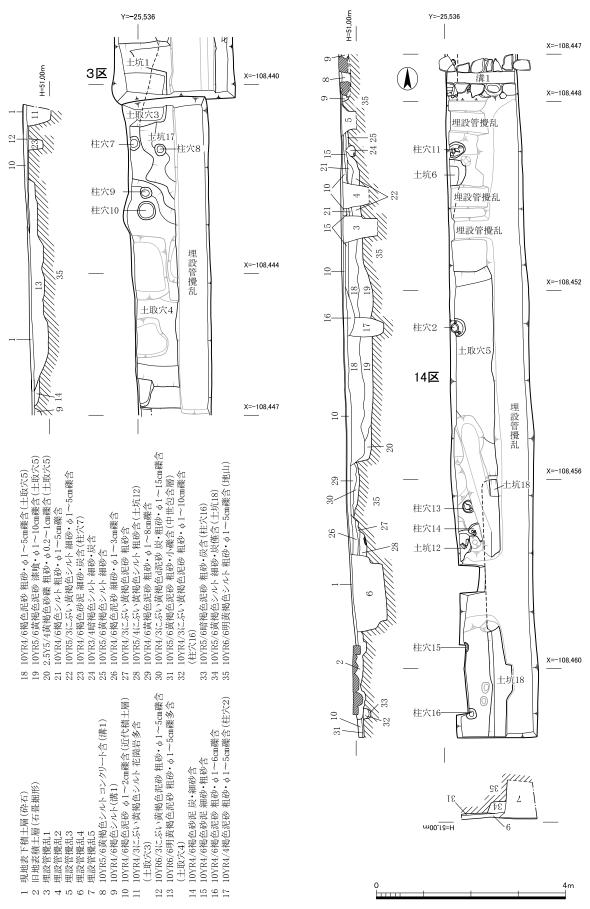


図59 14区遺構実測図(1:80)

3 区土坑34に連続する。検出面での現存規模は、南北長2.0 m、東西長0.7 m、深さ0.3 mあり、土坑34 と合わせた南北長は7.4 mに達する。土師器・須恵器の細片が出土した。Ⅷ期新段階からⅧ期古段階。

土坑12 調査区南部で検出した。西肩口は調査区外へ広がり、北・東肩口の一部を検出した。底面は平坦で、長径0.15cm前後の礫を複数据える。検出面での現存規模は、長径0.6 m、短径0.5 m、深さ0.15 mある。

土坑6 調査区中央北側で検出した。西は調査区外へ広がり、南は攪乱により削平を受ける。検 出面での現存規模は、南北長0.55 m、東西長0.35 m、深さ0.3 mあるが、断面の土層は南に連続しており、長さは1.25 m確認した。

土取穴3 調査区北端で検出した。3区土坑1の南半部である。底面は地山の砂礫層上面で、ほぼ平坦である。埋土の大半は花崗岩片である。現存規模は、南北長0.4m、東西0.75m、深さ0.5mあり、3区土坑1と合わせた南北長は1.8mある。

土取穴4 調査区北部で検出した。東肩口は攪乱を受け、西は調査区外へ広がり、南・北肩口を 検出した。底面は砂礫層に達していない。埋土には礫を多く包含し、上部には花崗岩片が多量に集 中する箇所がある。現存規模は、南北長4.5 m、東西長0.9 m、深さ0.4 m。

土取穴5 調査区中央南半で検出した。北肩口は攪乱を受け、西は調査区外へ広がり、南肩口の一部を検出したに過ぎない。底面は地山の砂礫層上で、ほぼ平坦である。埋土には多量の礫のほか瓦類、漆喰などを包含し、上部には花崗岩片が多量に集中する箇所がある。現存規模は、南北長4.9 m、東西長0.9 m、深さ0.5 m。

柱穴 12基検出した。平面形は、いずれも円形を呈し、径 $0.2 \sim 0.4$ mある。柱列としてはまとまらない。柱穴11 は、長径0.1 mの礫を敷き、根石とする。柱穴13 は、長軸0.15 mの角礫を根石とする。柱穴 $15 \cdot 16$ は、埋土が暗褐色系の同一の土層で、柱穴間の距離は約1.2 mある。柱穴15 からは土師器の細片が出土した。これらは中世に属すると考えられる。

なお、調査区の南北中央やや北寄りの溝1は、西側は砕石で覆われているが、東は延長部が現存している。当初、近世の溝である可能性が高いと想定し調査対象としたが、断割の結果、掘形からコンクリート片が複数出土し、近代以降のものであることが判明した。

3. 遺物

出土した遺物は整理箱6箱で、平安時代から江戸時代まである。出土遺物量の大半は、土器類が 占める。土器類には土師器、須恵器、瓦器、須恵器系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器など がある。瓦類には軒丸瓦、丸瓦、平瓦、塼がある。石製品には滑石製羽釜がある。金属製品には銭 貨、鉄釘、剣形鉄製品などがある。次に時期別に出土遺物について述べる。

なお、輸入陶磁器をのぞけば、土器類は焼成が甘く、遺存状態は不良のものが大半である。

(1) 土器類(図60、図版28)

7区積土層(1・2) 江戸時代の積土層から中世以前の遺物が出土している。大半は小破片である。ここでは平安時代の土器について示す。1は土師器皿Aである。口縁部は屈曲し、端部は立ち上がり丸くおさめる。口径11.1cm、残存高1.0cm。2は土師器皿Nの小片である。口縁部は2段ナデを行い、端部は外上方に丸くおさめる。残存高3.0cm。いずれもV期古段階に属する。

14区土坑18(3~11) 8は土師器皿Aの小片である。口縁部は屈曲し、端部は立ち上がり丸くおさめる。残存高1.1cm。3~7・9・10は土師器皿Nで、口径により大小がある。3~7は口縁部が立ち上がり、端部は丸くおさめる。3・4は小型品で、3は口径8.4cm、残存高1.4cm、4は口径8.8cm、器高1.9cm。5~7は大型品で、5は口径15.0cm、器高2.8cm、6は口径15.6cm、残存高2.6cm、7は残存高2.2cm。9・10は、口縁部外面は2段ナデを行い、端部は外上方に開く。9は残存高1.4cm、10は残存高2.6cm。11は山茶椀である。体部は外傾し、口縁部は丸くおさめる。底部外面は糸切り未調整で、断面三角形の貼付高台が付く。口径10.8cm、器高3.1cm。遺物の時期はV期中段階からVI期古段階に属する。

10区西壁(12~18) 12・13は1・2層から出土した土師器皿Nである。底部から口縁部が外上方に開き、端部は上方に立ち上がり丸くおさめる。体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。12は口径15.0cm、残存高2.3cm、13は口径14.7cm、残存高2.4cm。いずれもVI期古段階前後に属する。

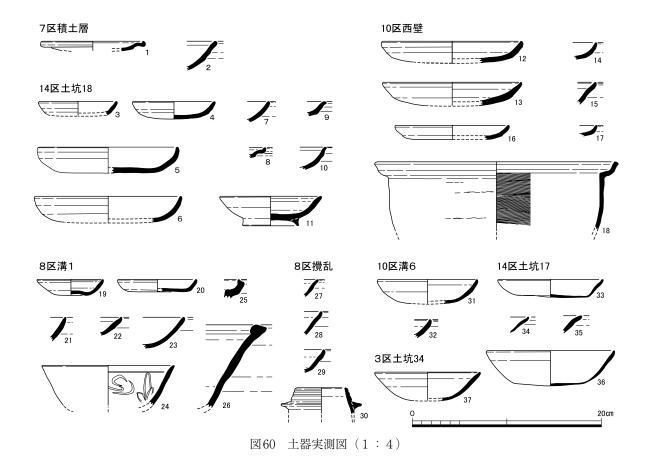
 $14\sim18$ は西壁土坑7から出土した。 $14\sim17$ は土師器皿Nである。14は口縁部が外上方に立ち上がり、15はわずかに外反しつつ上方に立ち上がり丸くおさめる。 $16\cdot17$ は口縁部が短く開き、端部は丸くおさめる。口縁部はナデを行う。14は残存高1.5cm、15は残存高2.3cm、16は口径12.1cm、残存高1.5cm、17は残存高1.0cm。17以明新段階から10以期

18は瓦器鍋である。体部は立ち上がる。口縁部は屈曲し受け部は平坦で、端部は面を持つ。口縁部はナデ、体部外面はヨコ方向に連続してオサエを行い、内面はヨコ方向のハケメを行う。口径25.8cm、残存高7.3cm。 W期古段階前後に属する。

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク 未掲載 箱数	B・C ランク 箱数
平安時代	土師器、須恵器、瓦器、 瓦	1箱	土師器10点、山茶椀1点	1箱	0 箱
鎌倉時代 ~室町時代	土師器、瓦器、白色土器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦、石製品	1箱	土師器21点、瓦器4点、輸入陶 磁器1点、瓦1点	1箱	0箱
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶 器、瓦、金属製品	4箱	金属製品 2 点	4箱	0箱
合 計		7箱	40点(1箱)	6箱	0箱

表6 調査その2 遺物概要表

[※] コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。



8区土坑1 (19~26) 19は土師器皿Shの完形である。底部中央はわずかに窪み、口縁部は内湾しつつ外傾し、端部は丸くおさめる。内面・口縁部内外面はナデ、底部外面はオサエを行う。口径6.8cm、器高1.7cm。20~22は土師器皿Nである。20は口縁部は外上方に開き、端部は立ち上がり丸くおさめる。口縁部内外面はナデを行う。口径8.4cm、器高1.3cm。21は小片で、口縁端部は先端がやや尖る。内外面はナデを行う。残存高2.3cm。22は口縁部をやや外反気味におさめる。外面は横ナデするが、下端に段が付く。残存高1.8cm。23は土師器皿Sの破片である。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。口縁部内外面はナデを行う。残存高3.2cm。24は輸入青磁椀である。口径14.0cm、残存高4.2cm。25は瓦器鍋の口縁部の細片である。口縁部は内湾して立ち上がり、受け部は丸みを持つ。内外面ともナデを行う。残存高2.0cm。26は瓦器火鉢の小片である。体部は外反しつつ立ち上がり、口縁部は内側に肥厚する。内外面ともナデを行う。残存高8.8cm。遺物の時期はⅥ期中段階からⅧ期中段階に属する。

8区攪乱 (27~30) 27は土師器皿Nの細片である。口縁部はわずかに屈曲し、端部は丸くおさめる。残存高1.8cm。28・29は土師器皿Sである。口縁部はわずかに屈曲し、端部は上方に丸くおさめる。口縁部内外面はナデを行う。28は残存高2.4cm、29は残存高1.8cm。30は小型三足羽釜である。体部は内側にわずかに屈曲して立ち上がり、中位外面に断面三角形の鍔を貼り付ける。内外面はナデを行う。口径5.0cm、残存高4.2cm。遺物の時期はⅧ財古段階から新段階に属する。

10区溝6(31・32) 31・32は土師器皿である。31は皿Sである。体部は内湾気味に開き、口縁端部は丸くおさめる。体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。口径10.6cm、残存高2.6cm。32は

■Nの破片である。□縁部は外上方に開き、端部は短 く立ち上がり丸くおさめる。口縁部はナデを行う。残 存高1.8cm。遺物の時期はⅥ期新段階からⅧ期古段階に 属する。

14区土坑17(33~36) 33~36は土師器皿である。 33~35は皿Nである。33は平たい底部から口縁部はや や屈曲し開く。口縁端部は上方に丸くおさめる。体部 下半外面はオサエ、他はナデを行う。33は口径11.2cm、 器高1.9cm、34は残存高1.6cm、35は残存高1.8cm。36は ■Sである。平坦な底部から体部は内湾しつつ外傾す る。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げ丸くおさめ る。口径13.6cm、器高3.8cm。遺物の時期はⅧ期新段階 から垭期古段階に属する。

3区土坑34(37) 37は土師器皿Sである。口縁部は わずかに屈曲して外傾し、端部は上方に丸くおさめる。 外面下半はオサエ、他はナデを行う。口径11.2cm、器 高3.0cm。VII期新段階からVII期古段階に属する。

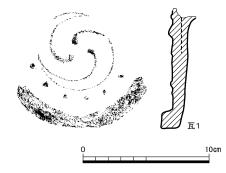
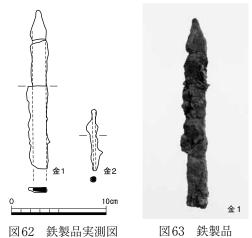


図61 軒丸瓦拓影及び実測図(1:3)



(1:4)

(2) 瓦類(図61、図版28)

瓦1は3区土坑1から出土した巴文軒丸瓦である。巴文は左巻き込みで、尾部はつながり、外区 には珠文が巡る。瓦当周縁と裏面下半はナデを行う。焼成は良好。

(3) 金属製品(図62・63)

金1・2は3区柱穴20から出土した鉄製品である。鉄錆が厚く覆う。金1は先端は尖り、身下部 は欠損する。残存長16.7cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。金2は鉄釘で、頭は両端が広がり、断面形は方 形。先端は欠損する。残存長6.5cm、一辺0.5cm。

4. /\ 結

今回の調査では、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺構を検出した。各調査区の大半 は、埋設管などの大規模な攪乱や狭い調査区幅などの制約を受けたが、下記のような成果を挙げる ことができた。

平安京の条坊路や町内区画施設などと考えられる遺構は、8・10・11・14区で検出した。

8区の土坑1は、無差小路東側溝の相当位置にある。当該地域の地山検出面の高低差を比較する と、8・7区間は50m離れた位置で北の8区が約1m高く、8・9区間は45m離れた位置で東の 9区が0.4m高い。土坑1は幅・深さとも規模が大きく、この土坑が南北に延長する形状を想定す ると、雨水排出を目的として無差小路東側溝が大規模化した遺構の可能性がある。しかし、南延長に位置する7区では未検出である。10区の溝6は、南肩口の形状や堆積土層から、東西方向で溝状を呈する。南肩口の検出位置は、土御門大路南築地芯想定線より北へ4.1 mにあり、やや路面中心寄りに位置するといえる。11区の溝1は、西肩口が無差小路東築地芯想定線から東へ約3.2 mに位置するため、十町側の築地内溝の可能性がある。14区の土坑18は、十町内東三行の東西中心に位置しており、区画に関連する可能性がある。妙心寺主要伽藍のあるこの地区は、尾根状の高まりとなっており、その部分に条坊関連の遺構が残存していた。

その他、3・6・7区は、条坊路の想定位置に設定された調査区であるが、関連する遺構は検出できなかった。3・6区の地山検出面は浅く、遺構検出面が削平された可能性も窺える。

平安時代後期、鎌倉・室町時代と考えられる遺構は、2・3・10・14区で検出した。3区では土坑34・33がある。土坑33は、鷹司小路北築地芯想定線上で検出した土坑で、中世の土器類が出土した。土坑34は、鷹司小路南築地想定箇所上で検出し、同小路から十町内に至る大規模な土坑である。形態や土層堆積状況から池状を呈する遺構が想定できる。西肩口以西は地山となり、検出深は現地表から比較的浅いが、築地痕跡や溝などを示す遺構は未検出である。10区では鷹司小路路面相当位置に土坑1・3・5・7、柱穴2が、鷹司小路南築地芯想定線上に溝4を検出した。鎌倉時代から室町時代前半の遺物が出土している。14区では土坑6・12・17と柱穴を検出した。土坑17は北接する3区の土坑34に連続し、土坑34と合わせた南北長は7.4mに達する。柱穴は12基検出した。中世に属すると考えられるが、建物ないし柱列としてはまとまらない。

一方、現存する妙心寺中心建物の大半は、桃山時代から江戸時代前期にかけて整えられていったが、仏殿は、江戸時代後期の文政10年(1827)に建立されている。この仏殿に東接する3・14区では、土取穴と考えられる土坑を検出している。検出箇所の地山は、概して明褐色シルトや明黄褐色シルトなどの土層が堆積しており、この土層を採掘したと考えられる土坑である。また、これらの土取穴の埋土には、多量の花崗岩細片が包含されている。このことから、仏殿造営時に当該土層を採掘し、その後、基壇敷設などに用いた花崗岩を現地で微成形し、その破片をまとめて土取穴に投棄したことが想定できる。ただし、このような状況を示す土坑は、北側の9区や南側の4区でも検出しており、近接する他の建造物の補修などに際し、同様の施工を行った可能性を示している。さらに、3区では、壁面が熱を受けて赤変した土坑を検出した。土坑内から鉄滓片が出土しており、当該地で簡素な鍛冶工が行われたことが想定できた。

また、同3区では、柱穴を多数検出しているが、なかには仏殿基壇上の柱位置の東延長に位置するものがある。この柱が仏殿に付属する施設に属する柱か、あるいは仏殿造作に際し建てた工房などの雑舎であるか詳細はわからないが、いずれにせよ仏殿に係る施設を検出できたことも今回の調査成果の一つである。

第4章 調査その3 (平成26年度)

1. 経 過

調査その3は、妙心寺境内における配管路工事に伴い実施した。調査対象地は、史跡妙心寺境内 及び平安京右京北辺四坊三町から七町、右京一条四坊八町から九町及び条坊路である正親小路・ 土御門大路・山小路・無差小路に相当する。

発掘調査は、府・市文化財保護課によって配管路上に調整・設定された発掘調査区に従って調査区を設定し、2014年8月1日から実施した。発掘調査区は、妙心寺中心伽藍周辺から北側にかけて、 $1\sim9$ 区まで9箇所の調査区が設定されていたが、当初養源院西側に設定された4区の調査については中止となったため、8箇所の調査となった。また、雑華院北西に設定された7区は立会調査となった。

発掘調査は、まず大心院北側に設定された5区から開始、次いで微妙殿北東に6区、蟠桃院南側に8区を設定して進めた。

9月には金牛院南側に2区、次いで聖沢院東側に1区、10月には桂春院西側に9区を設定して調査を進めた。

2015年1月には金牛院東側に3区を設定し、調査を行った。1月16日には、現場での作業を終了した。1月21日には、現地仮設事務所などを撤去し、全調査を終了した。

2. 遺 構

各調査区は、経過で示したように主に妙心寺中心伽藍周と北側に設定されている。2・3・8・9区は、北側に位置する。

各調査区とも層位・検出遺構がそれぞれ異なるため、各調査区ごとに述べる。従って、基本層序は、各調査区の記述ならびに実測図を参照されたい。各調査区の断面から地山の検出高を比較すると、現代攪乱や後世の遺構などで本来の地山が削られている可能性もあるが、北の3区と南の1区の間の距離約230mで6.7mの高低差があった。



図64 9区調査前全景(南西から)



図65 2区調査風景(西から)

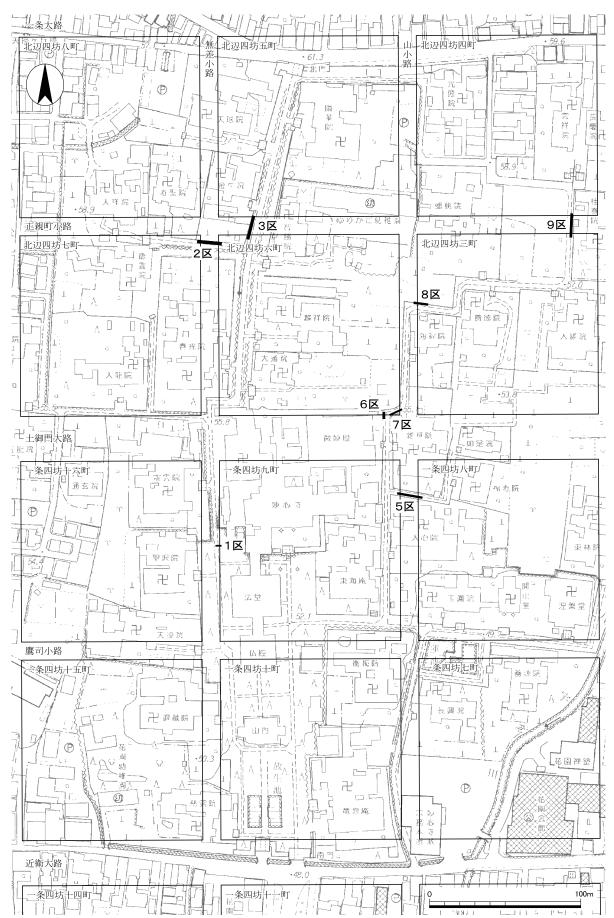


図66 調査その3 調査位置図(1:2,500)

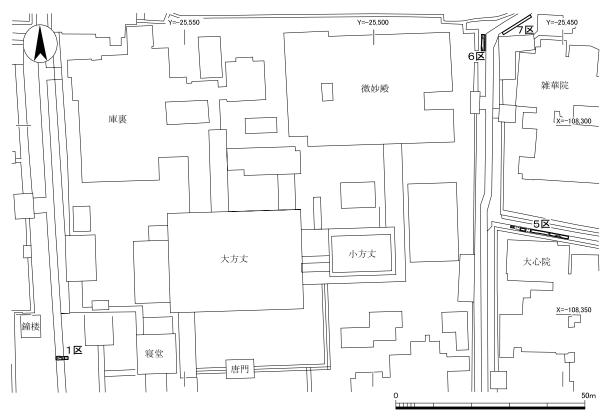


図67 調査その3 調査区配置図1 (1:1,000)

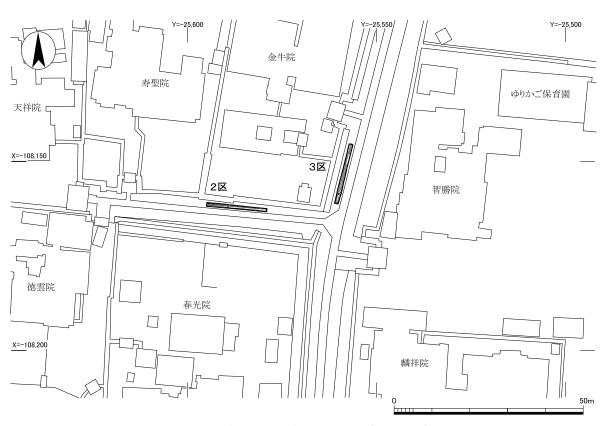


図68 調査その3 調査区配置図2 (1:1,000)

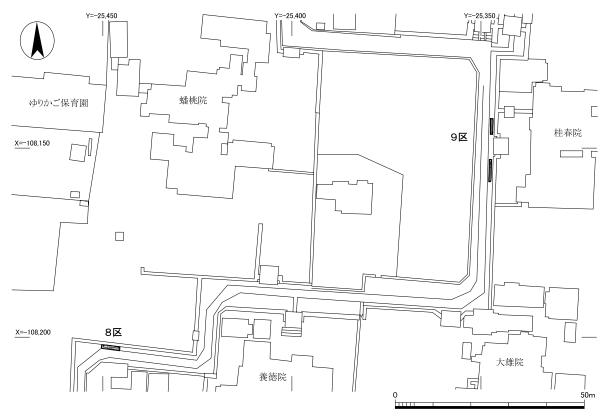


図69 調査その3 調査区配置図3 (1:1,000)

各調査区内には、地中埋設管などの現代の攪乱が多数分布し、遺構の遺存する箇所は多くはなかった。遺構は地山上面で検出した。検出した遺構には平安時代・鎌倉時代から室町時代・江戸時代のものがある。以下に主要な遺構について述べる。

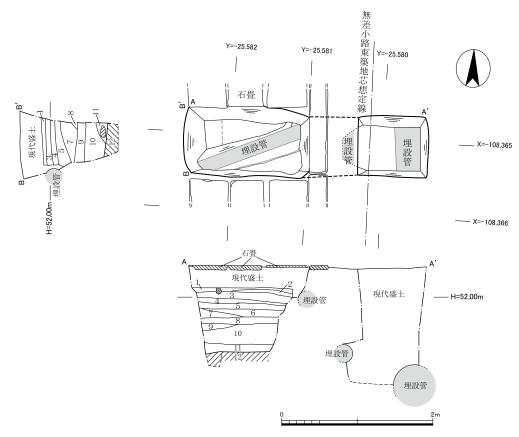
(1) 1区の遺構(図70、図版29-1・2)

聖沢院の真西、南北方向の参道上に位置する(図67)。平安京跡では無差小路の東築地・東側溝に相当する。南北1.0 m、東西3.3 mの規模で調査区を設定した。地表面の現況は、南へ緩やかに下がる。埋設管による攪乱が調査区内東部には南北方向に、中央部には北東から南西方向に延長する。調査区内のほとんどが攪乱を受けていたが、西半部で整地層、遺物包含層を検出した。

基本層序

現地表下 0.28 m まで現代参道積土層、0.8 m まで旧参道整地層、1.1 m まで褐色系シルトの遺物包表7 調査その3 遺構概要表

時 代	遺構	備考
平安時代	2区:溝1、3区:土坑1	
鎌倉時代 ~室町時代	1区:遺物包含層、8区:柱穴1	
江戸時代	1区・3区・5区・8区・9区:整地層	



- 10YR5/6黄褐色砂泥 φ3~5cmの礫多量に混じる 固く締まる(旧参道の基礎)
- 10YR6/8明黄褐色細砂 φ3~4cmの礫多量に混じる 固く締まる(旧参道の基礎) 10YR4/2灰黄褐色砂泥 やや粘質 φ5cmの礫少量混じる 2
- 3
- 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 土器小片、炭、焼土混じる
- 10YR4/6褐色砂泥 腐食した木片混じる

- 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1~2cmの小礫が少量混じる
- 7.5YR4/4褐色砂泥 粘質(遺物包含層) 10 7.5YR4/3褐色シルト(遺物包含層)
- 11 10YR3/4暗褐色シルト φ3~5cmの2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土ブロックが混じる(遺物包含層)
- 12 7.5YR4/4褐色砂礫 φ2~5cmの礫(地山)

図70 1区遺構実測図(1:50)

(整地層)

含層がある。以下は、褐色砂礫の地山となる。地山上面の標高は51.3 m。

遺構

旧参道整地層は、8層を確認した。そのうちの1・2・6層は礫を多く含み、固く路面状を呈す る。この下層で遺物包含層(9~11層)を検出した。この層からは土師器が出土したが、小片のた め時期の判定はし難い。この調査区から南に約13mの地点で、調査その2の8区の調査が行われ ており、大規模な土坑あるいは溝と考えられる遺構(土坑1)を検出している。遺構の検出状況か らそれに連続すると考えられる。

(2) 2区の遺構(図71、図版29-3)

金牛院の南側通路に位置する(図68)。平安京跡では調査区ほぼ全体が無差小路に相当する。現 行の石畳と築地塀の間に南北1.0m、東西16.0mの規模で調査区を設定した。地表面の現況は、ほ ば平坦である。調査区内中央部には埋設管による攪乱が東西に延長する。

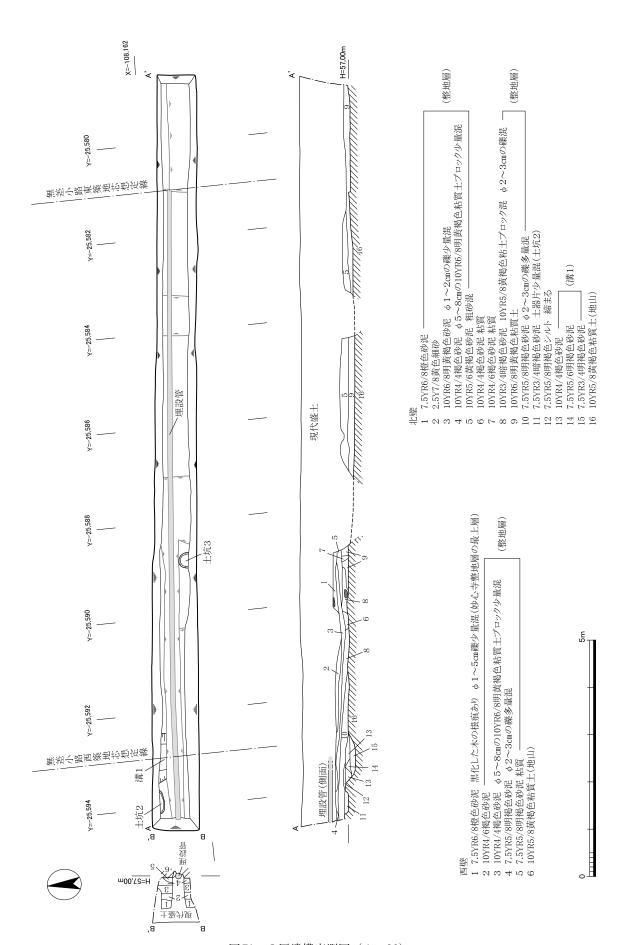


図71 2区遺構実測図(1:80)

現地表から0.7~0.9 mまで現代の整地・埋設管の攪乱土層が堆積する。以下は時期不明の積土層が厚さ0.3~0.4 m堆積し、黄褐色粘質土の地山となる。地山上面の標高は57.0 m。

遺構

部分的に検出した地山上面で、溝1、土坑2・3を検出した。

- 溝1 調査区西部で検出した。東西の肩口を検出、南は攪乱により削平を受け、北は調査区外へ延長する。検出面での現存規模は東西長1.1 m、深さ0.2 m、底部の標高は56.84 m。 V 期古段階の土師器皿小片が出土した。
- 土坑2 調査区北西隅部で検出した。北は調査区外へ延長し、南肩口を検出した。検出面での規模は、東西長0.5 m、深さ0.1 m。土師器が出土したが、小片のため時期は不明である。
- 土坑3 調査区中央部で検出した。東西の肩口を検出、南は調査区外へ延長し、北肩口を検出した。検出面での規模は、東西長0.3 m、深さ0.05 m。出土遺物はなかったため、時期は不明である。

(3) 3区の遺構(図72、図版29-4)

金牛院の西側通路に位置する(図68)。平安京跡では調査区ほぼ全体が正親小路に相当する。石畳と生垣の間に東西1.0 m、南北16.2 mの規模で調査区を設定した。地表面の現況は、南へ約0.3 m下がる。調査区内中央部には埋設管による攪乱が南北に延長する。

基本層序

現地表から約0.3 mまで現代の整地・埋設管の攪乱土層が堆積する。以下は江戸時代の整地層が厚さ約0.4 m堆積し、明黄褐色砂泥の地山となる。地山上面の標高は57.6~58.0 m

遺構

調査区西壁断面で整地層、部分的に検出した地山上面で土坑1を検出した。

整地層 概ね3層に分けることができる江戸時代前期の整地層を検出した。厚さは0.5 m、上面の標高は58.1~58.3 mである。第1層は明黄褐色を呈し、固く締まる。第3層から伊万里小片、10枚重なった輸入銭貨などが出土した。

土坑1 調査区南部で検出した。東西は攪乱によって削平を受ける。検出面での現存規模は、南北長0.4m、東西長0.4m、底部の標高は57.58mである。遺物の出土はなかった。

(4) 5区の遺構(図73、図版30-1~3)

大心院の北側通路に位置する(図67)。平安京跡では調査区ほぼ全体が山小路に相当する。石畳と築地塀の間に南北0.7 m、東西約16 mの規模で調査区を設定した。この調査区では、植栽の松を残すために調査区を3分した。地表面の現況は東へ0.6 m下がる。

基本層序

現地表から0.2~0.3 mまで現代の整地・盛土層が堆積する以下は江戸時代の整地層が厚さ約0.2 m堆積し、明褐色砂泥の地山となる。地山上面の標高は52.6 m。

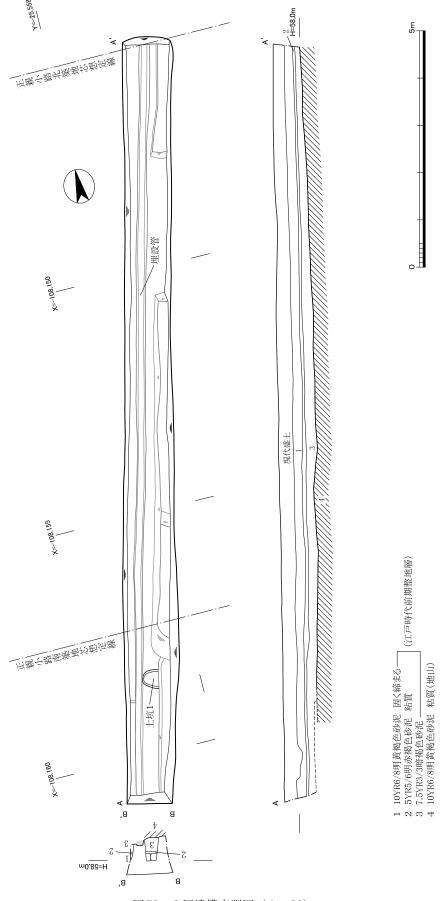


図72 3区遺構実測図(1:80)

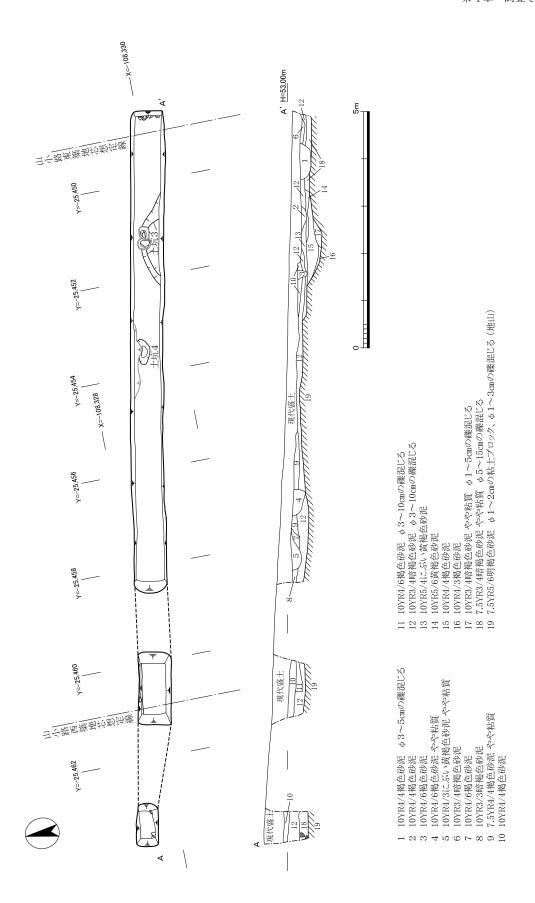


図73 5区遺構実測図(1:80)

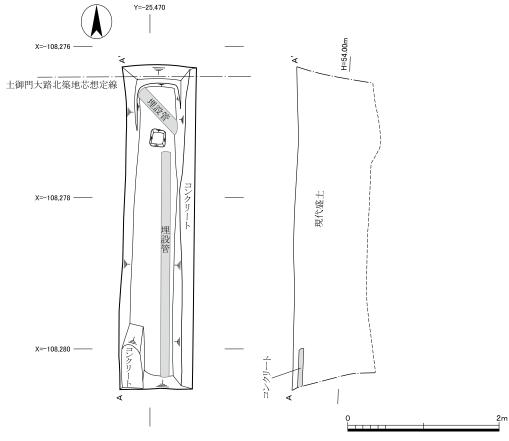


図74 6区遺構実測図(1:50)

遺構

調査区南壁断面で整地層、部分的に検出した地山上面で土坑3・4を検出した。

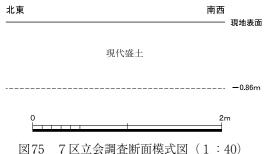
整地層 南壁断面で3層に分けることができる整地層を検出した。上面の標高は52.8mである。 土坑3・4 ほぼ円形で擂鉢状に落ち込むことから、木の根抜痕とみられる。

(5) 6区の遺構(図74、図版30-4)

微妙殿北東部通路に位置する(図67)。平安京跡では土御門大路の北側溝・北築地芯に相当する。 石畳と生垣の間に東西1.0m、南北4.4mの規模で調査区を設定した。地表面の現況は南へ緩やかに 約0.1 m下がる。全域で地下埋設管の攪乱を受け、遺構は検出できなかった。一部を掘り下げ、地 山面を検出、上面の標高は53.3 mであった。

(6) 7区の遺構(図75、図版31-1)

雑華院北西部通路に位置する(図67)。平安京跡 では土御門大路と山小路の交差点北西部に相当す る。石畳南側での配管工事時に立会調査を行った。 配管工事は深さ0.9mまでの掘削で、全域が地下埋 設管の攪乱を受け、遺構は検出できなかった。



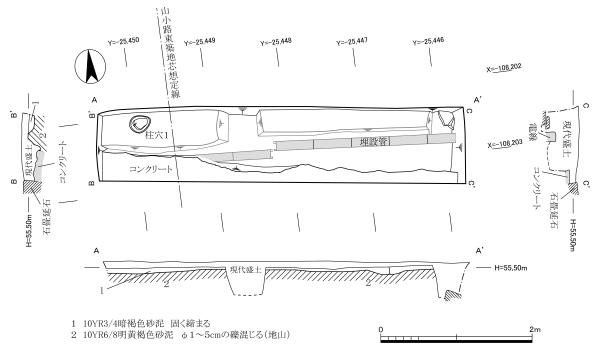


図76 8区遺構実測図(1:50)

(7) 8区の遺構(図76、図版31-2)

蟠桃院南側通路に位置する(図69)。平安京跡では山小路東側溝・東築地芯に相当する。石畳と 築地塀との間に東西5.0 m、南北1.0 mの規模で調査区を設定した。地表面での現況は平坦である。 調査区内中央部には埋設管による攪乱が東西方向と南北方向に延長し、東端も攪乱を受ける。

基本層序

現地表から0.1~0.15 mまで現代の整地・盛土層が堆積する。盛土層下は江戸時代の整地層が厚さ約0.08 m堆積し、明黄褐色砂泥の地山となる。地山上面の標高は55.4 m。

遺構

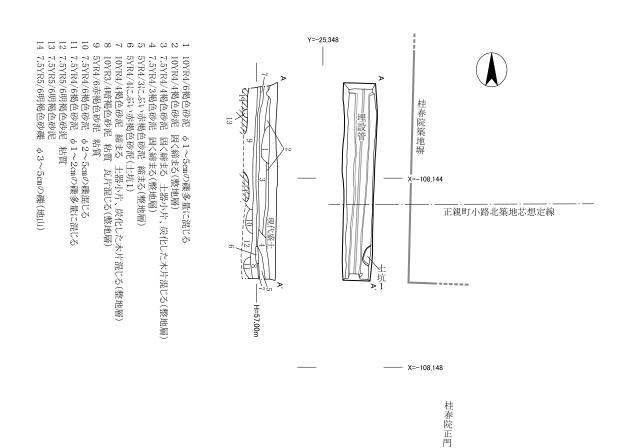
調査区北壁断面で整地層、部分的に検出した地山上面で柱穴1を検出した。

整地層 南壁断面で暗褐色砂泥の整地層を1層検出した。非常に固く締まる。上面の標高は55.5 mである。

柱穴1 調査区西部で検出した。径0.25 m、深さ0.05 m、根石を据える。土層観察から中世と考える。

(8) 9区の遺構(図77、図版31-3・4)

桂春院西側通路に位置する(図69)。平安京跡では調査区ほぼ全体が正親小路に相当する。石畳と生垣の間に東西0.7 m、南北16.2 mの規模で調査区を設定したが、桂春院門前にあたる約6 mは調査をしなかった。地表面の現況は南へ0.26 m下がる。調査区内中央部には埋設管による攪乱が南北方向に延長し、南部では埋設管が東西方向に延長する。



5YR5/6明赤褐色砂泥 粘質 7.5YR4/4褐色砂泥 土器小片混じる(土坑2) 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 土器小片、炭混じる(土坑3) 10YR4/6褐色砂泥 固<締まる 土器小片混じる(整地層) 10YR3/4暗褐色砂泥 φ2~4cmの10YR6/8明黄褐色粘土プロック混じる

5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 粘質 10YR4/6褐色砂礫(粘質)(地山) 10YR4/4褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量混じる 固く締まる(整地層)
10YR5/6黄褐色砂泥 φ1~2cmの10YR6/8明黄褐色粘土ブロック混じる 固く締まる(整地層)
10YR4/4褐色砂泥 φ1~2cmの10YR6/6明黄褐色粘土ブロック混じる 固く締まる(整地層)
10YR6/8明黄褐色砂泥 φ1~2cmの0軽および10YR7/8黄橙色粘土部多量に混じる 固く締まる(整地層)
15YR4/6褐色砂泥 固く締まる(整地層)

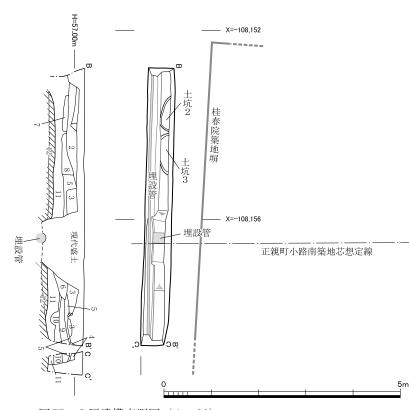


図77 9区遺構実測図(1:80)

現地表から約0.2 mまで現代の整地・埋設管の攪乱土層が堆積する。攪乱土層下は江戸時代の整地層が厚さ約0.6 m堆積し、明褐色から褐色砂礫の地山となる。地山上面の標高は56.9 m。

遺構

調査区東壁断面で整地層、整地層を切って土坑1、整地層中に土坑2・3を検出した。ほとんど 全面を南北に通る旧電気線の埋設溝により攪乱を受けるが、部分的に地山を検出した。地山上面の 標高は56.9 mである。

土坑1 北側調査区で検出した。東は調査区外へ延長する。検出面での現存規模は、南北長0.4 m、深さ0.05 m、底部の標高は56.95 mである。遺物の出土はなかった。

土坑2 南側調査区で検出した。東は調査区外へ延長する。検出面での現存規模は、南北長0.7 m、深さ0.1 m、底部の標高は57.75 mである。遺物の出土はなかった。

土坑3 南側調査区で検出した。東は調査区外へ延長する。検出面での現存規模は、南北長0.9 m、深さ0.2 m、底部の標高は56.69 mである。遺物の出土はなかった。

整地層 概ね4層に分けることができる江戸時代前期の整地層を検出した。厚さは0.5 m、上面の標高は57.2 mであった。最上層は褐色を呈し、固く締まる。

3. 遺物

整理箱 3 箱の遺物が出土した。鎌倉時代から江戸時代まである。内容は土器類、瓦類、銭貨などである。出土遺物量の大半は土器類が占める。以下に解説する。

(1) 十器類

土器類には土師器、須恵器、白色土器、灰釉陶器、輸入白磁、焼締陶器、染付、施釉陶器などがある。いずれも小片で図示できるものはない。

土師器は各調査区から出土した。2区溝1からは皿Nが出土、口縁部は2段ナデを行い、端部は

時代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク 未掲載 遺物箱数	B・C ランク 箱数
平安時代	土師器、須恵器	1箱		1箱	0 箱
鎌倉時代 ~室町時代	土師器、白色土器、灰釉陶器、輸入白磁、焼締陶器、 瓦、銭貨	2箱	銭貨10点	1箱	0箱
江戸時代	土師器、染付、施釉陶器、 焼締陶器、瓦	1箱		1 箱	0 箱
合 計		4箱	10点(1箱)	3箱	0箱

表8 調査その3 遺物概要表

[※] コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

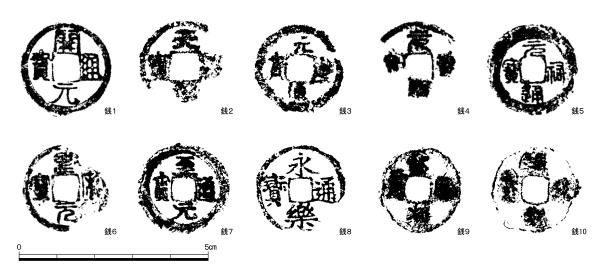


図78 銭貨拓影(1:1)

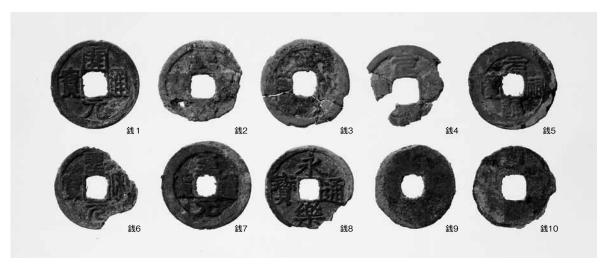


図79 出土銭貨

表 9 銭貨一覧表

番号	種類	外径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	初鋳年	癒着のうち	備考
銭1	開元通寳	2. 245	0. 500	2. 731	唐(621)	3番目	錆なし
銭2	天聖元寳 (篆書)	2. 035	0.500	2. 247	北宋(1023)	1番上	錆激しい
銭3	元豊通寳(真書)	2. 250	0. 440	1.835	北宋(1078)	8番目	錆激しい
銭4	元豊通寳(篆書)	1. 905	0. 440	1. 320	北宋(1078)	10番目	半分は崩壊
銭5	元祐通寳(篆書)	2. 225	0. 415	2. 948	北宋(1086)	5番目	錆激しい
銭6	聖宋元寳(篆書)	2. 100	0. 430	1. 438	北宋(1101)	7番目	欠損あり
銭7	至元通寳	2. 225	0. 385	2. 493	元(1285)	6番目	錆あり
銭8	永楽通寳	2. 255	0. 375	2. 307	明(1408)	4番目	錆少ない
銭9	不明	2. 080	0. 440	2. 377	不明	9番目	錆激しい
銭10	不明	2. 055	0. 505	1. 594	不明	2番目	錆激しい

外上方に丸くおさめる。V期古段階に属する。この他は細片のため、時期の判定はし難い。

須恵器には甕(2・3・9区いずれも整地層出土)、灰釉陶器には椀口縁部(3区整地層最下層出土)、白色土器には椀底部(2区攪乱土層出土)がある。

輸入白磁は椀の底部 (3区整地層最下層出土)がある。

焼締陶器には常滑甕など(1・9区攪乱土層、3区整地層最下層出土)がある。鎌倉時代から室 町時代に属する。

染付は、伊万里の小片(3区整地層最下層出土)がある。施釉陶器には京焼(5区盛土層出土)がある。

(2) 瓦類

瓦類は各調査区から出土した。軒丸瓦、平瓦、丸瓦、桟瓦などがある。いずれも小片で図示できるものはない。軒丸瓦は1片ある。縁部小片で磨滅が激しく、文様・手法など不明である。平瓦には裏面に布目の付くものがある。これらは3区整地層から出土した。

(3) 銭貨(図78·79、表9)

銭貨は10枚出土した。3区整地層最下層から、10枚が癒着した状態で出土した。錆が激しく種類の判明しないものが2枚(銭9・10)あるが、他の8枚はすべて中世の渡来銭である。至元通寳は元からの渡来銭である。天聖元寳(銭2)・聖宋元寳(銭6)は渡来量が多く近世にも流通していた。開元通寳(銭1)・元豊通寳(銭3・4)・元祐通寳(銭5)・永楽通寳(銭8)は16世紀後半から17世紀前半にかけて模鋳銭が多く造られている。

4. 小 結

今回の発掘調査は、1~3区、5~9区の8箇所を対象とし、調査区域は、妙心寺中心伽藍周辺から北部に及ぶ。今回も、各調査区の大半は埋設管による大規模な攪乱を受けていたが、平安時代、鎌倉から室町時代、江戸時代の遺構を検出することができた。以下に時代順に成果をまとめる。

平安時代 溝・土坑がある。2区で溝1を検出した。無差小路西側溝と考えられる。この調査区の南側にある春光院での試掘調査では、無差小路の西側溝である可能性のある溝を検出しており、それに連続すると考えられる。3区で検出した土坑1は正親小路南築地芯想定線から約1.0m宅地側に入った地点であり、六町側の築地内溝の底部がわずかに残った可能性がある。

他の調査区もそれぞれ、条坊路に想定される位置にあたるが、関連する遺構は検出できなかった。当該地の上面が後世の遺構により削平を受けたと考えられる。

鎌倉時代から室町時代 遺物包含層、柱穴などがある。1区で検出した暗褐色シルトの遺物包含層は、この南側で行った調査その2の8区で検出した遺構(土坑1)に連続すると考えられる。8区では、柱穴1を検出している。妙心寺開創期の遺構である可能性が考えられる。

江戸時代 整地層を検出した。1区で検出した整地層は妙心寺旧参道の基礎と考えられる。3区で検出した整地層からは伊万里小片・輸入銭貨が出土し、この整地層は、江戸時代前期に寺域が拡張された時に行われた整地と考えられる。他にも、5区・8区・9区で整地層を検出した。8区以外の整地層はいずれも、3層以上重ねられ、上面は黄色系粘土で固く敲き締められている。江戸時代に行われた造成工事が丁寧であったことを物語っている。

註

1) 堀 大輔「平安京右京北辺四坊六・七町跡・史跡妙心寺境内 №12」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』 京都市文化市民局 2013年

第5章 調査その4 (平成26年度)

1. 経 過

調査その4は、北門貯水槽予定地について実施した発掘調査である。

調査地は、北門の東側で、一条通に沿う築地塀と塔頭隣華院に挟まれた区域であり、調査直前まで石畳が敷かれた東西通路、駐車場、公衆トイレが設置されていた。当該地は、史跡妙心寺境内、平安京右京北辺四坊五町跡及び条坊小路の山小路跡に該当する。

今回の調査では、3箇所に調査区(1~3区)を設け、2014年9月24日より準備工を始め、9月29日に3区の調査から開始した。3区は既設の枡部分を避け、東西に2分して調査を進め、10月2日に埋め戻し、終了した。

1・2区の箇所には、南側に石畳と北側に駐車場のアスファルトがあったため、まずそれらの撤去工事を9月29日から行い、その工事終了後の10月20日に調査を開始した。この2箇所の調査区の重機掘削による掘削土は場外に搬出し処分した。2区では、大部分が現在ある貯水槽設置時に攪乱を受けており、その深さは1.7m以上あった。1区では、南半は現石畳の基礎で地山まで削平されていた。北半では現地表面直下が地山であった。中央部に、江戸時代前期の東西方向の溝や井戸を検出した。日程調整のため、一時中断を挟んで、2015年1月8日に作業を終了した。



図80 1区調査前全景(南西から)



図81 2区調査前全景(南東から)



図82 3区調査前全景(東から)



図83 1区調査風景(南東から)

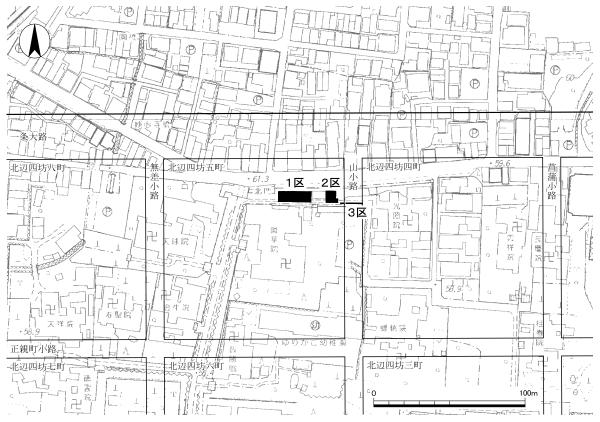


図84 調査その4 調査位置図(1:2,500)

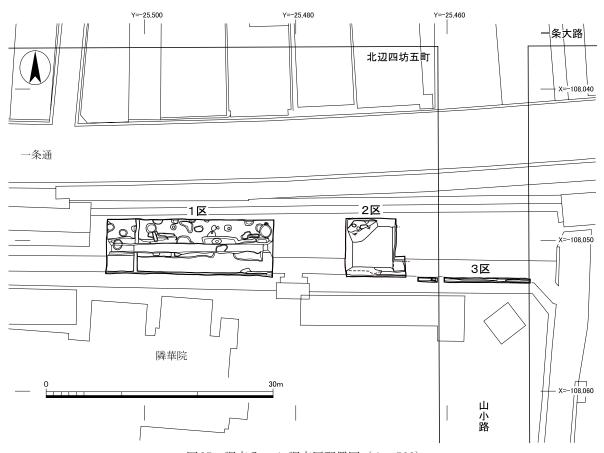


図85 調査その4 調査区配置図(1:500)

2. 遺 構

(1) 1区の遺構(図86~88、図版32・33)

平安京右京北辺四坊五町の北東に位置する。調査面積は165㎡である。石畳、アスファルトを撤 去する工事の後、調査に入った。

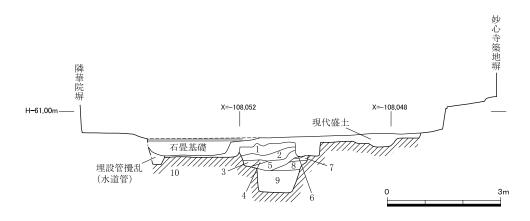
基本層序

北半は駐車場アスファルト及び盛土の直下が黄褐色砂礫の地山となる。地山面の標高は60.3 mで ある。南半は東西通路の石畳とその基礎部直下で地山が露出、この標高は59.7m前後で北側より約 0.6 m低く、石畳敷設時に地山が削られていることがわかった。遺構は全て地山上面で検出した。

遺構

調査区の中央部では、東西に通る溝10、その西端下層で井戸12を検出した。

調査区の北側では、電柱控え柱跡などの近代攪乱、松の移植痕と考えられる不定形な土坑、幕末

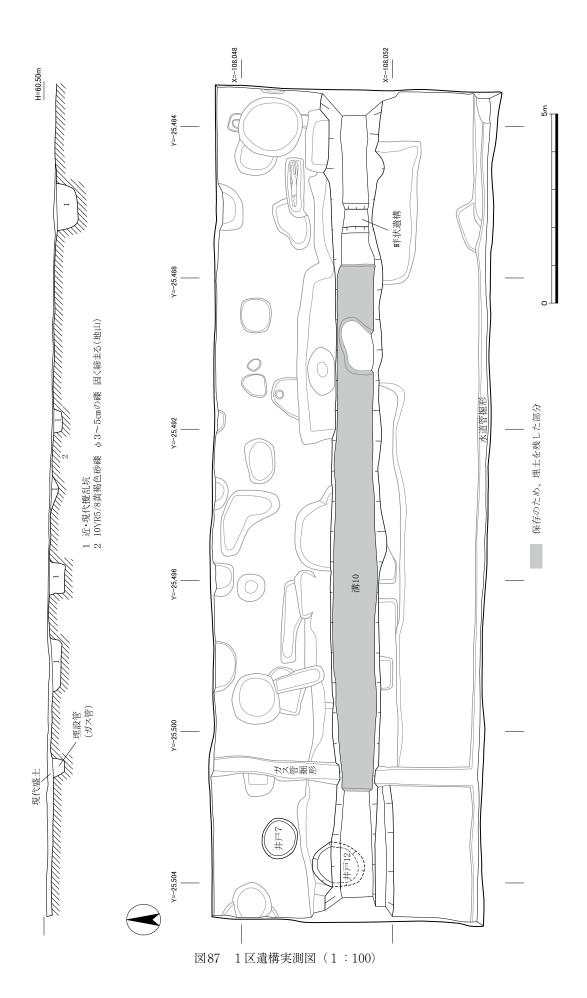


- 1 5YR5/6明赤褐色砂泥 粘質 桟瓦混じる(昭和時代に埋めた土)
- 2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(昭和時代に埋めた土)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 陶磁器類、桟瓦など多量に混じる(昭和時代に埋めた土)
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥(昭和時代に埋めた土)
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥 桟瓦多量に混じる φ3~4cmの礫多量に混じる(昭和時代に埋めた土)
- 6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫 62~3cmの礫 7 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 62~3cmの礫多量に混じる
- 8 10YR3/4暗褐色砂泥 φ2~5cmの礫混じる
- 9 10YR4/4褐色砂泥 10YR5/8黄褐色砂泥が混じる 土器含む(溝10)
- 10 10YR5/8黄褐色砂礫 φ3~5cmの礫 固く締まる(地山)

図86 1 区西壁断面図 (1:100)

表10 調査その4 遺構概要表

時 代	遺構				
н д 17	1区	2区	3区		
江戸時代初期	井戸12				
江戸時代前期	溝10				

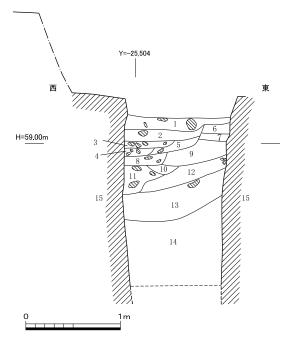


- 92 -

から明治時代の井戸などを検出した。

調査区の南側では、東西通路の石畳の基礎部 (鉄筋コンクリート) や東西に通る旧水道管によ り攪乱を受け、遺構・遺物は検出できなかった。 溝10 (図版32-2・3) 調査区中央部で東 西方向の溝10を検出した。この溝は上辺1.1m、 下辺0.7m、深さ0.7mの断面逆台形で、地山を掘 り込んで造られている。東西の両端は調査区外 へ延び、長さは20m以上となる。底部の標高は 西端、東端とも58.86mである。埋土には水流の あった形跡は無く茶褐色砂泥層の一層である。 また、溝東端部で溝底に幅0.45m、高さ0.15mの 大きさで地山が畔状に残されている箇所を検出、 これも水流がなかったことを示す。溝の埋土が 単一層であることから、一気に埋められたと考 えられる。出土する遺物は、17世紀末期から18 世紀初頭のものまでである。

井戸12 (図88、図版33-2) 調査区西端部、 溝10の下層で検出した井戸である。直径1.2mの 素掘り円形井戸で検出面から深さ2.0 m (標高 57.5m)まで掘り下げたが、底部に達せず、安全



- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 φ5~15cmの礫少量含む
- 2 10YR4/4褐色砂泥 φ2~10cmの礫含む
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂礫 φ3~5cmの礫
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 φ3~5cmの礫
- 5 7.5YR5/8明褐色砂礫 φ3~5cmの礫
- 6 10YR4/4褐色砂泥 φ1~2cmの礫少量、φ1~2cmの 10YR5/8黄褐色粘土塊含む
- 7 7.5YR4/6褐色砂泥 ϕ 1~2cmの10YR5/8黄褐色粘土塊含む
- 8 7.5YR5/8明褐色砂泥 φ5~8cmの礫少量含む
- 9 7.5YR4/4褐色砂泥 砂が多い
- 10 7.5YR5/6明褐色砂泥 砂が多い
- 11 10YR4/6褐色粘質土 φ10~12cmの礫を中量含む
- 12 10YR5/6黄褐色砂泥 砂が多い 水分多い
- 13 10YR4/6褐色砂泥 砂が多い 水分多い
- 14 10YR4/4褐色砂泥 砂が多い 水分多い 15 10YR6/8明黄褐色砂礫 φ2~5cmの礫(地山)

図88 井戸12断面図(1:40)

面を考慮して掘り止めた。この井戸の上層は礫を多く含む暗褐色系砂泥層、下層は砂を多く含む褐色系砂泥層に分けられる。埋土から江戸時代前期(17世紀前半)の遺物が出土した。

(2) 2区の遺構(図89、図版34-1)

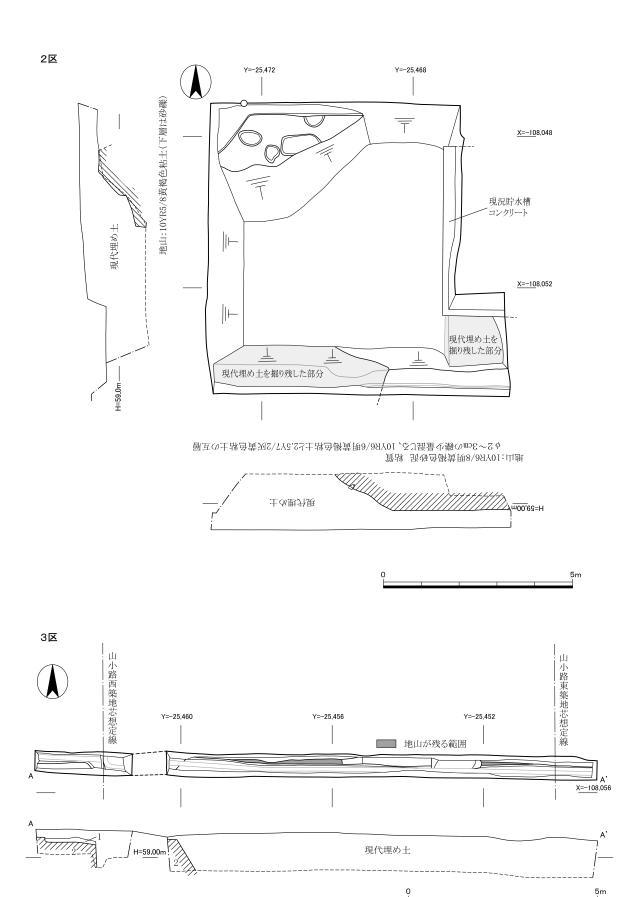
平安京右京北辺四坊五町の北東寄りに位置する。調査面積は約60㎡である。石畳、アスファルトを撤去する工事の後、調査に入った。

基本層序

東側で現貯水槽(昭和40年代前半の建造)の西端のコンクリート壁が露出した。調査区のほとんどがその貯水槽建造時に行われたと思われる掘り込みであった。現地表面から深さ1.7mまで掘り下げたが、底部に達せず、安全面を考慮して掘り止めた。調査区の北西部と南東部でわずかに地山が残る部分があったが、遺構は検出できなかった。

潰構

調査区の北西部の地山が残る部分において、近代の攪乱坑があったが、遺構は検出できなかった。



1 10YR4/4褐色砂泥 ϕ 2~5cmの礫多量に混じる 2 7.5YR5/8明褐色砂泥 ϕ 2~3cmの礫多量に混じる、 ϕ 20~30cmの2.5Y6/6明黄褐色粘土ブロックが縞状に入る(地山)

図89 2 · 3 区遺構実測図 (1:100)

(3) 3区の遺構(図89、図版34-2・3)

平安京条坊路の山小路の路面、東西両側溝、東西両築地芯想定地に位置する。この調査区は南北 1.0 m、東西 15.0 mの計画であったが、北の石畳、南の生垣の間であるため、南北を 0.7 mとした。また、既設の枡部分は掘り残したため、調査区は東西に 2分した。調査面積は約10 ㎡である。

調査区全域が水道管による攪乱を受けており、遺構は検出できなかったが、部分的に地山を検出した。

基本層序

東半部では現地表から1.0 mまで現代の攪乱土層が堆積し、以下の一部で帯状に明黄褐色粘土層の地山を検出した。地山の標高は58.5 mである。西端部では一部で攪乱土層が浅く、現地表下から0.2 mで地山を検出した。その標高は59.5 mである。

3. 遺 物

整理箱9箱の遺物が出土した。内容は土器類、瓦類、銭貨、金属製品などである。以下に解説する。

(1) 土器類(図90~92、図版35)

1 区溝10 (図90、図版35) 土師器、輸入陶磁器、瓦器、国産磁器、染付、施釉陶器、焼締陶器、匣鉢などがある。土師器には皿N $(1\cdot 2)$ 、皿S $(3\sim 10)$ 、火入れ (11)、焙烙 $(12\cdot 13)$ などがある。皿Nは小型で、(1)は口径5.6cmで浅黄橙色を呈し、(2)は口径7.0cmで黒褐色を呈する。皿Sは口径9.5cm前後で器壁の肥厚したもの $(3\sim 6)$ と、口径10.5cm前後で底部内面見込みに圏線が巡るもの $(7\sim 10)$ の2群に分かれる。 $7\cdot 8$ は黒色を呈する。小型方形火入れ (11)は、平坦な底部から体部が垂直に立ち上がる。口縁端部は平坦。底部四隅に円形の脚取り付け痕が

時代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク 未掲載 遺物箱数	B・C ランク 箱数
鎌倉時代 ~室町時代	土師器、輸入陶磁器、瓦	1箱		1箱	0箱
江戸時代前期 ~中期	土師器、瓦器、磁器、染付、 施釉陶器、焼締陶器、瓦、 石製品、金属製品、銭貨	8箱	土師器13点、瓦器1点、国産白磁1点、染付10点、施釉陶器2点、焼締陶器2点、匣鉢1点、瓦2点、金属製品1点	5箱	0箱
江戸時代末期 ~明治時代	磁器、焼締陶器、施釉陶器、 瓦	3箱	磁器 3 点	3箱	0箱
合 計		12箱	36点(3箱)	9箱	0箱

表11 調査その4 遺物概要表

[※] コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

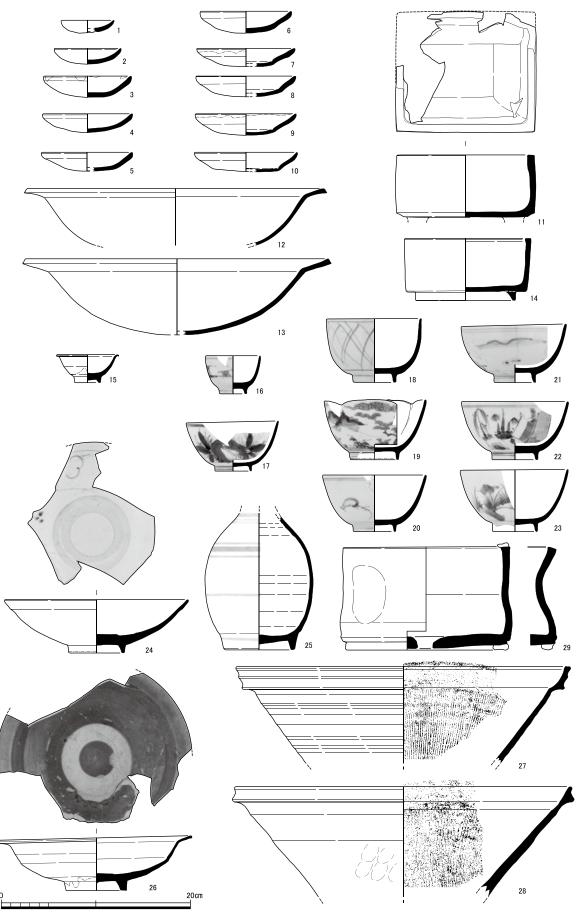


図90 溝10出土土器実測図(1:4)

ある。外面は丁寧に磨き、平滑に仕上げる。焙烙(12・13)は、いずれも口縁端部を外方へ折れ曲 げ、口縁端部はつまみ上げずにナデ調整する。口縁端部までの全体を台型で成形している。12は外 面全面に煤が付着する。内面は平滑。13は外面全面に煤が付着、内面に底部には焦げ付きがある。 瓦器には香炉(14)がある。平坦な底部から垂直に体部が立ち上がる。口縁端部は平坦。高台を貼 り付ける。体部外面はヘラミガキを施し、非常に平滑である。全体に黒色を呈する。国産磁器には 白磁小椀(15)がある。口径6.4cm、口縁部は外反する。体部外面に焼成時の付着物がある。肥前 産である。染付には椀($16\sim23$)、皿(24)、壷(25)などがある。すべて肥前産で、呉須で文様 が描かれる。16は口径5.7cmの小椀で、畳付きは釉剥ぎされる。文様は山水文のようにも見えるが 不明。17は草花文が描かれる。高台内には圏線、「宣徳年製」の銘がある。18は直線で簡略化して 二重網模様を描く。見込み、高台部には文様はない。釉薬は明緑灰色を呈する。19は深めの椀で、 輪花に成形される。雲や松を描く。見込みに二重圏線、中央にコンニャク版で五弁花を付ける。高 台内にも圏線が施され、「嘉」の銘を入れる。20は草花文を描く。高台内、内面ともに文様はない。 21は山水文を描く。見込みに二重圏線、中央に草花文を描く。高台内に異字体を書く。釉薬は明緑 灰色を呈する。22は山水文を描く。高台内には圏線、異字体を書く。内面に文様はない。23は草 花文を描く。見込みにも草が描かれる。高台内には圏線、「太明」の銘がある。皿(24) は体部は 湾曲して大きく開く。口縁端部は肥厚する。全面に釉がかかるが、見込みは蛇の目剥ぎ、高台畳付 きは釉を剥ぐ。内面底部に重ね焼き痕が輪状にある。欠損が多いため、文様は不明である。壷(25) は上部を欠損する。体部には太いラインと細いラインで圏線を巡らせ文様としている。高台は削り 出しである。施釉陶器には皿(26)がある。体部は外側に大きく開き、中位に稜が付く。口縁部は 外方へ折れ曲げる。銅緑釉がかかるが、見込みは蛇の目剥ぎである。内面底部と高台に目跡が5箇 所ある。唐津内野山北窯産である。焼締陶器には擂鉢(27・28)がある。27は外面にはロクロ目が 明瞭に残る。内面は1.5cm7本単位で時計回りに施文されている。信楽産である。28は外面にロク ロ目、指頭圧痕が残る。内面は2.2cm8本単位で反時計回りに施文される。焼成は良好で堅致であ るが胎土に砂粒が入り、石はぜがある。一部に自然釉がかかる。備前産である。匣鉢は3個体分出 土した。29の胎土は信楽であるが、器壁が薄く華奢な作りから、仁清窯のものの可能性がある。体 部2箇所に大きな歪みがある。上端と下端には、窯入れ時に挟んだ粘土が付着する。底部中央に径 1.6cmの孔が穿たれており、最終的には植木鉢に転用されている。小片のため、図示できなかった が、輸入陶磁器には青磁香炉、呉器平椀がある。遺物の時期はⅧ期古段階から中段階に属する。

1区井戸12(図91) 施釉陶器がある。30は瀬戸美濃天目茶椀である。口径は11.5cm。体部下方

外面には回転ケズリの跡が明瞭に残る。体部上方は肥厚気味で、口 縁部でほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は小さく外反する。胎土は 灰黄色で釉はにぶい赤褐色に発色する。遺物の時期は京都XI期中段 階から新段階に属する。

2区(図92) 攪乱土からの出土ではあるが、外面に「正」「法」 「山」の文字が大きく配される磁器茶椀の破片が多く出土した。高台

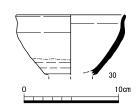


図91 井戸12出土土器実測図 (1:4)

内には「美濃笠原」の銘がある。近代のものである。

(2) 瓦類 (図93)

軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦などがある。平瓦 が最も多い。軒丸瓦には、三つ巴、輪違い文があ る。軒平瓦には、宝珠唐草文がある。

瓦1は輪違い文を配した小型軒丸瓦である。 キラコが付着する。側面は横ナデ。瓦当部裏面は

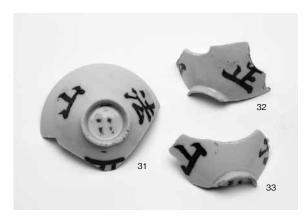


図92 2区出土磁器

剥離しているため手法・形態は不明である。なお、この文様は、南接する隣華院の定紋と同じで、 同文の軒丸瓦は現在も隣華院の蔵に葺かれている。溝10西端から出土した。

瓦2は丸瓦の玉縁部である。玉縁取り付き部の幅は14.0cmで、玉縁の長さは4.5cmである。凹面に糸切り痕と布目が付き、指頭圧痕が明瞭に付く。凸面は縦ナデで、ヘラミガキを施す。両側縁の内面は丁寧にヘラで面取りを施す。玉縁部は横ナデである。焼成は硬質で表面は暗灰色を呈する。井戸12から出土した。

(3) 銭貨

銭貨は1枚出土した。崩壊しているため図示できなかったが、寛永通寶である。溝10東端から出土した。

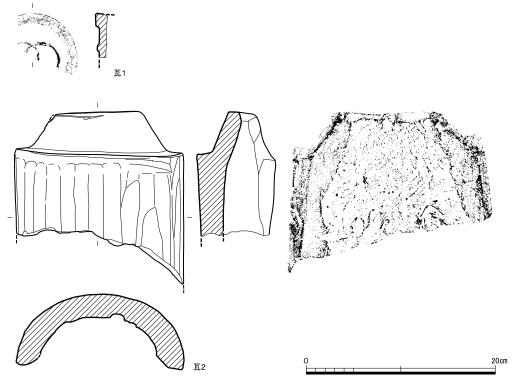


図93 出土瓦拓影及び実測図(1:4)

(4) 金属製品 (図94)

金属製品には、キセル、鉄釘などがある。キセルはすべて溝10 から出土した。いずれも雁首で西部・中央部・東部から各1点 ずつ出土した。残存状況の良い金1を図示する。火皿の下と銅管 に、製作した際の継ぎ目が観察できる。江戸時代のものである。

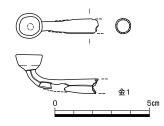


図94 金属製品実測図(1:2)

4. 小 結

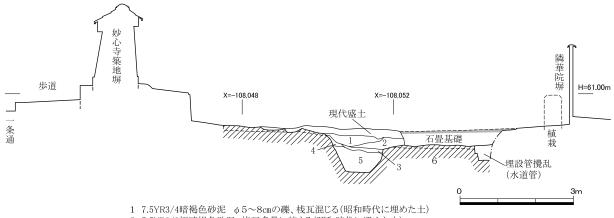
今回の調査地は妙心寺北端に位置する。万治元年の境内絵図の境内絵図には、北門の東側、調査 地のあたりには、松の木と土手が描かれている。

今回の調査では、すべての調査区において、平安京に関連する遺構・遺物はなかった。江戸時代 前期の井戸・溝などを検出することができた。以下に成果をまとめる。

1トレンチ中央部では、現築地塀に併行して東西20m以上にわたって江戸時代前期の溝10を検出した。この溝の下層で見つかった井戸12は出土する遺物から17世紀前半に埋められていることから、溝10はこの頃に開削されたものと考えられる。この溝は断面逆台形、水流のあった形跡は無く、埋土の状況及び出土遺物から1700年前後に一気に埋められていることがわかった。

さて、調査区北側、一条通の南側歩道では、立会調査において幅2.2 m以上、深さ2.0 mの江戸時代の東西方向の溝(濠340)の北半部と北肩を検出している。この溝の北肩は現在の歩道肩口にあたっている。(図95参照)

妙心寺の日誌である『記録』に所収の「北門前普請之記 元禄八年」に、元禄7年(1694)本山による北門前の普請の記事があり、一条通に面した土居堀(妙心寺外郭)周辺の作事についての記述がある。この記述によると、妙心寺北側の土居堀を北側に移築したこと、さらに南側の隣華院が北側の土居堀を埋め築地に変えたことなどが記されている。今回検出した溝10はこの作事の時に



- 2 7.5YR2/3極暗褐色砂泥 桟瓦多量に詰まる(昭和時代に埋めた土)
- 3 10YR4/4褐色粘質土 締まる ϕ 2 \sim 3cmの礫混じる(昭和時代に埋めた土)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR3/4暗褐色砂泥砂泥 粘質 炭、土器混じる(溝10)
- 6 10YR5/8黄褐色砂礫 ϕ 3~5cmの礫 固く締まる(地山)

図95 1区東壁及び一条通から隣華院断面図(1:100)

伴って埋められた可能性が考えられる。したがって、この溝10の具体的性格については、妙心寺北限の土居に伴う内溝あるいは隣華院の外堀である可能性が考えられる。

なお、この溝10については、江戸時代の妙心寺の作事に伴う重要遺構と判断され、調査区西端から東へ17.5m分を現状保存することとなり、保護砂・不織布などを被せて遺構を保護する措置をとった。

註

1) 『京都嵯峨野の遺跡-広域立会調査による遺跡調査報告-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年 P 24に濠340として報告されている。

第6章 まとめ

平成25年度は、調査その1として防火水槽の本体設置工事に伴う調査を本所調査区、微妙殿調査区、韶陽院跡調査区の3箇所で実施、調査その2として配管路工事に伴う調査を境内の12箇所で実施した。平成26年度は、調査その3として配管工事に伴う調査を境内の8箇所で実施、調査その4として北門防火水槽の本体設置工事に伴う調査を1~3区の調査区に分けて実施した。

これらの調査で得られた成果を、以下に要約する。

条坊関連遺構 調査その1では、微妙殿調査区で土御門大路北側溝相当位置で東西方向の溝(溝40)を検出した。出土遺物から鎌倉時代に埋没したと考えられるが、条坊に伴う遺構の可能性は高いといえる。

調査その2では、8区・10区・11区・14区で該当する遺構を検出した。8区土坑1は無差小路 東側溝相当位置にある。10区溝6は、土御門大路南築地芯想定線より北へ4.1 mにあり、やや路面 寄りに位置している。11区溝1は、無差小路東築地芯想定線より東へ約3.2 mにあり、十町側の築 地内溝の可能性がある。また14区土坑18は、十町内東三行の東西中心にあり、区画に関連する遺 構の可能性がある。

調査その3では、1区・2区・3区で該当する遺構を検出した。1区遺物包含層としたものは、 無差小路東側溝相当位置にあり、上述した調査その2の8区で検出した土坑1に連続すると考えられる。2区溝1は無差小路西築地芯の相当位置にある。この調査区の南側にある春光院での試掘調査では、無差小路西側溝の可能性のある溝を検出しており、それに連続すると考えられる。この遺構は規模が大きく、南北に延長する形状を想定すると、雨水排出を目的として無差小路東側溝が大規模化した可能性が考えられる。3区土坑1は正親小路南築地芯想定線より南へ約1.0mに位置するため、六町側の築地内溝の可能性がある。

なお、条坊遺構の検出が想定される位置に設定された調査区では、上記以外には該当する遺構は 検出できなかった。調査その $203\cdot6$ 区、調査その $305\cdot8$ 区は地山面が浅いため、遺構は削 平された可能性がある。

平安時代 調査その1では、本所調査区で池30を検出した。この池は邸宅内に設けられた園池の一部とみられ、自然湿地を利用している。同様の池状遺構はこの北西部の立会調査でも確認されており、埋没時期は異なるものの関連性があるとみられる。微妙殿調査区、韶陽院跡調査区では平安時代前・中期の遺構・遺物は認められなかったが、周辺の調査では平安時代前期・後期の遺構が確認されており、周囲には遺構が遺存する可能性は高い。

調査その2では、14区で土坑18を検出した。

調査その4では、1区と2区が五町の宅地内に位置するが、平安時代の遺構・遺物は認められなかった。この調査区はいずれも地山面が浅いため、遺構は削平された可能性が高い。

鎌倉時代・室町時代 調査その1では、微妙殿調査区で柱穴、土坑など検出した。微妙殿調査区 は妙心寺七堂伽藍の真北側に位置する。 調査その2では、2区・3区・10区・14区で土坑・柱穴・溝などを検出した。3区土坑34は鷹司小路から十町内に至る大規模な遺構で、形態や土層堆積状況から池状遺構となると考えられる。10区では鷹司小路路面相当位置で土坑1・3・5・7、柱穴2、鷹司小路南築地芯想定線上で溝4を検出した。14区では土坑6・12・17と柱穴12基を検出した。

調査その3では、8区で柱穴1を検出した。根石を据える。

室町時代には妙心寺が開創されることから、出土した遺構・遺物は妙心寺の土地利用を示す貴重な成果である。また、当該地域の地山検出面の高低差を比較すると、妙心寺主要伽藍は尾根状の高まりに占地したことが明確になった。

江戸時代前期 現存する妙心寺伽藍の中心建物は、桃山時代から江戸時代前期にかけて整えられていく。

調査その1では、本所調査区で溝1、溝502を検出した。2つの溝は宇多川とほぼ同じ方位で、特に溝1は、涅槃堂の調査で検出された溝60と連続する可能性が高い。溝1の性格については今後さらなる検討が必要である。

調査その3では、1 区・3 区・5 区・8 区・9 区で整地層を検出した。いずれも上面は黄色系粘土で固く敲き締められていた。

調査その4では、1区で溝10・井戸12を検出した。17世紀前半の遺物を含む井戸12を埋めて、溝10が開削されていた。溝10の埋土に含まれる遺物は17世紀後半から18世紀初頭までである。この溝は『北門前普請之記』にある元禄7年(1694)の北門前作事に伴って埋められた溝である可能性が高い。溝10の性格をめぐっては、妙心寺北限の土居堀に伴う内溝、あるいは隣華院の外堀の二通りの考え方ができる。今後、周辺の調査成果を集積して判断する必要があろう。

江戸時代中・後期 調査その1の韶陽院跡調査区では、土取場として利用されたことが判明した。塔頭の北端に位置するため、近場の採掘場として利用されたのであろう。

調査その2の仏殿に東接する3区・14区でも土取穴と考えられる土坑を検出している。妙心寺の仏殿は、江戸時代後期の文政10年(1827)に建立されている。土取穴には多量の花崗岩細片が含まれており、仏殿造営時に、花崗岩を現地で成形した際にでた破片を土取穴に投棄したとみられる。さらに、調査その2の3区では、壁面が熱を受けて赤変した土坑18・19を検出した。当該地で簡素な鍛冶工が行われたとみられる。同3区では、仏殿に係る施設とみられる柱穴を多数検出した。江戸時代の作事を裏付ける多数の遺構を発見したことも今回の調査の大きな成果である。

江戸時代末期から明治時代 調査その1の本所調査区で墓群を検出した。調査区の北側に現存する養源院墓地の南延長部に相当する。埋葬の方法には3種類あることがわかった。墨書をもつ木札など、埋葬儀礼を示す遺物も多く出土した。近世末期の墓制を知る上で貴重な資料となった。

韶陽院調査区では土取穴が埋められた後、畑が広がり、その間に通路や肥溜めが置かれる様子が 判明した。塔頭北端部の景観が復元可能になったことも、今回の調査成果といえる。

図 版



1 本所調査区 東半部全景 (西から)



2 本所調査区 井戸2 (南から)

3 本所調査区 溝1 (南西から)





1 本所調査区 墓群 (南西から)

2 本所調査区 墓16北・16中・16南(北から)



3 本所調査区 墓8 (東から)



4 本所調査区 墓9北 (北東から)



5 本所調査区 墓9中(東から)



6 本所調査区 墓 9 南 (西から)



1 本所調査区 墓10北(東から)



2 本所調査区 墓13 (南から)



3 本所調査区 墓13 (南東から)



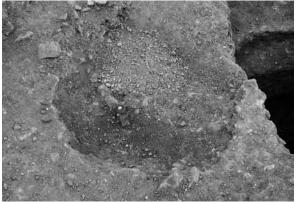
4 本所調査区 墓14 (南から)



5 本所調査区 墓15(北から)



6 本所調査区 墓19 (東から)



本所調査区 墓20 (西から)



本所調査区 墓21 (東から)



1 本所調査区 西半部全景(東から)



2 本所調査区 池30(北東から)



1 本所調査区 南西部全景(北から)



2 本所調査区 溝502 (北から)

3 本所調査区 湿地520(北東から)



1 微妙殿調査区 西半部全景(北東から)



2 微妙殿調査区 東半部全景(北西から)



1 韶陽院跡調査区 全景 1 (東から)



2 韶陽院跡調査区 西端部の状況(北東から)

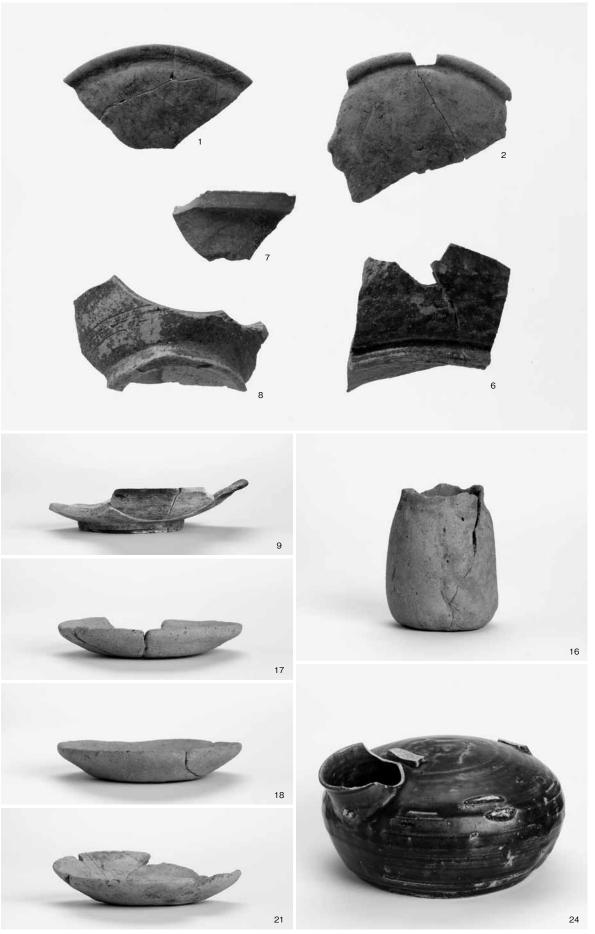


1 韶陽院跡調査区 全景 2 (東から)

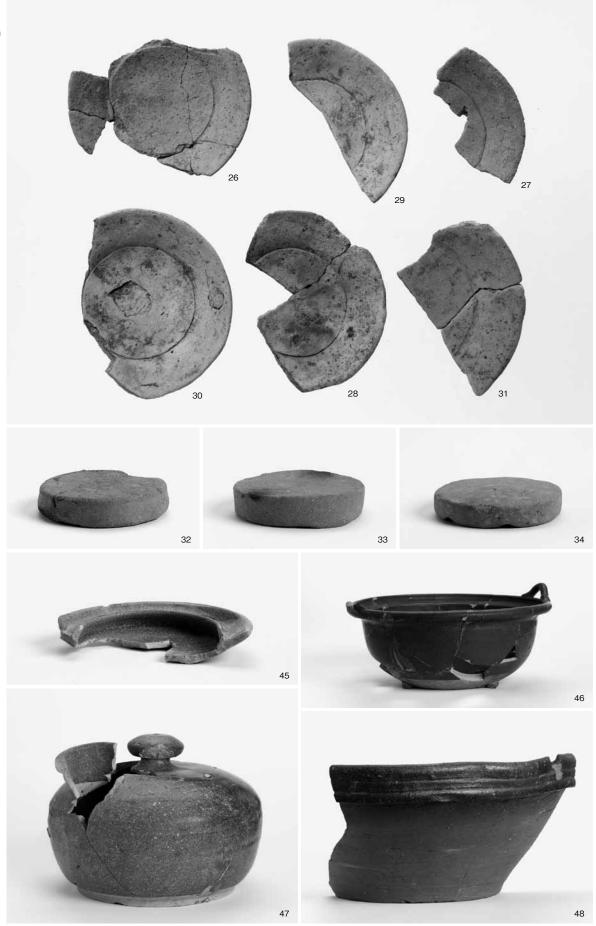


2 韶陽院跡調査区 東半部の土取穴 (西から)

3 韶陽院跡調査区 土管の組み合せ状況 (右上は土坑284、左下は土坑287、南東から)



池30、土坑62·515·519、溝1出土土器



土坑284出土土器



土坑225・墓出土遺物





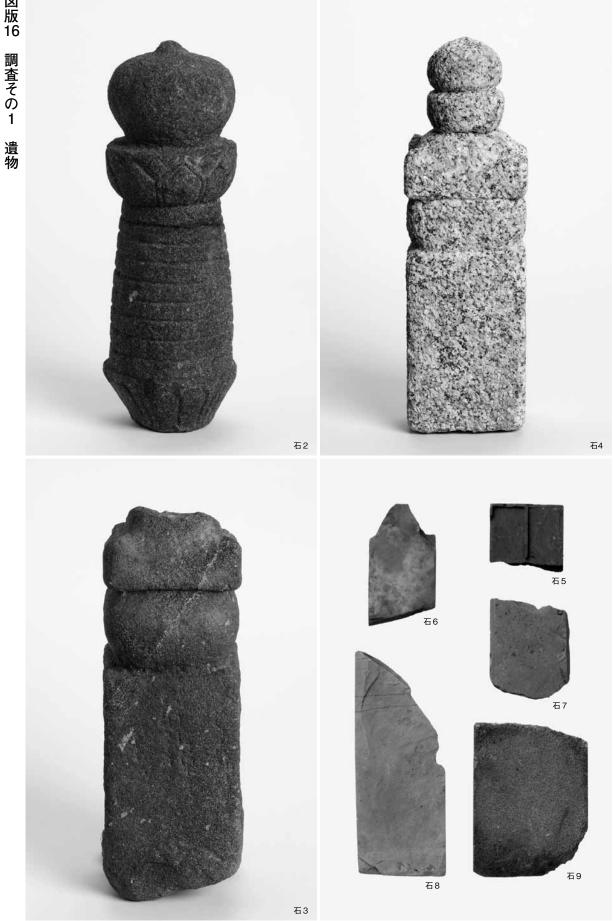
墓甕1

墓甕 2

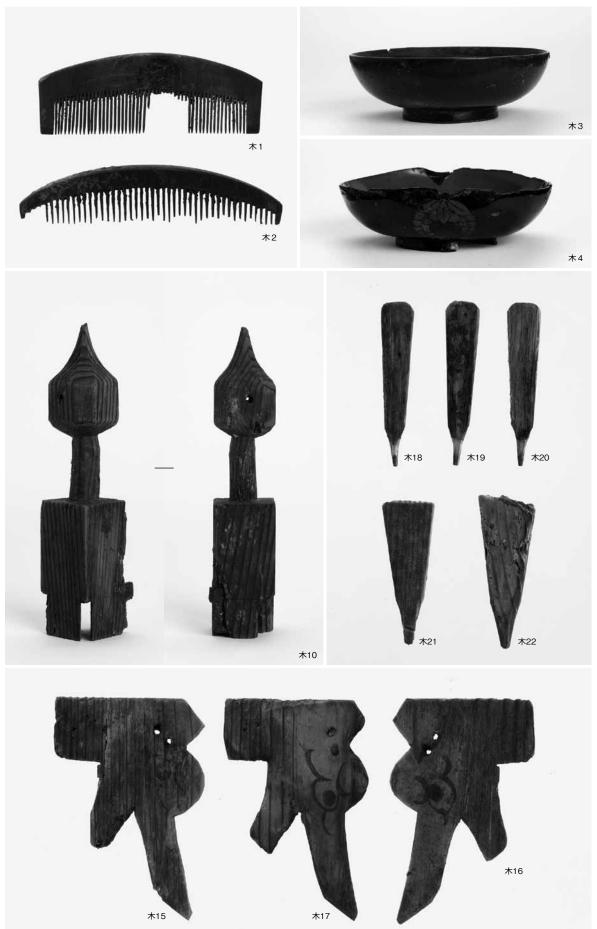
瓦類



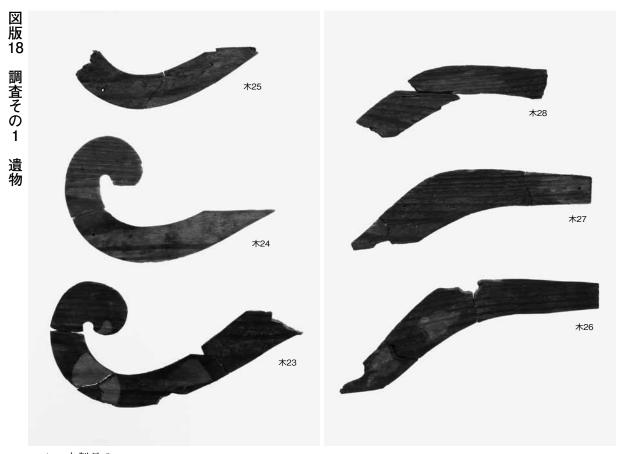
土管・銭貨・金属製品



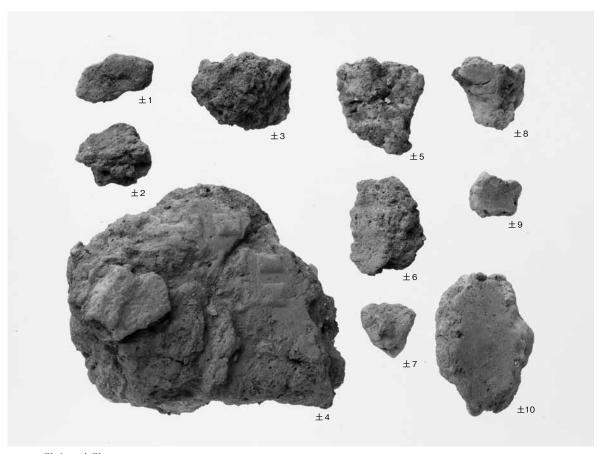
石塔・石製品



木製品1



1 木製品2



2 壁土・窯壁



1 1区全景(西から)



2 2区全景(北東から)



1 3区 全景(北から)



2 3区 南・中拡張区 近景 (東から)

3 3区 北拡張区 近景 (東から)



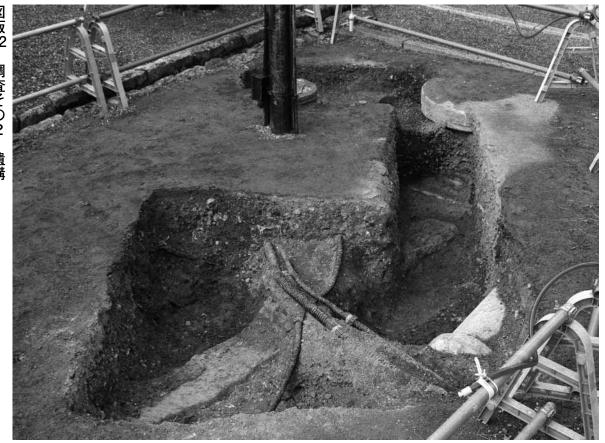
1 4区全景(南から)



2 4区 近景 (北から)

3 4区柱穴2(北から)

図版22 調査その2 遺構



1 6区 全景(南東から)



2 7区 全景 (南から)



1 8区 全景 (西から)



2 9区全景(南から)



1 10区 全景(北から)



2 10区 遺構埋土検出状況(北東から)

3 10区 溝 6 完掘状況(東から)



1 11区 全景 (東から)



2 11区 溝1 完掘状況 (北から)

図版26 調査その2 遺構



1 12区 全景(北から)



2 13区 全景 (北から)



1 14区 全景 (北から)



2 14区 近景 (南東から)

出土遺物





1区 西部全景(西から)

1区 東部全景(東から)



2区 全景(東から)

3区全景(北から)

1 5区 東部全景 (西から)

2 5区 中部全景 (南東から)



3 5区 西部全景 (西から)

4 6区全景(北から)





7区 立会調査断面(北西から)

2 8区全景(西から)



9区 北部全景(南から)



9区 南部全景(南から)



1 1区 全景 (西から)



2 1区 西壁 溝10断面(東から)

3 1区 東壁 溝10断面(西から)



1 1区 溝10東端 完掘状況及び畔状遺構(南西から)



2 1区井戸12 (南から)

1区 保護砂と不織布による遺構保護状況 (西から)



1 2区全景(東から)



2 3区 東部全景 (東から)

3 3区 西部全景 (東から)



1区溝10出土土器類

報告書抄録

ふりがな	しせきみょうしんじけいだい・へいあんきょうあと								
書名	史跡妙心寺境内・平安京跡								
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告								
シリーズ番号	2014-11								
編著者名	丸川義広・辻 裕司・モンペティ恭代								
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所								
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1								
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所								
発行年月日	西暦2015年3月31日								
がりがな 所収遺跡名	がな 所 在 地		コ 市町村	ード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しせきみょうしんじけいだい 史跡妙心寺境内 へいあんきょうあと 平安京跡	ままりとしう 京都市: はなぞのみょ 花園妙	右京区 ゥ են են են են 心寺町	26100	A806 1	35度 01分 25秒	135度 43分 12秒	2013年7月 10日~2015 年1月21日	1, 345 m²	防災施設 耐震改修 事業
所収遺跡名	種別	別主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡妙心寺境内	史跡	平安時代前期· 中期		池		土師器・須恵器・黒色 土器・白色土器		平安時代のない。 平安時代のないでは、 大のないでは、 大のないでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 大のでは、 、 大のでは、 大のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、のでは、 、	
平安京跡	都城跡	平安時代後期		土坑		土師器・須恵器			
		鎌倉時代~室町 時代		土坑・溝・柱穴		土師器・瓦器・輸入陶 磁器・瓦・銭貨			
		江戸時代前期		土坑・溝・井戸・ 整地層		土師器・焼締陶器・染 付・施釉陶器・瓦・壁 土・石製品			
		江戸時代中期		土坑・溝・土取穴		土師器・焼締陶器・染 付・施釉陶器・瓦・壁 土・石製品・金属製品			
		江戸時代後期~ 明治時代		井戸・墓・桶・小 礫敷		土師器・焼締陶器・染付・施釉陶器・瓦・壁 土・石製品・金属製品 ・ガラス製品・木製品 ・土人形			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-11 史跡妙心寺境内·平安京跡

発行日 2015年3月31日

編 集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1

 \mp 602 - 8435 Tel 075 - 415 - 0521 http://www.kyoto-arc.or.jp/

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地

 $\mp 604 - 0093$ Tel 075 - 256 - 0961